

東関東自動車道(木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 8

—富津市岩坂大台遺跡・水神B号横穴群・町田遺跡・
花輪上原遺跡・上一ノ原遺跡・関山やぐら群—

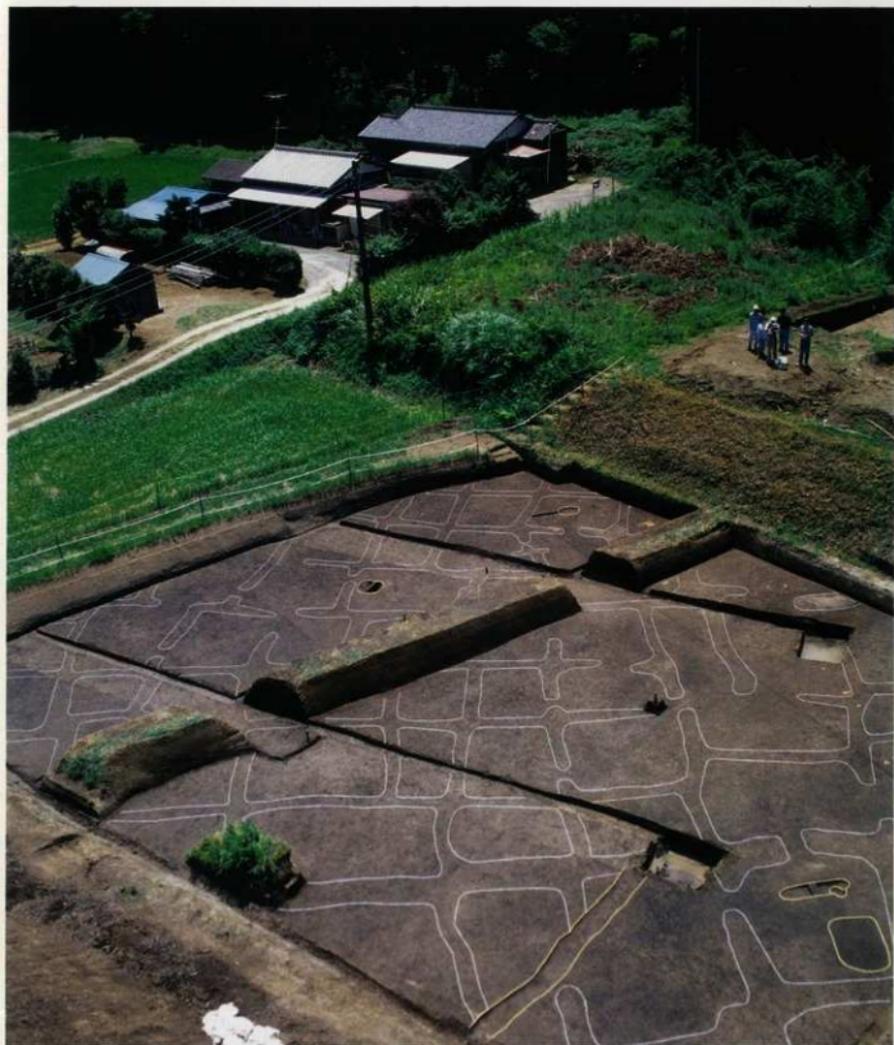
平成18年3月

東日本高速道路株式会社
財団法人 千葉県教育振興財団

東関東自動車道(木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 8

ふつつ いわさかおおだい すいじん まちだ
— 富津市岩坂大台遺跡・水神B号横穴群・町田遺跡・
はなわ うえはら かみいちのはら せきやま
花輪上原遺跡・上一ノ原遺跡・関山やぐら群—





花輪上原（上ノ原）遺跡古墳時代水田跡

▶上ノ原遺跡
古墳時代
水田跡と縄
文時代晩期
の炉跡状遺
構



▶炉跡状遺
構周辺よ
り出土し
た荒海式
土器



▶水神B号
横穴群
4号横穴
奥壁と側
壁



花輪上原（上ノ原）遺跡縄文晩期炉跡状遺構と水神B号横穴群4号横穴内部

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設置され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第541集として、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）の東関東自動車道（木更津・富津線）建設事業に伴って実施した富津市岩坂大台遺跡他5遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良時代の火葬墓、古墳時代後期の横穴墓、古墳時代の水田跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 佐藤健太郎

凡 例

- 1 本書は、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）による館山自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、次のとおりである。

遺 跡 名	遺跡コード	所在地
岩坂大台遺跡	226-001	千葉県富津市岩坂字大台452-1 ほか
水神B号横穴群	226-018	千葉県富津市岩坂字大台442-1
町田遺跡	226-009	千葉県富津市岩坂字町田312-1 ほか
花輪上原遺跡	226-011	千葉県富津市花輪字古草171-1 ほか
上ノ原遺跡	226-010	千葉県富津市相川字上ノ原203-1 ほか
関山やぐら群	226-015	千葉県富津市竹岡字延命寺1466-2 ほか

- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、東日本高速道路株式会社の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日付で財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、次のとおりである。
 - 第1章、第3章 上席研究員 半澤幹雄
 - 第2章 研究員 高梨友子
 - 第4章 上席研究員 沖松信隆
 - 第5章～第7章 上席研究員 小高春雄
 なお、全体の編集は小高春雄が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、東日本高速道路株式会社、富津市教育委員会、財団法人君津郡市文化財センターほか多くの方々から御指導、御協力を得た。また、水神B号横穴群の調査については戸倉茂行氏に、動物遺体については山田敏史氏に御教示いただいた。
- 7 本書で使用した地形図は、次のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1:25,000地形図「上総澳」（NI-54-26-1-4）、同「鹿野山」（NI-54-26-1-1）合成
 - 第2・45図 国土地理院発行 1:50,000地形図「富津」（NI-54-26-1）
 - 第4・5・17・24図 富津市発行 1:2,500地形図No461X-ME 81-3
 - 第18図 国土地理院発行 1:25,000地形図「鬼沼山」（NI-54-26-1-2）、同「上総澳」（NI-54-26-1-4）合成
 - 第31・44図 富津市発行 1:2,500地形図No531X-ME 91-1
 - 第46図 富津市発行 1:2,500地形図No611X-ME 90-4
- 8 本書で使用した座標値は、すべて日本測地系にもとづく平面直角座標であり、図面の方位は座標北である。
- 9 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 10 土器の表記のうち、須恵器については断面黒塗りとし、土師器の丹彩については該当部分を2色刷り（赤）とした。
- 11 使用したスクリーントーンの説明は、挿入中に示した。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査概要及び調査組織等	1
第3節 周辺の歴史的環境	5
第2章 岩坂大台遺跡	8
第1節 調査の概要	8
1 調査の方法	8
2 調査の経過	9
第2節 遺構と遺物	9
1 旧石器時代	9
2 縄文時代	15
3 弥生時代～古墳時代	16
4 奈良時代	20
第3節 まとめ	21
第3章 水神B号横穴群	23
第1節 調査の概要	23
1 調査の方法	23
2 調査の経過	24
第2節 周辺の横穴群	24
第3節 遺構	25
第4節 遺物	32
第5節 まとめ	32
第4章 町田遺跡	34
第1節 調査の概要	34
1 調査の方法	34
2 調査の経過	34
第2節 検出した遺構と遺物	37
1 遺構とその出土遺物	37
2 その他の出土遺物	41
第3節 まとめ	41

第5章 花輪上原遺跡	45
第1節 調査の概要	45
1 調査の方法	45
2 調査の経過	45
第2節 遺構と遺物	45
1 上ノ原遺跡	45
(1) 縄文時代	45
(2) 古墳時代	48
(3) 中世	49
(4) 遺構に伴わない遺物	53
2 花輪遺跡	57
(1) 中世	57
(2) 遺構に伴わない遺物	57
第3節 まとめ	61
1 縄文中期後半と後期の土器について	61
2 縄文晩期の炉跡状遺構と土器	61
3 水田遺構	61
4 中世の花輪・上ノ原	62
第6章 上ノ原遺跡	63
第1節 調査の概要	63
第2節 確認された遺構と遺物	63
第3節 まとめ	63
第7章 閃山やぐら群	65
第1節 調査の概要	65
1 調査の方法	65
2 調査の経過	65
第2節 遺跡の立地環境と周辺のやぐら	65
第3節 やぐら群の調査	65
第4節 やぐら内の石仏・石塔	71
第5節 まとめ	72
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	館山道今次報告遺跡の位置	2	第28図	210号跡・ピット群	40
第2図	周辺の主な遺跡	5	第29図	出土遺物	42
岩坂大台遺跡			第30図	町田古墳全体図	43
第3図	岩坂大台遺跡調査区とグリッド設定図	8	花輪上原遺跡		
第4図	岩坂大台遺跡遺構配置図(上層)	10	第31図	花輪上原遺跡全体図	46
第5図	岩坂大台遺跡遺構配置図(下層)	11	第32図	上ノ原遺跡炉跡状遺構(SX-001)と周辺のピット群	47
第6図	基本層序と旧石器時代石器(第1文化層)出土状況図	12	第33図	炉跡状遺構周辺出土縄文土器	48
第7図	旧石器時代石器1(第1文化層)	13	第34図	上ノ原遺跡検出水田	50
第8図	旧石器時代石器2(第1文化層)	14	第35図	上ノ原遺跡土層断面図及び土坑	51
第9図	旧石器時代石器(第2文化層)と出土状況図	15	第36図	上ノ原遺跡中世溝跡群	52
第10図	縄文時代の遺物	15	第37図	上ノ原遺跡出土縄文土器	54
第11図	S I-001と出土遺物	17	第38図	上ノ原遺跡出土石器等	55
第12図	S K-001	18	第39図	上ノ原遺跡出土土師器・須恵器	56
第13図	S X-002と出土遺物	18	第40図	上ノ原遺跡出土中世陶磁器・かわらけ	56
第14図	大台1号墳	19	第41図	花輪遺跡遺構検出状況	58
第15図	遺構外出土遺物	20	第42図	花輪遺跡SB-001, SD-002, SD-003, SE-001平面図	59
第16図	S X-001と出土遺物	20	第43図	花輪遺跡SB-001, SK-001, SE-001断面図	60
水神B号横穴群			上ノ原遺跡		
第17図	水神B号横穴群の位置	23	第44図	上ノ原遺跡全体図	64
第18図	周辺の横穴分布図	24	関山やぐら群		
第19図	水神B号横穴群分布図	26	第45図	遺跡の位置と周辺のやぐらの分布	66
第20図	横穴平面図, 側面見通図, 奥壁正面図	27	第46図	関山やぐら群と周辺の地形	67
第21図	横穴断面図及び底面整形痕	28	第47図	遺構の位置と分布	68
第22図	横穴高度差正面図, 側面図	29	第48図	1号遺構～3号遺構実測図	69
第23図	出土遺物	30	第49図	4号遺構～6号遺構実測図	71
町田遺跡					
第24図	周辺地形と調査区	35			
第25図	調査区全体図と遺構配置図	36			
第26図	001・003・005号跡	37			
第27図	010号跡	38			

表 目 次

第1表 岩坂大台遺跡石器属性表	22	第4表 町田遺跡石器属性表	41
第2表 水神B号横穴群鉄製品計測表	31	第5表 上ノ原遺跡石器属性表	56
第3表 町田遺跡調査履歴	34		

写真図版目次

巻頭図版1 花輪上原(上ノ原)遺跡古墳時代水田跡	図版17 上ノ原遺跡確認トレンチ各景
巻頭図版2 花輪上原(上ノ原)遺跡縄文晩期炉跡状遺構と水神B号横穴群4号横穴内部	図版18 上ノ原遺跡水田跡検出状況
図版1 館山道今次報告遺跡の位置	図版19 上ノ原遺跡水田跡各景
岩坂大台遺跡	図版20 上ノ原遺跡炉跡状遺構と土坑
図版2 検出遺構	図版21 上ノ原遺跡中世溝跡群
図版3 出土遺物(1)	図版22 花輪遺跡遠景及び本調査区全景
図版4 出土遺物(2)	図版23 花輪遺跡掘立柱建物跡と土坑、溝等各景
水神B号横穴群	図版24 上ノ原遺跡出土遺物(1)
図版5 遠景・近景	図版25 上ノ原遺跡出土遺物(2)
図版6 遺構(1)	図版26 上ノ原遺跡出土遺物(3)
図版7 遺構(2)	上ノ原遺跡
図版8 遺構(3)	図版27 上ノ原遺跡遠景ほか
図版9 遺構(4)	関山やぐら群
図版10 水神B号横穴群1～3号	図版28 やぐら群遠景ほか
図版11 出土遺物	図版29 1号遺構
町田遺跡	図版30 2号・3号遺構
図版12 調査前・調査風景、遺構各景(1)	図版31 3号遺構
図版13 遺構各景(2)	図版32 4号～6号遺構
図版14 出土遺物(1)	図版33 6号～7号遺構ほか
図版15 出土遺物(2)	
花輪上原遺跡	
図版16 上ノ原遺跡遠景及び調査前近景	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

日本道路公団は、房総半島内房地域の発展及び東京湾周辺の主要都市の連携を強化するため、千葉市から富津市に至る高速自動車国道である東関東自動車道千葉富津線（路線名：館山自動車道）約56kmを計画した。このうち、平成7年度に千葉市から木更津南インターチェンジまでの約35kmが開通している。次いで、木更津南ジャンクションから君津市を経て富津竹岡インターチェンジに至る約21kmの区間が東関東自動車道（木更津・富津線）として事業化され、建設が行われることとなった。

この道路建設に当たり、路線上に所在する遺跡について、日本道路公団より千葉県教育委員会に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会があり、これを受けて、千葉県教育委員会では現地踏査を実施し、多数の遺跡が所在する旨、回答した。その取扱いについて、千葉県教育委員会と日本道路公団の間で慎重な協議を重ねられたが、現状保存が困難な部分については、止むを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整い、発掘調査は財団法人千葉県教育振興財団に委託されることとなった。

なお、水神B号横穴群は、富津中央インターチェンジから湊川橋梁までの区間の工事を請け負っていた、小田急建設株式会社・勝村建設株式会社共同企業体が岩坂地区の掘削工事を実施中に事業地東端で新たに発見された横穴である。この横穴はその位置を検討した結果、周知の水神B号横穴群に含まれるものと判断され、横穴群の範囲が西に広がることが確認された。その取扱いについては、既に工事が行われており事業計画の変更が困難なため、記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財団法人千葉県教育振興財団が実施することとなった。

第2節 調査概要及び調査組織

1 調査概要

木更津南ジャンクションから富津竹岡インターチェンジに至る区間のうち、調査対象となった遺跡は計28か所であり、当報告書では富津市岩坂～同関山に至る岩坂大台遺跡他計6遺跡を報告する。

岩坂大台遺跡、水神B号横穴群、町田遺跡、花輪上原遺跡、上一ノ原遺跡は何れも富津市の南半部を流域とする湊川下流域に立地する一方、関山やぐら群はより南の白狐川中流域に所在する。

湊川は下流部において大きく蛇行しながら東京湾に開口するが、その流域は標高100m前後の丘陵が取り巻き、間に標高10m～20m程の段丘面が形成されている。

岩坂大台遺跡は湊川の右岸、鬼冨山塊に連なる標高58mの丘陵先端部に立地する。過去数度にわたって調査が行われ、旧石器時代から奈良・平安時代に及ぶ多くの遺構が検出されている。今回の調査範囲は昭和56年度に財団法人千葉県教育振興財団が調査した遺跡西側の隣接地に相当する。検出した主な遺構は、旧石器時代の文化層2面、弥生時代の住居跡1軒、古墳1基（約2/3は調査済み）、奈良時代火葬墓1基等である。

水神B号横穴群は、岩坂大台遺跡の立地する丘陵の南斜面中位、標高約38mに立地する。鬼冨山塊はその多くに上総層群の駒場凝灰質角礫岩層が分布する一方、丘陵縁辺や湊川中・下流域に面して岩板細砂層



第1図 館山道今次報告遺跡の位置

が分布する。横穴はこの岩板細砂層に掘り込まれている。総数約60基に及ぶ大規模な大溝横穴群に隣接し、A～Cの支群が設定されている。今回発見・調査された横穴はその位置からB支群に含まれた。内容的には時期、形態共に従来の範囲内に入るものであるが、鉄鏝等豊富な遺物を出土した点が特筆される。

町田遺跡は岩坂大台遺跡から南側に見下ろす位置の沖積段丘上に立地する。かつて数回にわたる調査が行われ、概して遺構の密度は低いながらも、二重周溝を有する後期古墳の存在が明らかになっている。今回はその南東コーナー部とその周辺の南北路線幅分の調査を実施した。その結果、従来の成果をほぼ追認する結果を得た。

花輪遺跡は町田遺跡とは湊川を挟んで対峙する標高約17mの沖積段丘面上に立地し、小河川を隔てて上ノ原遺跡の対岸に位置する。かつてその南東部で行われた小規模な調査で中・近世水田の存在が指摘されており、今回の調査はそれに対応する屋敷地の可能性が高い。

上ノ原遺跡は湊川とその支流である相川の合流点、標高約17mの沖積段丘面上に立地する。従来調査例の稀少な湊川左岸にあり、その西側縁辺部を調査した。縄文晩期、古墳時代、中世と計3面の生活面が確認されたが、とりわけ縄文晩期終末荒海期の炉跡状遺構及び古墳時代の水田跡が特筆される。前者は荒海期の遺物が遺構に伴って出土した極めて希な事例であり、後者は富津市内では初めての本格的な水田跡検出例である。

上ノ原遺跡は湊川の支流相川の左岸段丘面上（標高約20m）に立地する。今回が初めての調査となったが、耕地整理の影響もあってか遺構はほとんど検出されなかった。

関山やぐら群は湊川より南の白狐川中流域右岸にあり、標高約30m～40mに及ぶ丘陵中腹に立地する。分布地図ではやぐら1基として登録されていたが、むしろ中・近世の窟祠・窟堂群を含む多様な岩窟群であることが判明した。また、現在でもかたちを変え信仰の場となっていることも確認された。

2 調査組織等

<発掘調査>

平成12年度

上ノ原遺跡

期 間 平成13年1月9日～平成13年1月31日
組 織 南部調査事務所長 高田 博、担当職員 主席研究員 土原治雄
内 容 確認調査 上層 444㎡/4,437㎡

平成13年度

花輪上原遺跡（上ノ原遺跡）

期 間 平成13年5月1日～平成13年7月13日、平成14年1月7日～平成14年1月15日
組 織 南部調査事務所長 高田 博、担当職員 研究員 半澤幹雄
内 容 確認調査 上層 550㎡/5,530㎡、本調査 上層 750㎡

関山やぐら群

期 間 平成14年3月1日～平成14年3月29日
組 織 南部調査事務所長 高田 博、担当職員 研究員 半澤幹雄

内 容 関山やぐら群 本調査 やぐら等8基

平成14年度

花輪上原遺跡 (花輪遺跡)

期 間 平成14年4月16日～平成14年5月27日

組 織 南部調査事務所長 鈴木定明, 担当職員 研究員 半澤幹雄

内 容 確認調査 上層 450㎡/4,500㎡, 本調査 上層 250㎡

町田遺跡

期 間 平成14年9月2日～平成14年12月16日, 平成15年2月24日～平成15年3月27日

組 織 南部調査事務所長 鈴木定明, 担当職員 上席研究員 田島 新, 研究員 半澤幹雄

内 容 確認調査 上層 1,861㎡/18,613㎡, 本調査 上層550㎡

岩坂大台遺跡

期 間 平成15年2月24日～平成15年3月27日

組 織 南部調査事務所長 鈴木定明, 担当職員 上席研究員 田島 新

内 容 確認調査 上層 144㎡/1,435㎡, 下層 57㎡/1,435㎡, 本調査 上層 136㎡ 下層 100㎡

平成15年度

町田遺跡

期 間 平成15年9月1日～平成15年9月9日

組 織 南部調査事務所長 鈴木定明, 担当職員 上席研究員 田島 新

内 容 確認調査 上層 279㎡/2,792㎡ (確認調査のみ)

平成16年度

水神B号横穴群

期 間 平成16年10月5日～平成16年10月25日

組 織 南部調査事務所長 高田 博, 担当職員 上席研究員 半澤幹雄

内 容 水神B号横穴群 本調査 横穴1基

<整理作業>

平成16年度

期 間 平成17年2月1日～平成17年3月31日

組 織 南部調査事務所長 高田 博, 担当職員 上席研究員 伊藤智樹, 上席研究員 半澤幹雄

内 容 水神B号横穴群 (水洗・注記～編集), 花輪上原遺跡 (水洗・注記～実測)

平成17年度

期 間 平成17年4月1日～平成17年5月31日

平成17年9月1日～平成17年9月30日

平成17年11月1日～平成17年12月15日

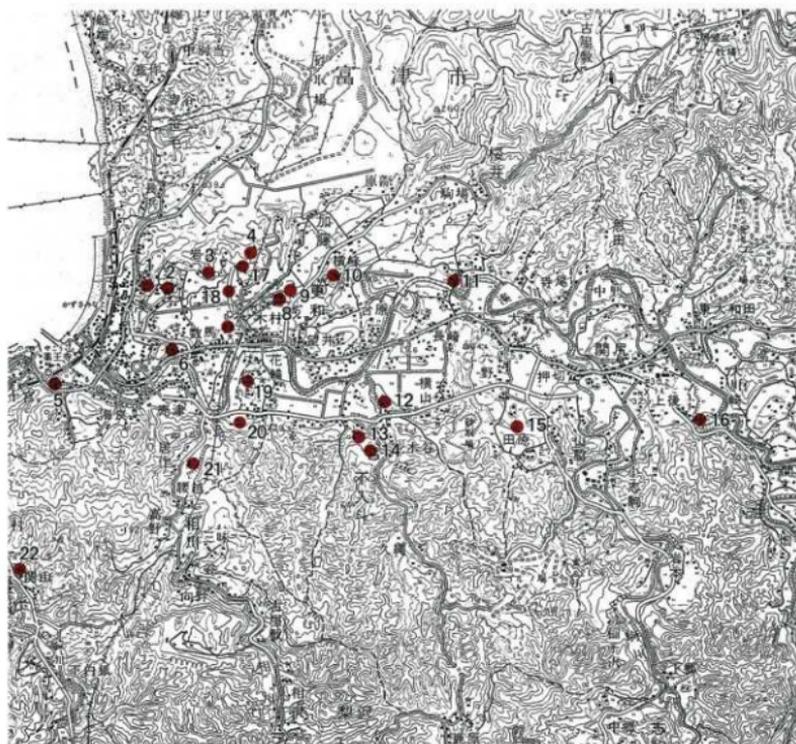
組 織 南部調査事務所長 高田 博, 担当職員 上席研究員 今泉 潔, 上席研究員 麻生

正信, 上席研究員 小高春雄, 上席研究員 沖松信隆, 研究員 高梨友子

- 内 容 整理作業 岩板大台遺跡 (水洗・注記～報告書刊行)
水神B号横穴群 (報告書刊行)
町田遺跡 (水洗・注記～報告書刊行)
花輪上原遺跡 (実測～報告書刊行)
上一ノ原遺跡 (記録整理～報告書刊行)
関山やぐら群 (記録整理～報告書刊行)

第3節 周辺の歴史的環境

今回報告する遺跡群は関山やぐら群を除けば何れも湊川を挟んで近接する位置にあることから、個々の



(国土地理院1:50,000富津市)

- 1 山崎横穴群 2 東天王台遺跡 3 大崎横穴群 4 岩板大台遺跡 5 十宮貝塚 6 岩井遺跡 7 町田遺跡 8 上北原古墳
9 塚田古墳 10 横峰遺跡 11 西ノ台遺跡 12 春日山(不入斗)貝塚 13 陣子遺跡 14 二反田遺跡 15 田原遺跡 16 天神台遺跡
17 水神B号横穴群 18 町田遺跡 19 花輪遺跡 20 上ノ原遺跡 21 上一ノ原遺跡 22 関山やぐら群

第2図 周辺の主な遺跡

遺跡の草では扱わずここで一括することとした。しかし、水神B号横穴群についてはその性格上、別途章内にも組み込むかたちとした。

周辺の遺跡は富士見台遺跡を初めとして湊～岩坂にかけての丘陵地帯の遺跡群が早くから知られているが、横穴墓と中世のやぐらも多くみられ、調査例もこれらに集中している。以下、旧石器時代から簡単に紹介する。

丘陵よりなる地形条件故かローム層は尾根上か段丘面の限られた場所であり、確認された遺跡数は少ない。調査例としては、富士見台遺跡、岩坂大台遺跡、東天王台遺跡等である。

縄文時代の遺跡は鬼沼山系の末端に当たる湊市街背後の丘陵上遺跡群（前掲富士見台遺跡ほか）が良く知られており、このうち富士見台遺跡（貝塚）は早期から晩期まで継続する拠点集落と見てよい。注目されるのは当遺跡から約1.5km東側の春日山（不入斗）貝塚で、内湾浅海泥底に生息するサルボウを含むことと縄文早期・前期の土器が主体を占めることから縄文海進に伴って形成された貝塚の可能性が高い。比較的低位（標高約30m）にある点も当時の環境を考えるうえで示唆に富む。

中期・後期は湊川河口左岸の十官貝塚を初め、右岸の富士見台遺跡、岩井遺跡、東天王台遺跡等がまず挙げられるが、この期になると中流域にも広く分布が確認され、尾根の平坦面や丘陵裾の緩斜面、湊川沿いの段丘面などに点々と遺跡が存在する。このうち、横峰遺跡、障子、二反田遺跡、田原遺跡などは、町田遺跡、花輪上原遺跡と立地の面で類似する。

晩期は少なく、富士見台遺跡や田原遺跡等をあげるにすぎない。その意味では花輪上原（上ノ原）遺跡で出土した晩期の土器はその全体の器形が窺える点でも貴重な資料と見てよい。

弥生時代は東天王台遺跡、岩井遺跡で中期の集落跡が、富士見台遺跡、岩坂大台遺跡などで後期の集落跡が検出されているが、他には町田遺跡、西ノ台遺跡、天神台遺跡を挙げる程度である。

古墳時代前期は弥生時代から継続して富士見台遺跡で集落が営まれているが、同中期以降は集落の検出例に乏しい。その一方、県指定史跡大溝横穴群（4支群62基）、山崎横穴群（22基）等を初めとして横穴群はとりわけ湊川下流域に多く築造されている。上北原古墳・塚田古墳（後期古墳）や町田古墳（終末期方墳）のように標高にして20mに満たない段丘面に主要な古墳が築かれている点から、集落そのものもこの後期以降にはより低地へ移動した可能性が高いと考えられる。

奈良・平安時代は岩坂大台遺跡の奈良時代火葬墓群を挙げる程度ながら、隣接する東天王台遺跡でも平安時代の土器が出土している。丘陵上におけるこの様相は何れにせよ前代の傾向を踏襲するものであろう。「和名類聚抄」の郷名は9世紀頃の内容と推測され、当地は天羽郡4郷（三宅、讃岐、長津、雨霧）のうちの雨留郷かと推測される。

中世の当地は鎌倉時代に興福寺領として確認されるものの、室町時代の様相は不明なところが多い。相模から房総にかけて分布する中世墓の一形態であるやぐらは当遺跡周辺でも結構分布が認められるが、多分に地域色に富むもので、現状では泥岩丘陵地に営まれた多様な岩窟を整理できないといえよう。戦国期には峰上城に拠った上総武田氏が著名ながら、在地の土豪ともいべき吉原氏、野中氏、笹生氏等、当地の歴史を実質的に担った人々が漸く記録に垣間見える。末期には北条氏と里見氏の抗争の舞台となるが、最終的には里見氏の勢力圏内となり近世を迎えている。

主な参考文献

<岩坂大台遺跡>

大原正義ほか 1963『岩坂大台遺跡』財団法人千葉県文化財センター

豊巻幸正 2004『岩坂大台遺跡』財団法人君津都市文化財センター

<東天王台遺跡>

野中徹ほか 1969『千葉県君津郡天羽町岩坂天王台遺跡発掘調査概報』天羽町教育委員会

山下亮介 1984『東天王台遺跡』黒田区教育委員会

戸倉茂行 1988『東天王台遺跡』財団法人君津都市文化財センター

<富士見台遺跡>

野中徹・金子浩昌 1964『千葉県立富津海洋資料館研究報告』富津市教育委員会

金子浩昌ほか 1964「富士見台（大穴）貝塚の調査」『古代』第42・43号

楢山林繼ほか 1973「千葉県富士見台遺跡の調査」『考古学雑誌』第59巻3号

平野雅之ほか 1987『富士見台遺跡』財団法人君津都市文化財センター

黒沢 聡 1992『富士見台遺跡Ⅲ』財団法人君津都市文化財センター

小高幸男 1995『富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会

<その他>

野中 徹ほか 1973『大溝横穴群調査報告』岩坂大溝横穴群発掘調査団

富津市史編さん委員会編 1974『富津市史 史料集一』

富津市史編さん委員会編 1982『富津市史 通史』

富津市教育委員会 1987『富津市埋蔵文化財分布地図』

桐村修司 1991「町田遺跡」「塚田古墳」「町田遺跡群」財団法人君津都市文化財センター

浜崎雅仁 1992『岩井遺跡』財団法人君津都市文化財センター

浜崎雅仁 1992『下北原遺跡』財団法人君津都市文化財センター

松本 勝 1994『上北原古墳』財団法人君津都市文化財センター

松本 勝 1994『横峰遺跡』財団法人君津都市文化財センター

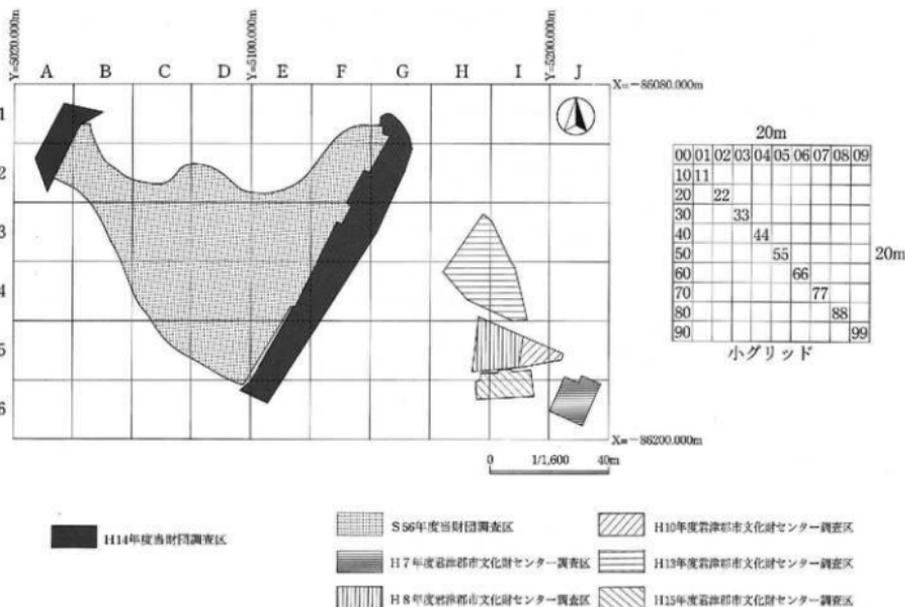
財団法人千葉県文化財センター 2000『千葉県埋蔵文化財分布地図（4）-君津・夷隅・安房地区（改訂版）-』

第2章 岩坂大台遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の方法

岩坂大台遺跡の発掘調査は、昭和56年度に当財団によって行われたのを初めとして、これまでに財団法人君津都市文化財センターによっても数回行われてきた¹⁾。調査に当たっては、昭和56年度に $X=-86080.000\text{m}$ 、 $Y=5030.000\text{m}$ を起点とし、 $5\text{m}\times 5\text{m}$ の小グリッドを基本とする $50\text{m}\times 50\text{m}$ の大グリッドが設定され使用されてきたが、東関東自動車道（木更津・富津線）建設に関わる発掘調査ではそれぞれの遺跡毎に $2\text{m}\times 2\text{m}$ の小グリッドを基本とする $20\text{m}\times 20\text{m}$ の大グリッドを設定するのが通例となっていることなどから、新しくグリッド設定を行うこととした。すなわち、 $X=-86080.000\text{m}$ 、 $Y=5020.000\text{m}$ を起点として、大グリッドは西から東にA、B、C、…、北から南に1、2、3、…、小グリッドは北西隅から00、01、…、南東の隅を99と呼称することとした（第3図）。地区名の表示は、大グリッドと小グリッドの組合せでA1-57、F2-36というように行うこととした。これにより、昭和56年度設定グリッドの起点A1-00はA1-05に、例えばB2-84はE5-50に相当することとなった。



第3図 岩坂大台遺跡調査区とグリッド設定図

2 調査の経過 (第4・5図)

今回の調査区は、昭和56年度調査区を挟むように2か所に分かれて位置する。調査に当たって、昭和56年度調査区の西側を「西側調査区」、東側を「東側調査区」と呼称した。

確認調査対象面積は、両調査区合わせて1,435㎡で、それぞれまず調査区の長軸にあわせて合計面積144㎡のトレンチを設定して、上層の確認調査から開始した。その結果、それぞれの区で遺構が検出されたため、遺構の検出された部分を中心に本調査を行うこととなった。上層本調査面積は合計136㎡であるが、東側調査区の確認調査で検出された火葬墓(SX-001)のみは、極めて小規模であることから確認調査の範囲で終了した。上層の遺構調査を総て終了した後、ラジコンヘリにより遺跡の空撮を行った。

上層の調査終了後、合計57㎡の確認グリッドを設定して下層の確認調査を行った。西側調査区では旧石器時代の遺物は検出されなかったが、東側調査区の2か所の確認グリッドで遺物が出土したため、その範囲を覆うように、拡張するかたちで引き続き本調査を行った。下層の本調査面積の合計は100㎡である。

第2節 遺構と遺物

1 旧石器時代

(1) 基本層序 (第6図)

I層 表土攪乱層

II b層 黒褐色土層

II c層 暗褐色土層

III層 褐色軟質ローム この層以下が立川ローム層と思われる

IV層 暗褐色硬質ローム III層に比べ硬質で粘性がある

V層 褐色ローム IV層よりやや軟質で粘性がある

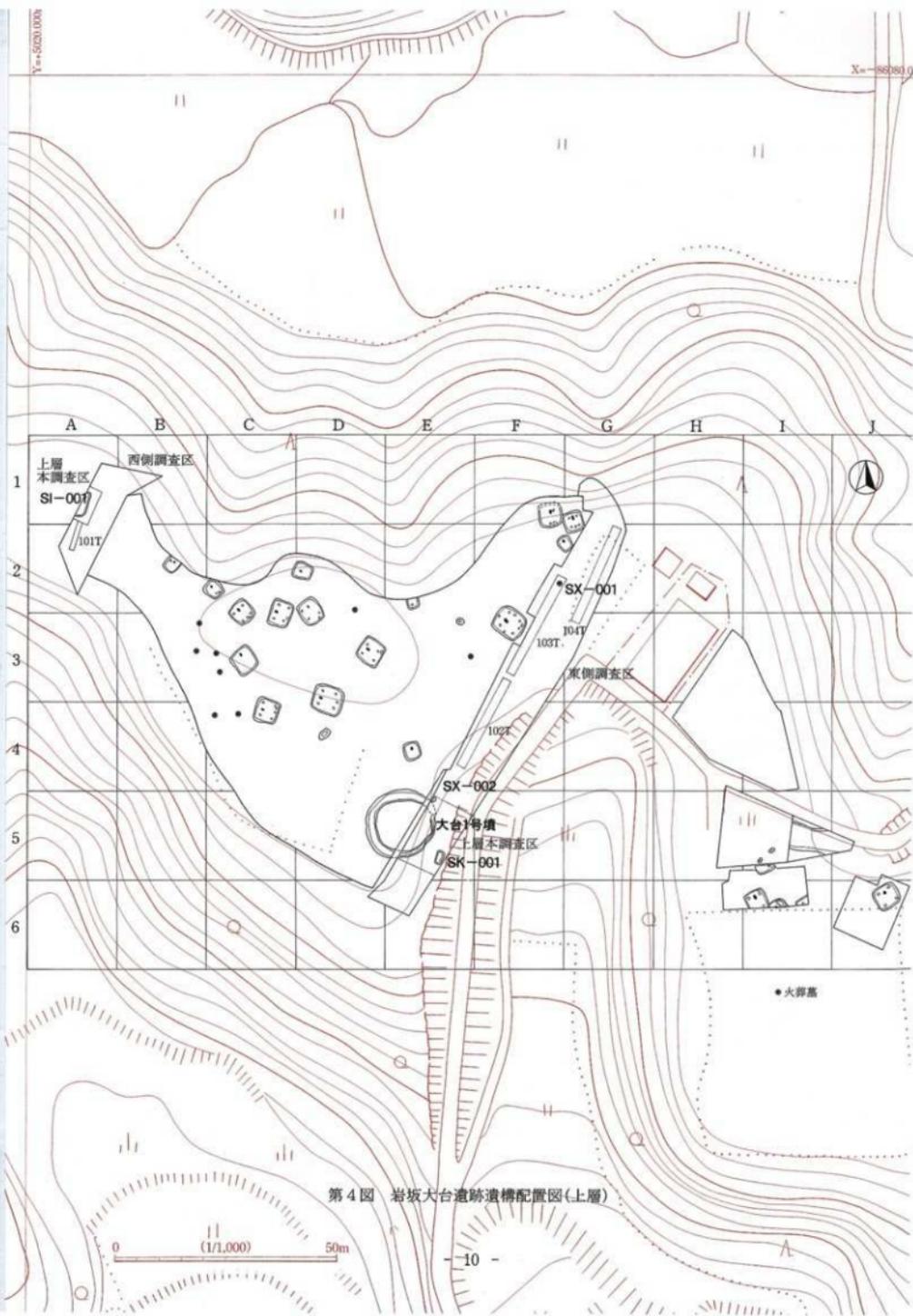
(2) 第1文化層

出土状況 (第6図、図版2)

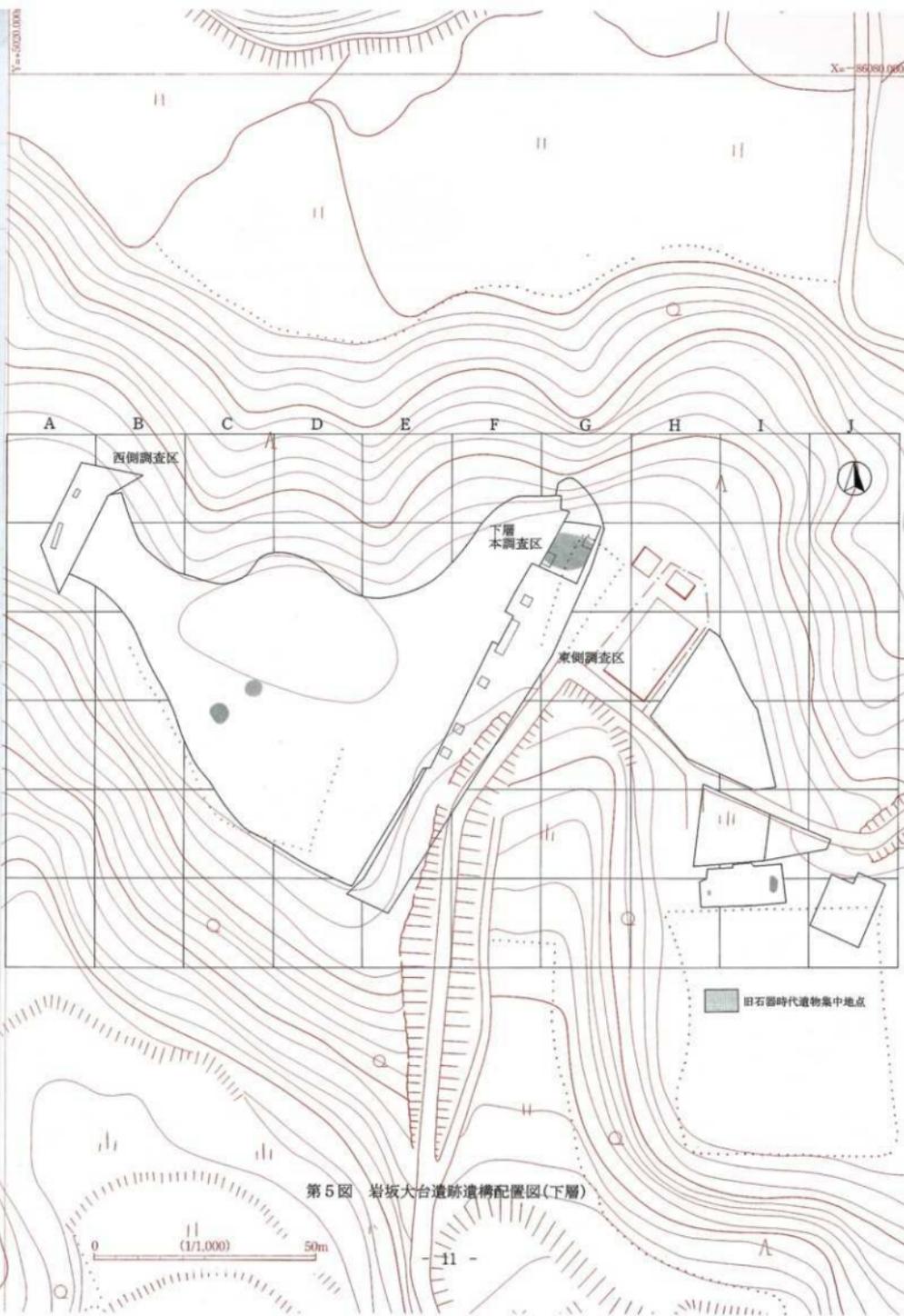
平面分布は、長軸約11m×短軸約8mの長楕円形の範囲で、散漫な分布状況である。出土層位は、III層下部～V層である。

出土遺物 (第7・8図、図版3)

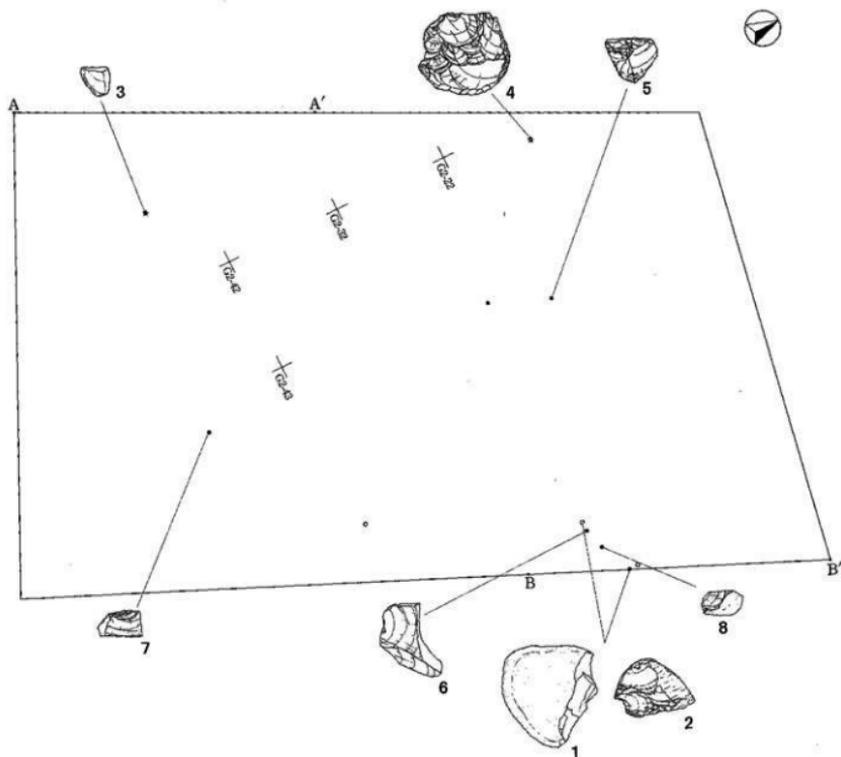
合計11点出土した。1・2は接合資料である。節理面のやや多い、青黒色を呈するチャート製である。1は石核で、非大の礫の上部から打撃を加えて打ち割り、打点をやや移動して2を剥離している。そして、作出された平坦面を打面とした数枚の剥片剥離が行われているが、これらの剥片剥離と2の剥離の前後関係は明らかでない。また、接合はしないが、8も同一母岩と考えられる。3は、縦長剥片を用いた一側縁加工のナイフ形石器基部とみられるが、風化が激しく明らかではない。緑色凝灰岩製である。4はチャート製の円形石器である。節理面の多い石材で、青味がかかった黒色を呈している。5は、白く縞の入ったチャート製の剥片で、上面は節理面である。6は安山岩(トトロ石)製の剥片である。背面には左側辺からの剥離がみられる。7は嶺岡産頁岩製の剥片である。8はチャート製の剥片である。1・2とよく似た石材であり、同一母岩の可能性が高い。



第4図 岩板大台遺跡遺構配置図(上層)

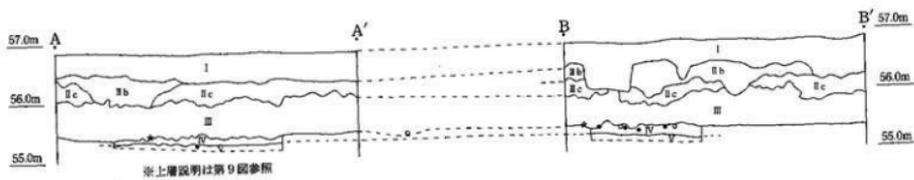


第5図 岩坂大台遺跡遺構配置図(下層)

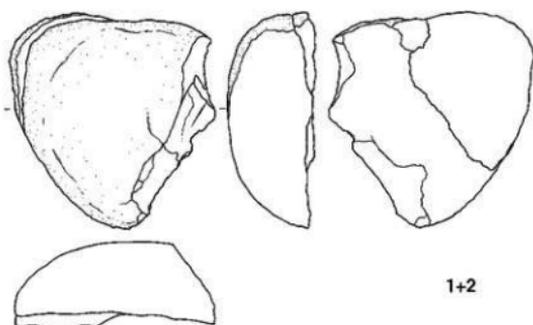


- ナイフ形石器
- 核
- 石核
- 剥片
- 礫

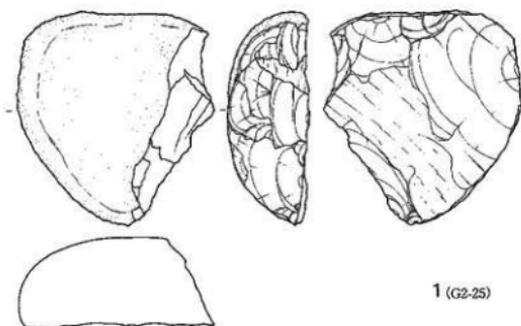
0 (1/80) 4m



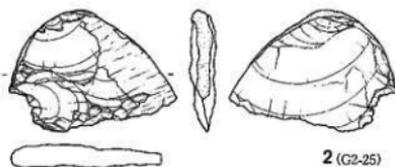
第6図 基本層序と旧石器時代石器(第1文化層)出土状況図



1+2



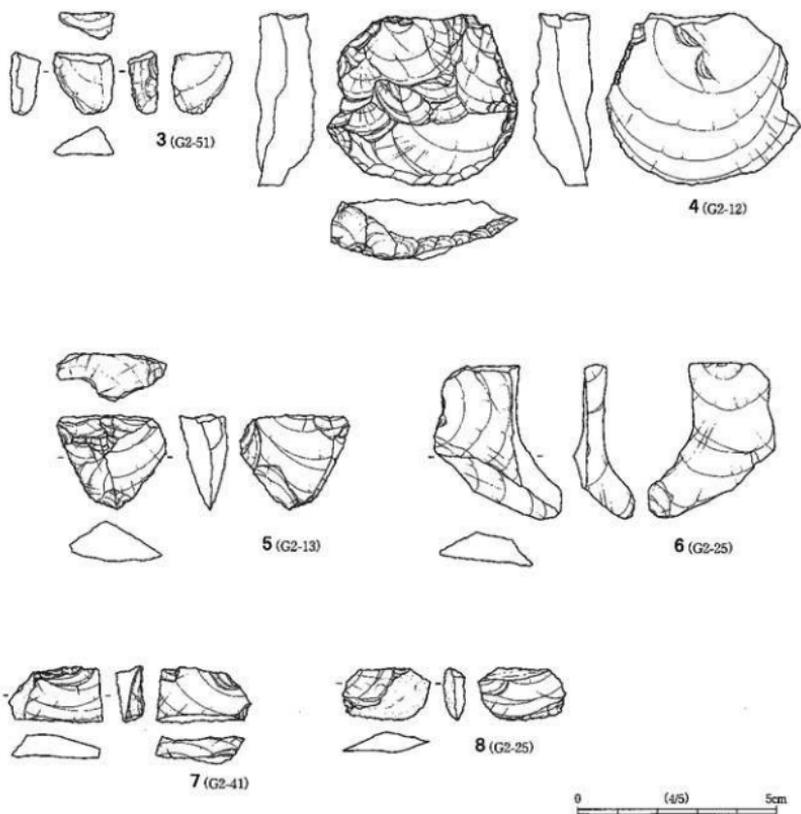
1 (G2-25)



2 (G2-25)



第7図 旧石器時代石器1 (第1文化層)



第8図 旧石器時代石器2 (第1文化層)

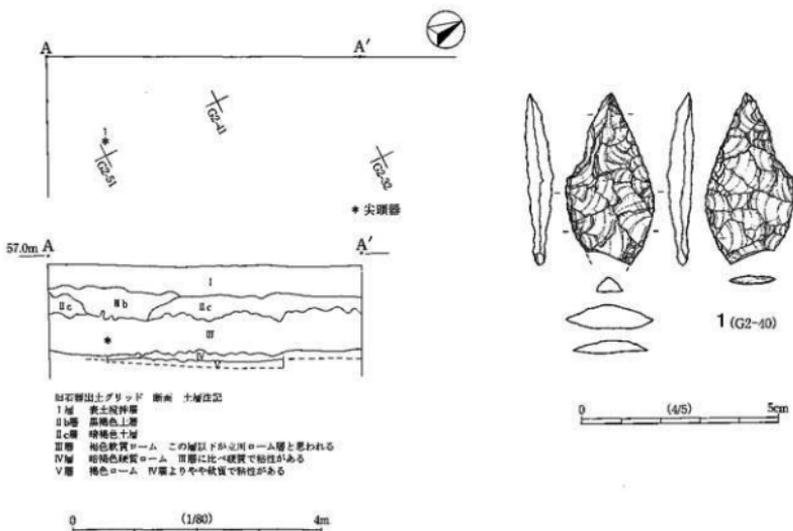
(3) 第2文化層

出土状況 (第9図, 図版2)

有槌尖頭器がG2-40グリッドから単独出土した。Ⅲ層中からの出土である。

出土遺物 (第9図, 図版3)

1は有槌尖頭器である。ガラス質で緻密な青黒色のチャート製、または珪化度の極めて高い珪質頁岩製とみられる。先端から左側辺部にかけて槌状剥離を入れ、その後加工を施している。基部は欠損する。

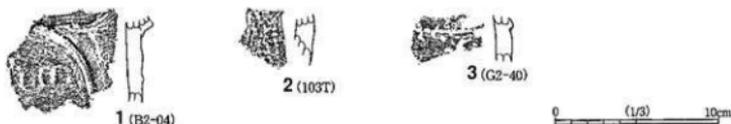


第9図 旧石器時代石器(第2文化層)と出土状況図

2 縄文時代(第10図, 図版3)

今回の調査範囲からは縄文時代に比定される遺構は検出されなかったが、縄文土器が少量出土した。

1～3は深鉢の胴部破片で、縄文時代中期に比定されると考えられる。1は隆線が貼付され、輪積み痕がみられる。胎土に雲母片を多量に含む。2は地文に縄文が施される。胎土に白色針状物質を多量に含む。3は器面が磨滅・剥落しているが、隆線が貼付され、その下に刺突文がやや不規則に施されるようである。



第10図 縄文時代の遺物

3 弥生時代～古墳時代

今回の調査範囲で検出された弥生時代～古墳時代に比定される遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑2基、古墳周溝1基である。

(1) 竪穴住居跡

SI-001 (第11図, 図版2・4)

西側調査区, A1-66～A1-96グリッドに位置する。東側の一部のみが検出された。検出された深さは表土から約0.8m, 確認面からは約0.5mである。プランは攪乱などのためはっきりしない部分もあるが、隅丸方形を呈するとみられる。規模は南北軸で推定5.8mである。床面は細かい砂粒を含むローム層の面で、若干硬質部分があるが、硬化面としては顕著ではない。部分的に暗褐色土を0.1m程度貼った貼床がみられる。壁溝は、攪乱部分を除き調査範囲では全周検出され、深さ最大0.07mほどである。床面からは、深さ約0.5mで、支柱穴の可能性もあるピットが検出された。炉は調査範囲からは検出されなかった。

図示した遺物は7点である。いずれも覆土中から出土したものである。1は壺の口縁部破片である。折返し口縁部に羽状縄文が施されている。遺存部分には上から押捺の施された2本の棒状浮文がみられる。器面が磨耗しているが、内面は赤彩されているようである。2は無頸壺の口縁部破片と考えられる。器面が磨滅しているが、内外面とも赤彩されているとみられる。3は甕の口縁部破片である。輪積み痕が残存し、口唇部には正面からの押捺列が巡るとみられる。4は壺か甕の底部破片とみられる。器面が磨耗しており、調整は判然としないが、内外面ともナデのようである。5は砂岩製で剥離痕がみられる。黒色で比較的硬質な石材である。6はやや軟質な砂岩製で、擦痕が観察されることから砥石と考えたが、端部と側面付近に敲打痕または緊縛痕のような痕跡がみられる。7はチャート製の敲石と考えられる。下部に使用により生じたとみられる微細な剥離痕が観察される。

(2) 土坑

SK-001 (第12図, 図版2)

東側調査区, E5-66・E5-86グリッドに位置する。平面形は長軸2.8m, 短軸約1.4mの長方形を呈し、検出された深さは表土から約0.7m, 確認面からは約0.5mである。底面はほぼ平坦である。機能等は明らかでない。遺物は、土師器の小破片が微量出土したが、図示していない。

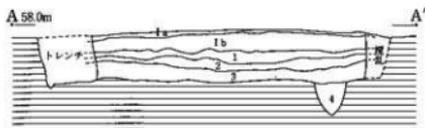
SX-002 (第13図, 図版2・4)

東側調査区, E5-06～E5-16グリッドに位置する。西側は昭和56年度調査区で消滅し、東側は木根による攪乱が著しくプランの検出は困難であった。検出された深さは確認面から約1.3mである。確認面で、横に倒れて上になった部分が欠損した状態の壺(第13図1)が出土した。周辺では土坑やピットは検出されなかったが、土坑というより、住居の貯蔵穴などであった可能性が高いと考えられる。

図示した遺物は1点である。1は壺で、底部は遺存していないが、全体の約50%の遺存度である。復元口径は17.8cm, 復元頸径は8.7cm, 復元胴部最大径は29.9cm, 現存器高は34.1cmを測る。折返し口縁部には羽状縄文が施され、その下端部は、遺存状態は悪いが、押捺列が巡るようである。頸部にはS字状結節文が施文され、肩部から胴部上半には上下それぞれ3段ずつのS字状結節文によって区画された羽状縄文がみられる。施文部以外の頸部は縦方向のミガキ、肩部から胴部の無文部は横方向のミガキで、頸部と底部付近を除き、赤彩されている。内面も、横方向のミガキの施される頸部は赤彩されている。胴部はヘラナデである。胎土に黄白色の粒子を多量に含む。焼成は普通で、色調は淡青黄褐色を呈する。



SI-001



- SI-001 新田 土層柱記
 1 a 黒色土 表土層
 1 b 暗褐色土 表土層
 2 黒褐色土 粘土質・炭化粒を少量含む、粘粒がある
 3 褐色土 焼子粒・炭化粒を少量含む、粘粒がある
 4 暗黄褐色土 粘性の強い砂質土をブロック状に含む

0 (1/20) 4m



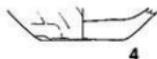
1



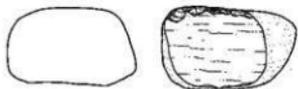
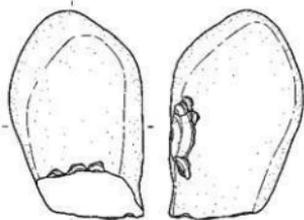
2



3



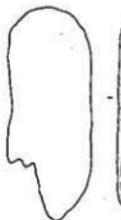
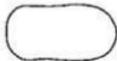
4



5



6



7

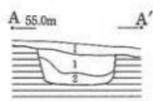
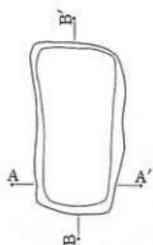


0 (1/3) 10cm

第11図 SI-001と出土遺物



15-75



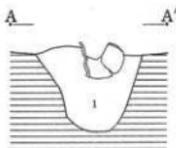
SK-001 断面 土層注記
 1 黒色土 黒色味が強く、ソフトローム粒を含む 粘性は強い
 2 黒色土 ソフトロームを多く含む 粘性は強い

0 (1/80) 4m

第12図 SK-001

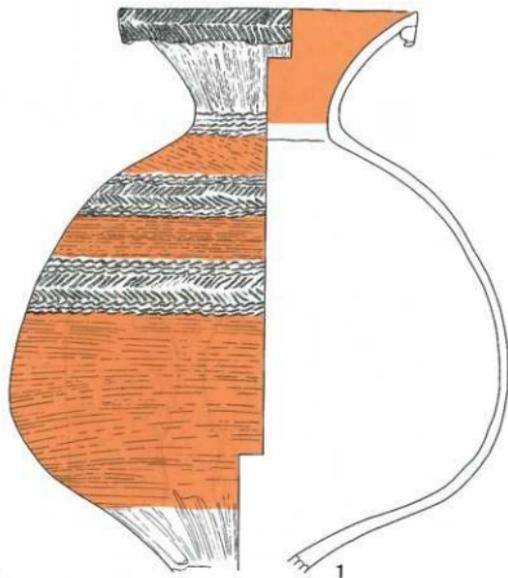


調査区外



SX-002 断面 土層注記
 1 黒色土 ソフトローム粒を少量含む、しまりは悪い

0 (1/20) 1m



0 (1/3) 10cm

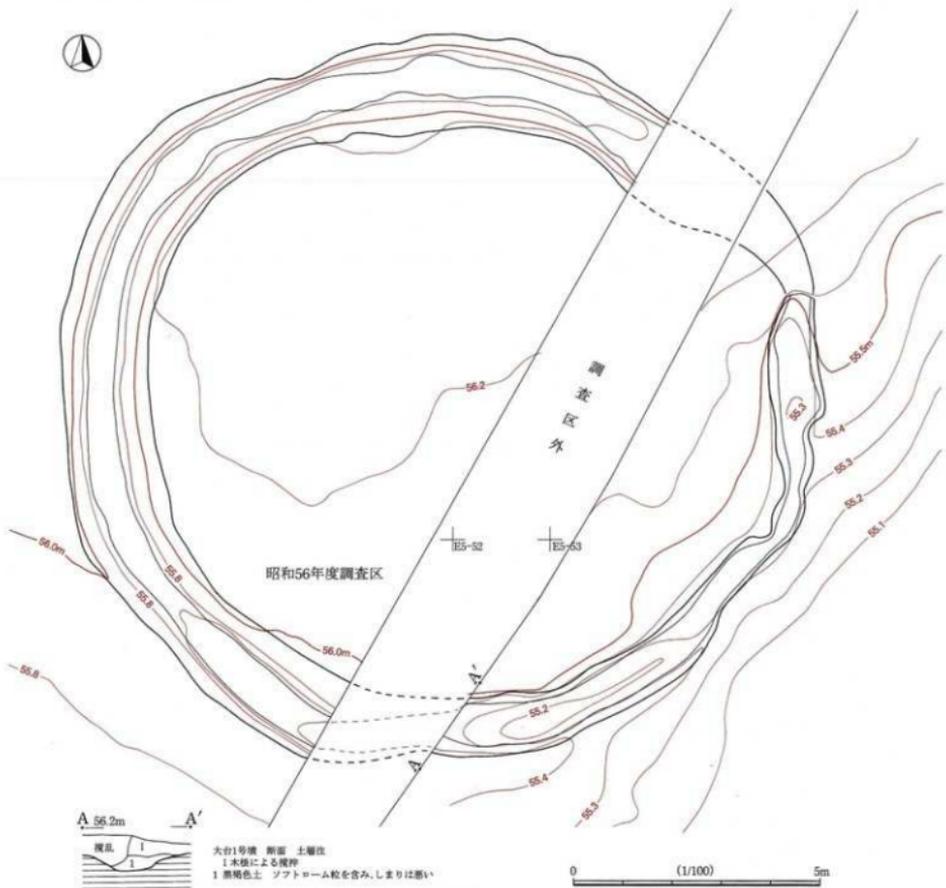
第13図 SX-002と出土遺物

(3) 古墳

大台1号墳 (第14図, 図版2)

東側調査区で検出された円墳の周溝である。昭和56年度に全体の2/3ほどが調査されていたが、今回その残りの1/3を検出した。墳丘や埋葬施設は今回も検出されず、今回検出された周溝の最大幅は1.6m、確認面からの最大の深さは約0.3mである。古墳の規模は、昭和56年度の調査によって周溝外径で15.5mとされている。周溝発掘後、周辺の測量を行い、0.1m毎のコンター図を作成した(第14図)。

今回の調査範囲で出土した遺物は、土師器の小破片が微量のみで、図示していないが、昭和56年度には周溝覆土中から三角形鉄が1点出土している。



第14図 大台1号墳

(4) 遺構外出土遺物 (第15図, 図版4)

1は壺の口縁部破片である。器面が磨耗しているが、折返し口の口縁部に羽状縄文が観察できる。また、折返し部の端部には、押捺列が巡るようである。内面には赤彩の痕跡が残されているが、外面は不明である。



第15図 遺構外出土遺物

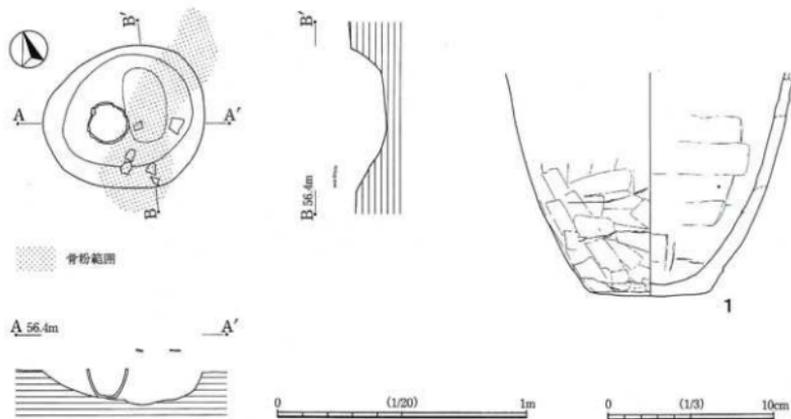
4 奈良時代

(1) 火葬墓

SX-001 (第16図, 図版2・4)

F2-60グリッドに位置する。長軸2.6m, 短軸2.3mのほぼ円形を呈する土坑から、火葬骨の充満した土師器甕が正位置で出土した。検出面で既に骨粉と土器片の散布が確認でき、火葬墓と推定される。確認面からの土坑の深さは約0.2mで、土器の底部は土坑の底面に接していた。火葬骨は小破片ばかりとなり性別の判定は難しいが、縫合の明瞭でない頭骨の一部が残存しており、壮年期の人骨の可能性ある。

図示した遺物は1点で、1は骨蔵器として使用されていた土師器甕である。胴部下半のみほぼ全部遺存しており、底径は7.2cm, 現存器高は13.6cmを測る。外面の調整は主に縦方向のヘラケズリ、内面の調整はヘラナデである。胎土に砂粒と少量の雲母を含む。焼成は普通で、色調は明褐色を呈する。



第16図 SX-001と出土遺物

第3節 まとめ

今回の調査範囲は、丘陵上の平坦面に位置する昭和56年度調査区を挟み込むように、谷へ落ちる肩部に立地している。

旧石器時代では2つの文化層が確認された。このうち第2文化層は、Ⅲ層から単独で、男女倉型とされる有樋尖頭器が出土したものである。当遺跡で初めての出土例であるばかりでなく、房総半島南部における数少ない出土例として注目できよう。一方第1文化層としたものは、Ⅲ層下部～Ⅴ層にわたる地層から出土した11点の石器である。当遺跡ではこれまでに、昭和56年度調査区でⅤ層から礫群を含む2つのブロックが、谷を挟んだ平成15年度調査区でⅣ層～Ⅵ層にわたる地層から2つのブロックが検出されているが、いずれも出土層位やナイフ形石器の形態などから、同一文化層に属するものと考えられている。今回検出されたものも、いわゆるⅣ層下部の石器群と考えられ、同一文化層に属するものとみて良いだろう。

弥生時代～古墳時代では、竪穴住居跡1軒、土坑2基、古墳周溝1基が検出された。竪穴住居跡は一部のみの検出であったが、隅丸方形を呈すると考えられ、出土遺物から弥生時代後期～古墳時代前期に帰属するとみられる。昭和56年度調査区を初めとして、同時期の竪穴住居跡がこれまでも数多く検出されている。今回、西側調査区で竪穴住居跡を検出したことから、集落はさらに西へ広がるものと推定できるだろう。

古墳は、昭和56年度に調査された大台1号墳の残りの部分が検出された。墳丘や埋葬施設は遺存しておらず、遺物もほとんど皆無であるが、昭和56年度調査時に出土した鉄鏝から、古墳時代後期に帰属する円墳と考えることができる。

奈良時代は、火葬墓が1基検出された。昭和56年度調査区でも、石櫃を伴うものを含む8基の火葬墓が検出されている。今回検出されたものは、土坑に骨蔵器が納められただけのものであったが、当遺跡下の斜面に位置する水神横穴群や大溝横穴群と時代が一部重複することから、埋葬方法の相違点などで注目されよう。

注1 大原正義・川島利道 1983『岩坂大台遺跡』財団法人千葉県文化財センター

松本勝 1997『岩坂大台遺跡』『年報No14-平成7年度-』財団法人君津郡市文化財センター

中能隆 1998『岩坂大台遺跡』『年報No15-平成8年度-』財団法人君津郡市文化財センター

諸墨知義 2000『岩坂大台遺跡』『年報No17-平成10年度-』財団法人君津郡市文化財センター

松本勝 2003『岩坂大台遺跡』『年報No20-平成13年度-』財団法人君津郡市文化財センター

豊巻幸正 2004『千葉県富津市-岩坂大台遺跡』財団法人君津郡市文化財センター

第4・5図の遺構配置図作成は上記によった。

第1表 岩坂大台遺跡 石器属性表

採回番号	遺構	遺物番号	器種	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	出土層位	備考
第7図	G2-25	1	石核	チャート	53.88	50.21	21.32	73.56	Ⅲ層下部	第7図2と接合
	G2-25	5	剥片	チャート	31.11	42.97	6.92	8.85	Ⅲ層下部	第7図1と接合
第8図	G2-51	1	ナイフ形石器	緑色凝灰岩 (15.91)	(15.49)	(8.08)		1.86	Ⅲ層下部	基部のみ現存 全体的に風化している
	G2-12	1	円形掻器	チャート	43.70	47.31	13.92	32.17	Ⅲ層下部	
	G2-13	1	剥片	チャート	23.49	27.17	11.03	6.61	Ⅲ層下部	白色チャートで石英が入っている
	G2-25	2	剥片	安山岩 (トロロ石)	39.48	23.18	10.04	9.06	Ⅳ層	
	G2-41	1	剥片	頁岩	14.51	23.94	7.72	2.53	V層上部	
第9図	G2-25	3	剥片	チャート	13.70	22.23	3.55	1.59	Ⅳ層	第7図1・2と同・母岩と思われる
	G2-40	1	有髄尖頭器	チャート または頁岩	43.98	22.12	6.71	5.04	Ⅲ層	
第11図	SI-001	1	砥石?	砂岩	127.00	81.19	50.67	759.84		
	SI-001	16	砥石?	砂岩	141.58	67.89	72.05	698.32		
	SI-001	2	砥石	チャート	128.90	58.49	51.30	607.17		
	G2-43	1	剥片	安山岩 (トロロ石)	18.78	13.71	8.52	2.63	Ⅲ層下部	第8図6の剥片と同一母岩の可能性
	G2-25	4	核	チャート	87.67	61.27	32.56	247.27	Ⅳ層	熱は受けていない完形の核
G2-34	1	礫	凝灰岩	105.79	92.68	90.92	974.91		全体に風化しタル状付着物も認められる	
SI-001	19	礫	花崗岩	52.67	50.16	33.64	121.86		熱は受けていない破損	
SX-001	10	礫	砂岩	35.84	23.82	23.13	26.54		熱を受けて破損したが破損してから二次形成はされていない	
SX-002	3	礫	砂岩	37.87	27.97	20.56	28.86		熱を受けて破損し、二次形成も見られる	

第3章 水神B号横穴群

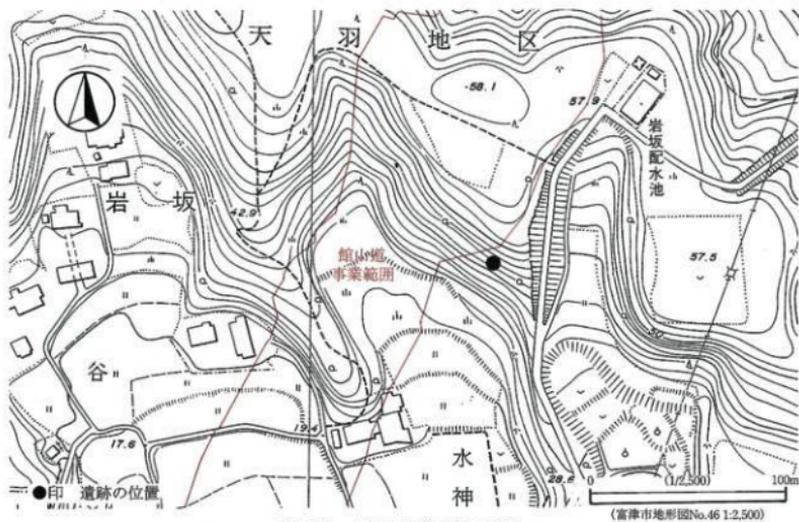
第1節 調査の概要

1 調査の方法

第1章で既述したとおり現地は既に工事が進捗しており、発掘調査に当たっては事業者によって設置された作業床を使用した。基準点は事業地内各所に事業者による測点が設置されており、その成果を使用した。

横穴の調査に当たっては、玄室幅の中間点から主軸を設置し、これに直交する横軸を設置して玄室内を4分割し、玄室左奥部をa区、右奥部をb区、玄室左前部をc区、右前部をd区というように内部を区分けした。玄室内及び羨道部の崩落土下の土については土納袋に採取し、篩目約2mmの篩を使用して土砂を水洗し、遺物の採取を実施した。

横穴の実測作業は、前述した主軸と横軸を基に実施し、平面図、側面図、縦断面図を作成した。そして、実測図を作成しながら、交点及び断面作成の基準点である各点を光波測距儀を使用し、座標値を計測することにより横穴の位置を決定した。



第17図 水神B号横穴群の位置

2 調査の経過

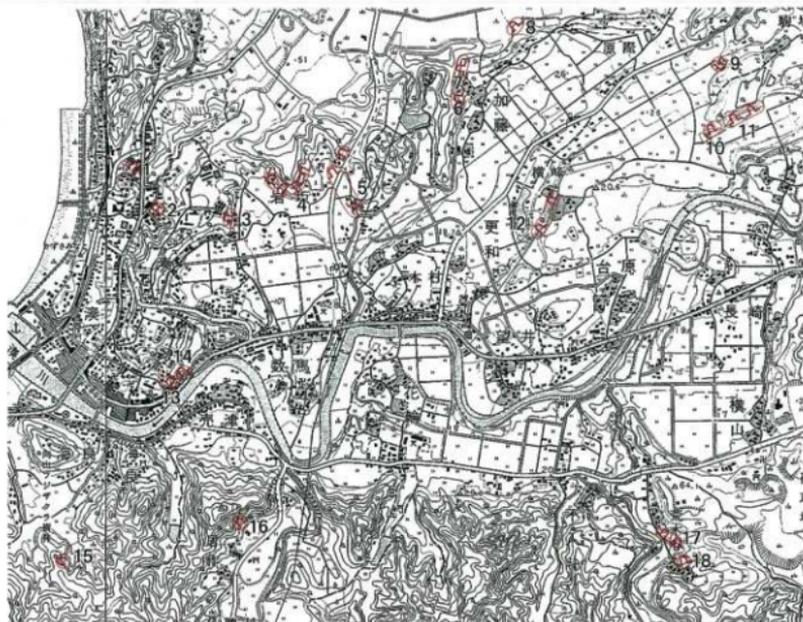
新たに発見された横穴は既調査の横穴との関係から、ST-004（4号横穴）として調査を実施した。

まず、横穴内の崩落土を除去する作業と事業地内の周辺斜面に横穴の有無を確認する作業から実施した。そして、横穴内の崩落土除去後、主軸及び横軸に土層確認のためのベルトを設置して調査を進めた結果、玄室部に排水溝が廻ることも判明した。また、羨道部の覆土は上層と下層の2層に細分された。

覆土を除去したのは、遺物を各区毎に取り上げ、既述した方法に従い測量図を作成して作業を終了した。

第2節 周辺の横穴群（第18図）

水神B号横穴群の位置する富津市湊川流域には、今回新たに発見された横穴を加え、32群308基の横穴が確認されている⁹。中でも湊川中・下流域右岸の岩坂、加藤、更和、櫻井の4地区の丘陵斜面にほとんどの横穴が集中する。



(国土地理院 1:25,000 鬼形山上総図)

- 1 鹿府崎横穴群
- 2 山崎横穴群
- 3 白坂横穴群
- 4 大洞1～IV横穴群
- 5 水神A～C号横穴群
- 6 入山横穴群
- 7 崩下横穴群
- 8 本宗寺裏横穴群
- 9 小塚横穴
- 10 牛鳴瀬横穴群
- 11 程兄ヶ基A・B横穴群
- 12 高山横穴群
- 13 山崎やぐら群
- 14 岩井やぐら群
- 15 大山横穴群
- 16 居作横穴
- 17 大谷A・B横穴群
- 18 鹿原沢横穴

第18図 周辺の横穴分布図

岩坂地区には、河口から白坂横穴群(3)、大満Ⅰ～Ⅳ横穴群(4)、水神A～C号横穴群(5)の8群98基、加藤地区には入山横穴群(6)、崩下横穴群(7)、本乗寺裏横穴群(8)の3群26基、更和地区には高山横穴群(12)、西山横穴群ほか4群102基、桜井地区には小堰横穴(9)、牛鳴瀬横穴群(10)、稚児ヶ墓A・B横穴群(11)、飛谷A横穴群、飛谷B横穴群の6群33基が所在する。その他、湊川右岸下流域に山崎やぐら群(2)、岩井やぐら群(14)が、東京湾に面して湊岩崎横穴群(1)、山崎横穴群(2)が所在する。

湊川左岸に所在する横穴は、わずかに大山横穴群(15)等を挙げる程度であるが、支流の相川左岸に居作横穴(16)、同不入斗川右岸に大谷A・B横穴群(17)、鹿原沢横穴(18)、同志駒川右岸に小志駒横穴群が所在する。

横穴墓の築造された古墳時代後期から奈良時代の湊川流域の遺跡では、水神A～B号横穴群裏手の岩坂大台遺跡で竪穴住居跡や石櫃火葬墓などが検出され、本横穴群との関連を伺わせる。また、水神B号横穴群から望む沖積段丘上に立地する町田古墳は88mの二重周溝を有する大規模な方墳であり、この地域の有力者の墓と考えられる。

注1 湊川流域の横穴墓の群数及び基数は、次の文献の基数に今回調査分の横穴を加えたものである。

千葉県文化財センター編 2003『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』

第3節 遺構(第19～22図、図版5～10)

1 調査前の状況

ST-004(第4号横穴)は横穴群のなかでは西端にあり、標高は約37mラインに位置する。工事によって斜めに削られた法面に横穴に堆積した土の断面が露出しており、僅かに上半部1/3が開口した状況であった。なお、堆積土はそのほとんどが地山崩落土によるものであった。

2 土層堆積状況

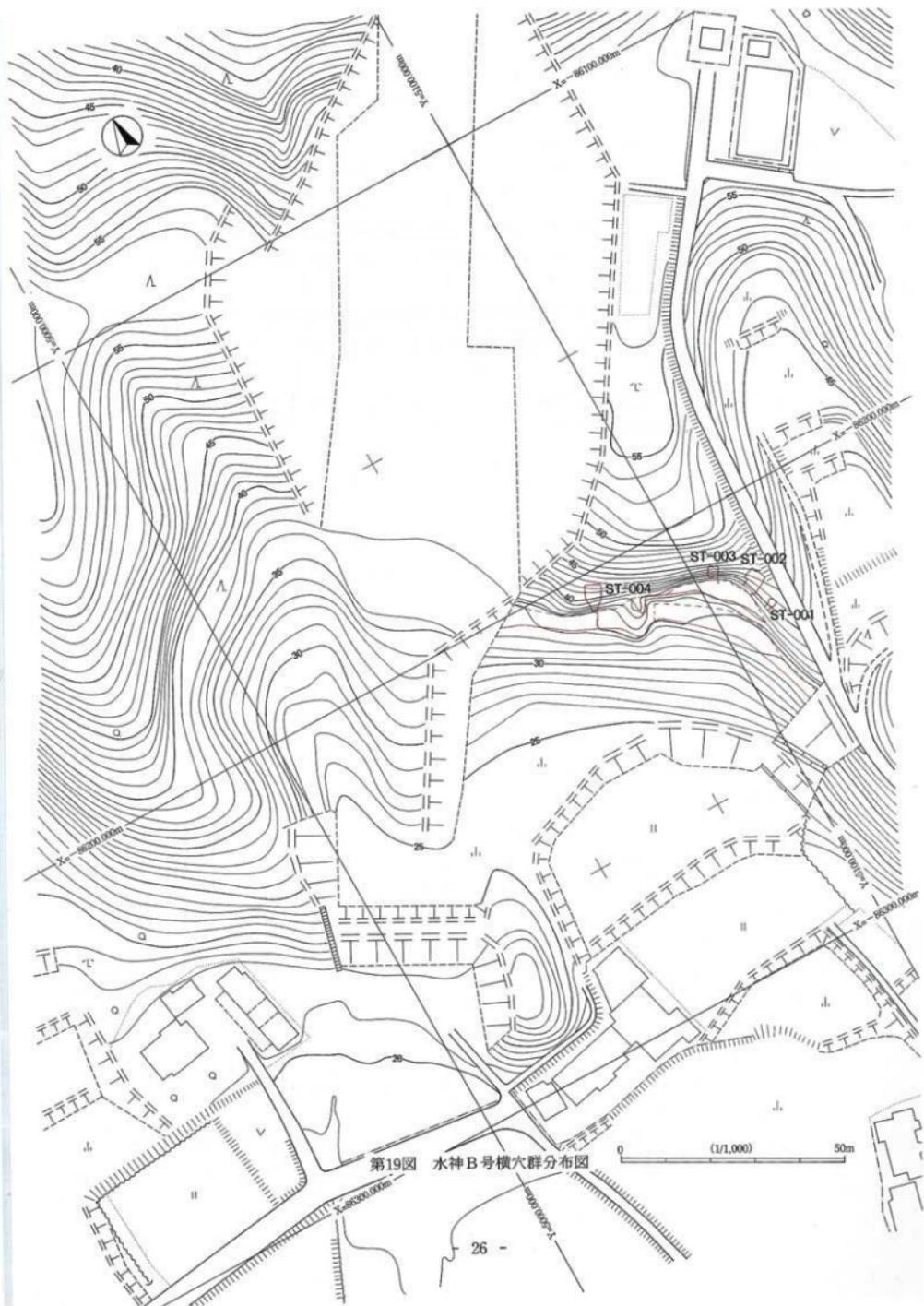
玄室内の覆土は奥部で約6cm、前部で約8cmであり、灰オリーブ色シルト混り細砂である。羨道部の覆土は最大で96cmであり、上層が黒褐色シルト混り粘土、下層が灰オリーブ色粘土混り細砂である。なお、羨道部付近には工事時の崩落土と思われる砂岩ブロックが約6cm程堆積していた。

3 遺構各部

玄室 横穴の主軸方位はN-25°-Eである。平面形は縦長の長方形を基本的な平面形態として、奥壁から羨道へ向かって幅の狭まる台形プランであるが、奥壁側の両隅がしっかりとした角となるのに対し、羨道側の両隅が隅丸となる羽子板状とでも称すべき形態を呈している。規模は主軸長4.75m、左側壁長4.21m、右側壁長3.47m、奥壁幅3.65m、前壁幅3.34mをそれぞれ測る。

排水溝は壁面に沿って認められ、幅0.13m～0.25m、深さ約0.15mを測る。玄室を廻る排水溝は羨道中央に認められた排水溝に繋がるものと思われるが、玄門付近では明瞭となって羨道床面に繋がっており、羨道排水溝との関係は明確ではない。

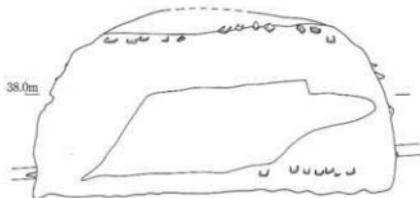
天井は縦断面台形、横断面半円形を呈するいわゆるアーチ型の天井である。奥壁と側壁の境界は明瞭であるが、奥壁と天井の境界は明瞭さを欠くもののノミ痕より推定できる。奥壁は頂部を扁平にしたカマボ



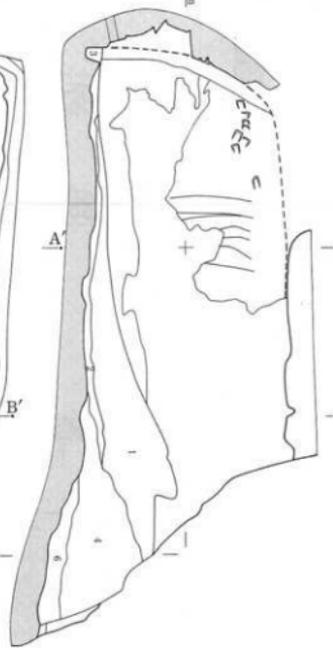
第19图 水神B号横穴群分布图

ST-004

38.0m



38.0m



38.0m

A

B

C

D



+

A'

B'

C'

D'

38.0m D

D'

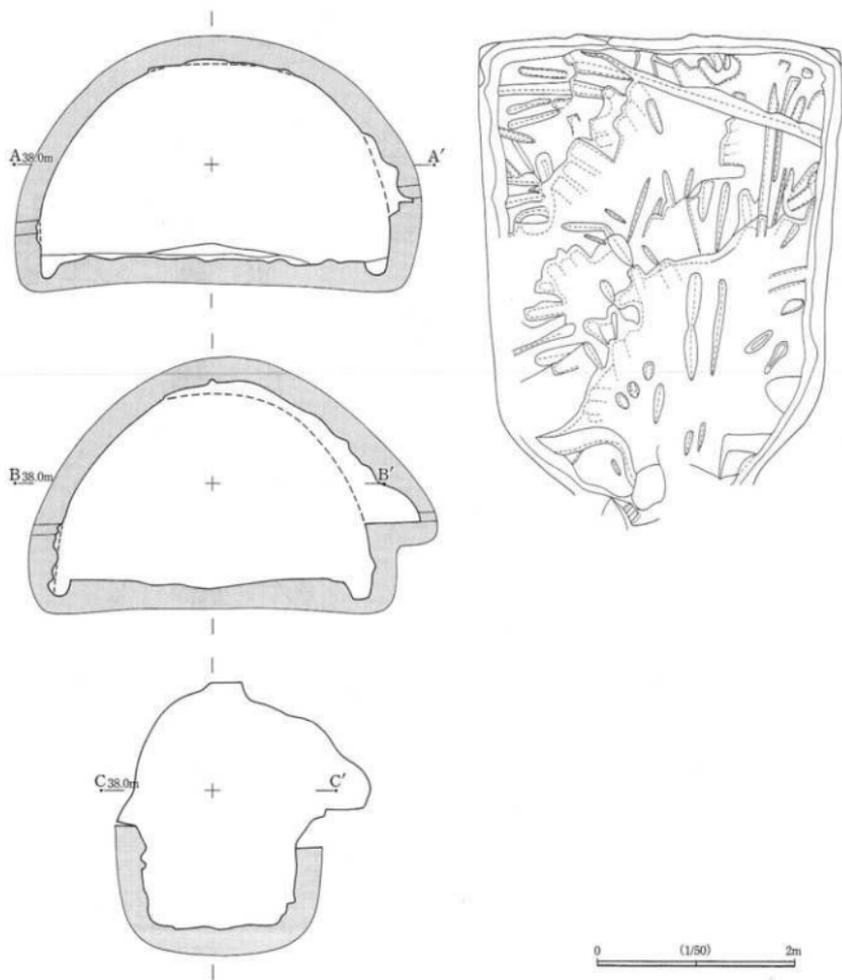
土層柱記

- 1 黄褐色シルト炭粉砂、天井陥落土
- 2 灰オリーブ色シルト炭粉砂、6層に類似
- 3 灰オリーブ色細砂
- 3' 灰オリーブ色細砂
- 4 黄褐色シルト炭粉土、黄道層土
- 5 黄褐色シルト炭粉砂、4層に天井、壁面の陥落砂が混じったもの
- 6 灰オリーブ色粘土炭粉砂、黄道層土(粘性強し)
- 7 オリーブ黄色地山砂岩ブロック

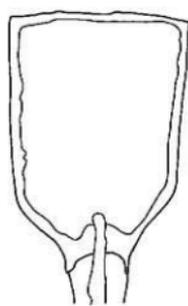
砂岩ブロック

0 (1/50) 2m

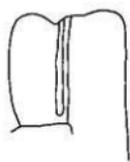
第20図 横穴平面図、側面見通図、奥壁正面図



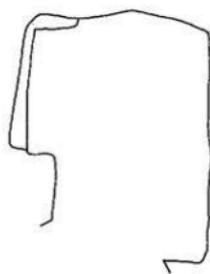
第21図 横穴断面図及び底面整形痕



ST-004



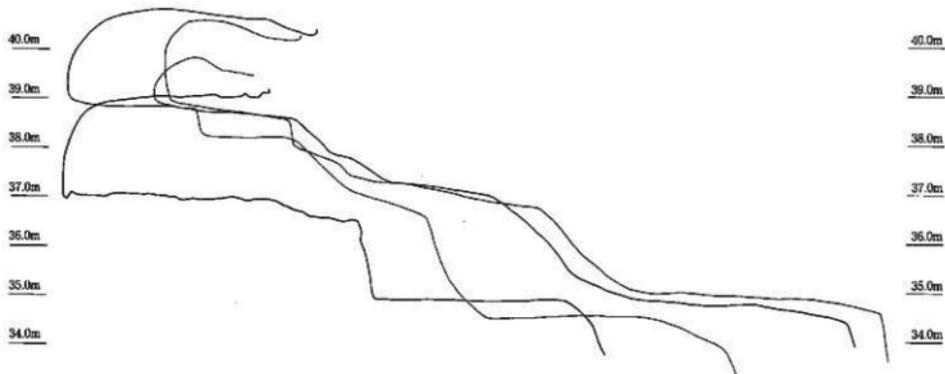
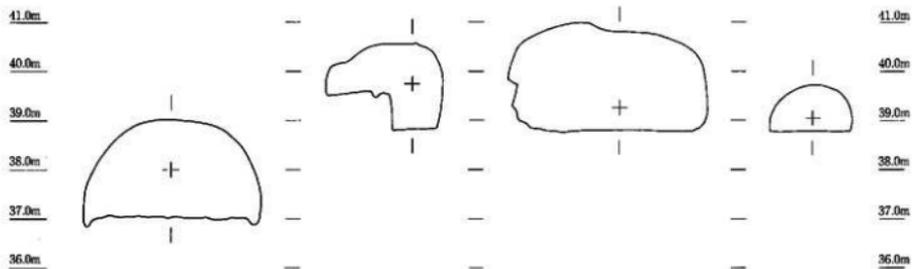
ST-003



ST-002

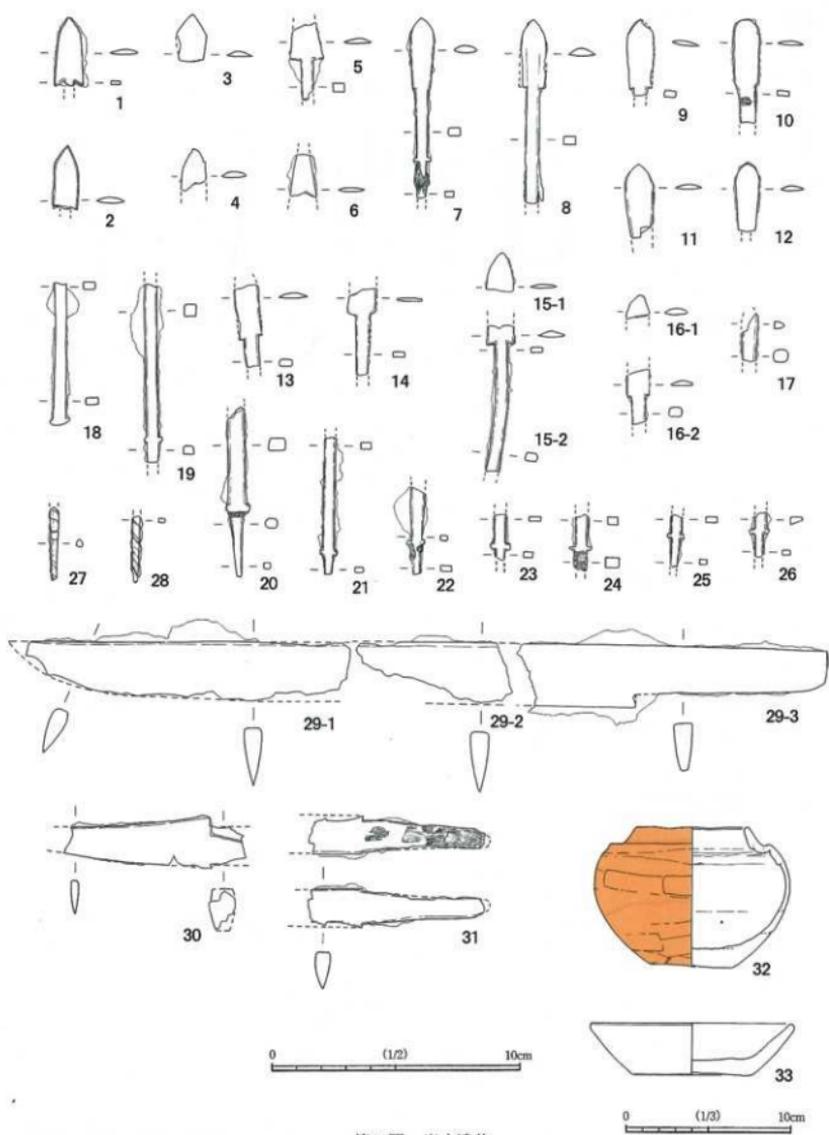


ST-001



0 (1/80) 4m

第22图 横穴高度差正面图,侧面图



第23図 出土遺物

第2表 水神B号横穴群鉄製品計測表

(単位: mm, g)

検出 番号	種別	部 位	出土 位置	身幅	背幅	刀身長	茎厚	茎幅	目釘孔径	全长	身長	茎長	重量	備 考
				鎌身幅	基部幅	鎌身幅	銛長	銛幅	銛穴幅	全长	身長	茎長		
1	長頸鎌	鎌身	a区	11.04	12.46	27.82	[1.57]	4.67	—	[27.98]	[27.98]	—	2.95	腰袂五角形
2	長頸鎌	鎌身	a区	11.20	11.20	25.58	[0.71]	4.84	—	[25.58]	[25.58]	—	3.16	腰袂五角形
3	長頸鎌	鎌身(片)	a区	[11.15]	—	[18.63]	—	—	—	[18.63]	[18.63]	—	0.83	五角形?
4	長頸鎌	鎌身(片)	a区	[9.29]	—	[16.57]	—	—	—	[16.57]	[16.57]	—	0.70	五角形?
5	長頸鎌	鎌身~頸	a区	[9.16]	12.24	[16.10]	[15.55]	[4.19]	—	[31.60]	[31.60]	—	2.74	五角形
6	長頸鎌	鎌身(片)	a区	[10.43]	—	[17.01]	—	—	—	[17.01]	[17.01]	—	1.24	破片
7	長頸鎌	鎌身~茎	a区	10.74	8.16	29.16	29.12	5.06	7.71	[73.21]	[58.28]	[14.93]	5.38	鑿削形
8	長頸鎌	鎌身~頸	a区	9.85	[8.98]	26.89	[46.66]	5.73	—	[73.55]	[73.55]	—	5.88	鑿削形
9	長頸鎌	鎌身~頸	a区	11.00	8.17	28.58	[14.95]	5.20	—	[31.25]	[31.25]	—	4.94	鑿削形
10	長頸鎌	鎌身~頸	a区	10.68	9.92	25.67	[3.52]	5.35	—	[40.82]	[40.82]	—	4.94	
11	長頸鎌	鎌身	a区	11.22	不明	[29.48]	不明	不明	—	[29.48]	[29.48]	—	4.23	鑿削形
12	長頸鎌	鎌身	a区	10.26	7.81	26.82	[1.07]	4.52	—	[27.89]	[27.98]	—	1.59	鑿削形
13	長頸鎌	鎌身~頸	a区	10.67	[7.77]	[22.75]	[11.76]	5.38	—	[33.73]	[33.73]	—	4.23	鑿削形?
14	長頸鎌	鎌身~頸	a区	10.42	10.42	[9.89]	[25.96]	9.92	—	[35.85]	[35.85]	—	3.16	
15-1	長頸鎌	鎌身	a区	[11.01]	—	[15.50]	—	—	—	[15.50]	[15.50]	—	0.75	15-2と同一個体か?
15-2	長頸鎌	鎌身~頸	a区	[11.57]	10.94	[8.04]	[50.95]	5.37	—	[58.99]	[58.99]	—	4.54	15-1と同一個体か?
16-1	長頸鎌	鎌身	a区	[9.60]	—	[8.85]	—	—	—	[8.85]	[8.85]	—	0.33	16-2と同一個体か?
16-2	長頸鎌	鎌身~頸	a区	[9.13]	7.81	[10.82]	[11.47]	[5.41]	—	[22.29]	[22.29]	—	1.36	16-1と同一個体か?
17	長頸鎌	鎌身	a区	[7.56]	—	[18.81]	—	—	—	[18.81]	[18.81]	—	1.25	鑿削形?
18	長頸鎌	頸	f区	—	—	—	[56.91]	5.11	8.04	[56.91]	[56.91]	—	5.23	
19	長頸鎌	頸~茎	a区	—	—	—	[62.35]	5.98	8.46	[70.84]	[62.35]	[8.49]	9.32	
20	長頸鎌	頸~茎	a区	—	—	—	[42.96]	6.32	10.16	[68.72]	[42.96]	[26.76]	6.18	
21	長頸鎌	頸~茎	a区	—	7.29	—	[47.41]	5.09	7.29	[55.42]	[47.41]	[8.01]	4.04	
22	長頸鎌	頸~茎	a区	—	—	—	[23.82]	5.16	7.14	[35.89]	[23.82]	[12.07]	3.21	
23	長頸鎌	頸~茎	a区	—	—	—	[14.57]	4.57	8.30	[18.42]	[14.47]	[3.85]	0.88	
24	長頸鎌	頸~茎	a区	—	—	—	[14.18]	5.01	8.74	[23.31]	[13.97]	[9.13]	1.32	
25	長頸鎌	頸~茎	a区	—	—	—	[9.28]	4.90	7.30	[20.86]	[9.28]	[11.56]	0.71	
26	長頸鎌	頸~茎	e区	—	—	—	[8.10]	4.98	7.82	[17.56]	[8.76]	[8.80]	1.02	
27	長頸鎌	茎	a区	—	—	—	—	—	—	[29.58]	[0.00]	[29.58]	0.57	
28	長頸鎌	茎	a区	—	—	—	—	—	—	[26.20]	[0.00]	[26.20]	0.66	
29-1	直刀	刀身先端部	f区	22.23	7.30	[31.40]	—	—	—	[31.40]	[31.40]	—	68.78	
29-2	直刀	刀身	c区	23.40	8.06	[63.86]	—	—	—	[63.86]	[63.86]	—	27.04	
29-3	直刀	刀身基部~茎	a区	21.28	7.51	[45.84]	7.45	19.57	—	[123.84]	[45.84]	[78.00]	79.83	
30	刀子	刀身~茎	a区	21.82	5.65	[60.23]	10.40	15.37	—	[74.16]	[60.23]	[13.93]	19.38	
31	刀子	刀身~茎	a区	16.22	5.29	[22.49]	4.59	8.11	—	[72.22]	[22.49]	[49.73]	13.11	
	長頸鎌	頸部片		—	—	—	—	—	—	—	—	—	29.60	16点
	長頸鎌	銛銛被片		—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.67	5点
	長頸鎌	茎部片		—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.54	17点
	長頸鎌	その他片		—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.48	15点

No. 2とNo. 14, No. 11とNo. 13, No. 9とNo. 10は同時に計量

[] 内は残存片

コ形を呈している。前壁は崩落が著しく、平面隅丸を呈しているためか前壁と側壁の境界は不明瞭である。

奥壁及び右側壁奥部には、幅6cmのノミ痕が顕著に認められた。このノミ痕は玄室排水溝及び玄室床面にも認められ、狭鋸状の工具と思われる。玄室排水溝は狭鋸工具により粗く掘られており、また、玄室床面には3～4条を1単位として狭鋸工具痕が認められ、その痕跡から左奥側より徐々に掻き出すように床面を整形したものと判断される。

羨道 羨道は入口部が削平されているため、全体の形状は不明である。規模は、残存長が1.34m、玄門下幅が1.59m、残存部の入口側の幅が1.04mである。このことから、奥部から入口に向かって漸次幅を狭める形態を呈していたものと判断される。

排水溝は羨道中央から玄室床面に認められ、残存長1.93m、幅0.15m～0.35m、深さ約0.17mを測る。土層断面から、羨道中央に堆積した土砂と壁面に堆積した土砂に差違が認められ、羨道平面で検出した凹凸と考え併せると羨道に木柱、板壁などの構造物が存在した可能性も考えられる。

第4節 遺物 (第23図, 図版11)

1～26は鉄鏃各部である。身のみで判断すると、15本ないしその前後になろうか。ほぼ総てが有茎と思われ、身の形状等から棘籠被蓋箭と同長三角ないし五角式と呼ばれるタイプで占められる。前者についてはほとんど開のないものがあり、後者については浅い腹袂を有するものを主流とし一部に直角開の三角形形式らしきものがある。なお、茎についてはそのほとんどが尖根系長頸鏃と思われる。

29は直刀である。3点に分かれているが同一個体であろう。30、31は刀子である。30は切先部と茎の一部を欠失する両開の刀子であるが、茎は端部を欠くのみで旧形をうかがうことの出来るものである。31は切先部と茎の一部を欠失する両開の刀子である。

32は羨道 f 区、黒褐色シルト混り粘土 (4層) 下部で出土した土師器壺である。胴部内面の輪積痕が残り内面の調整が雑であることから、受口状の口縁を有する無頸壺であろうか。胴部と口縁部片とに大きく分かれ、正位の底部片の上に胴部から口縁部片が倒立した状態で出土した。胴部下半の器壁が薄く底部片との接合部は明確ではないが、口径6.6cm、受口部外径9.5cm、胴部最大径11.8cm、底径5.0cm、復元器高8.5cm、口縁部高1.1cmを測る。6世紀末葉から7世紀初頭を前後する時期のものと思われる。

33は玄室内 d 区、黄褐色シルト混細砂層 (1層) 下部で出土した土師器杯である。磨滅が著しく調整は不明であるが、非ロクロ成形で、口径12.0cm、底径7.2cm、器高3.2cmを測る。器壁が厚く、緩やかに立ち上がる体部から8世紀前半のものと思われる。

第5節 まとめ

1 ST-004 (4号横穴) について

水神横穴群はA群～C群に分かれ、計9(8)基の横穴群として従来把握されていた¹⁾。今回は因らざも工事に伴って、B群の西側隣接地で発見されたことから、B群の一つとして把握したものである。また、名称については通し番号により、4号横穴(ST-004)とした。

この4号横穴の特徴を表で示せば次のようになる。

規模（玄室長×玄室幅×羨道幅）	天井形態	棺座の有無	隔壁の有無	出土遺物
4.8m×3.3m～3.7m×1.5m	羽子板形	縦アーチ形	無	無（段） 鉄鏝、直刀、刀子、土師器

まずその規模であるが、玄室長が約5mに及ぶ点で、大型の部類に入る。次に、平面や天井形態、及び玄室と羨道の間に低い段を有する点で、いわゆる「中尾型横穴」と呼ばれているタイプに近似する²⁾。そして、出土遺物、とりわけ鉄鏝や土師器（壺）は遡っても6世紀末葉、7世紀初めから前半の頃の様相を示すものと考えられる。

このような様相を示す横穴は水神横穴群の他の9基³⁾には見られず、もちろん湊川の主流タイプ（正方形ないし長方形でドーム形、無棺座）からは外れた位置にある。その理由については、一概に言えないが、築造年代との関連が大きいのと思われる。と言うのは、従来知られている「中尾型横穴」（石神横穴群、上本谷横穴群等）は7世紀初めから前半のうちに集中しており、これは上総における横穴墓出現の現状（6世紀代に遡る事例は少数に留まる）からして、やはり横穴墓という葬制を取り入れて間もない段階と言えるのではなかろうか。

この4号横穴は立地からすると、B群でもA群寄りの谷の中央に位置し、当地の群集性からは無縁な単独に近いあり方である。初期の横穴としては頷ける環境ながら、何故その周囲に継続して築かれなかったかという疑問もある。それを出自の相違と見ることが出来ようが、そもそも横穴の形態自体同一地域においてもある程度の多様性を有して変遷する（とりわけ上総西部）。ここでは、とりあえず上記の事実を指摘するに留めたい。

注1 文献により多少相違がある。

- ①君津都市文化財センター編 1987『富津市埋蔵文化財分布地図』富津市教育委員会
- ②千葉県文化財センター編 2003『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会
- 2 西原崇治 1997「千葉県木更津市所在の横穴墓について」『多知波奈考古』第3号 橋考古学会
- 3 次の報告書所収論文中に略図が掲載されている。
牛蒡茂行 1977「湊川流域の横穴群について」『西山横穴群調査報告書』西山横穴群発掘調査団

参考文献

- 高橋在久 渡辺智信 1972「湊川流域の横穴群調査概要」『千葉文化』第6号 千葉県文化財保護協会
 楢山林織ほか 1973『大湊横穴群調査報告-富津市文化財調査報告書1-』岩坂大湊横穴群調査団
 佐藤克巳ほか 1976『木更津市中尾横穴調査報告』木更津市中尾横穴資料刊行会
 野中 徹ほか 1977『西山横穴群調査報告書』西山横穴群発掘調査団
 西原崇治ほか 1996『中尾遺跡群Ⅰ』財団法人君津都市文化財センター

第4章 町田遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の方法(第24図)

町田遺跡では、これまで当財団をはじめとして数回の調査が行われてきた。平成10年度の当財団による調査において、 $X=-86300.000\text{m}$ 、 $Y=4900.000\text{m}$ を起点とする $20\text{m}\times 20\text{m}$ の大グリッドが設定されている。今回の調査でもこれを踏襲し、西から東にA、B、C、・・・、北から南に1、2、3、・・・、とした。なお、設定よりはずれの部分については、新たに大グリッドを追加設定して対応した。すなわち北側では南から北に99、98、97とし、西側では東から西にZ、Yとした。小グリッドはこれを百分割した $2\text{m}\times 2\text{m}$ のグリッドを設定し、北西隅を00、東に01、02、・・・、南に10、20、・・・、南東隅を99とする。これによって、各々のグリッド名はD 8-53、Z 14-49などと呼称する。

調査時の遺構番号は001、002のように通し番号を振っているが、文中ではこれを「001号跡」というように表現している。

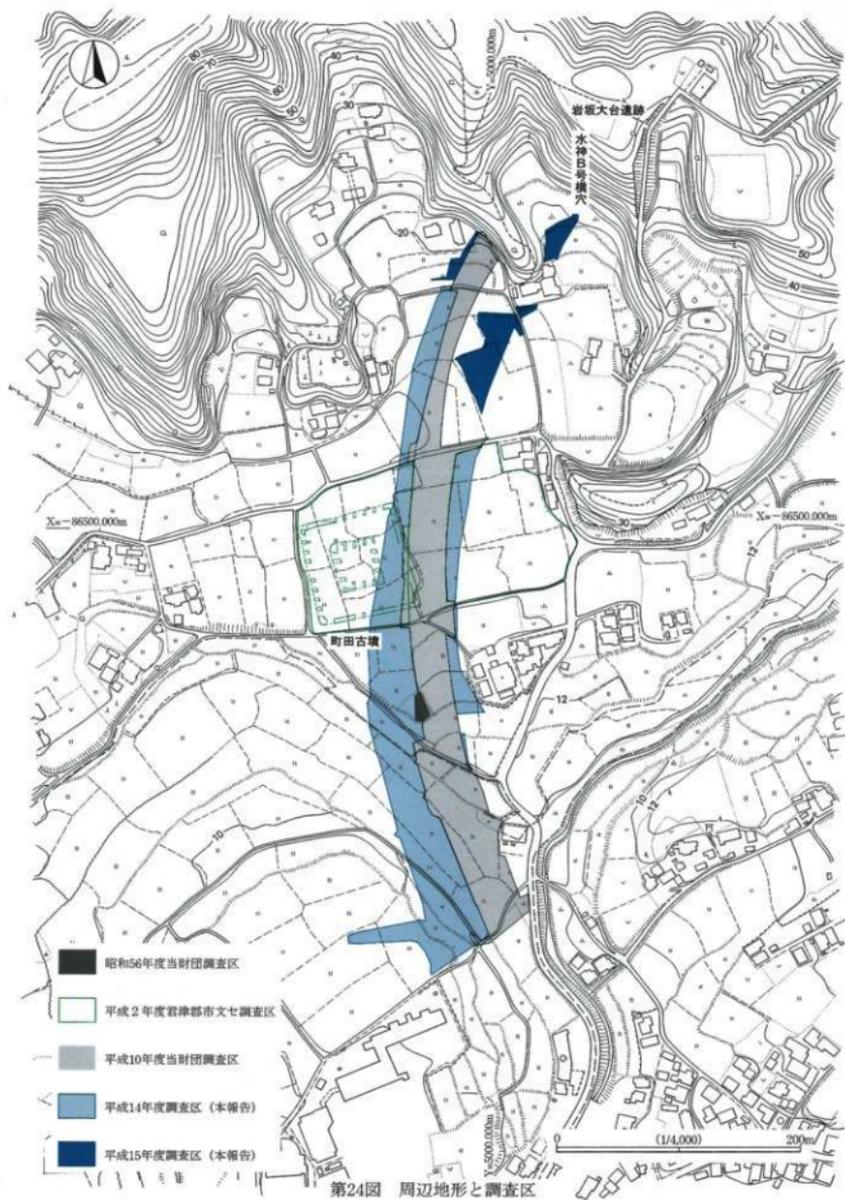
2 調査の経過(第3表、第25図)

町田遺跡は昭和56年度の当財団による発掘調査を端緒に、平成2年度には財団法人君津郡市文化財センターによって町田古墳と合わせて確認調査が行われた。その結果町田古墳は二重周溝を有する大型方墳であることが判明し、築造時期は7世紀前半代と推定されている¹⁾。その後平成10年度に再び当財団による調査が行われ、町田古墳の周溝の一部と古墳時代溝状遺構のほか、竪穴住居跡・水田址などを検出している²⁾。今回は館山自動車道建設に伴い、平成14年度と平成15年度の2か年にわたり実施された。

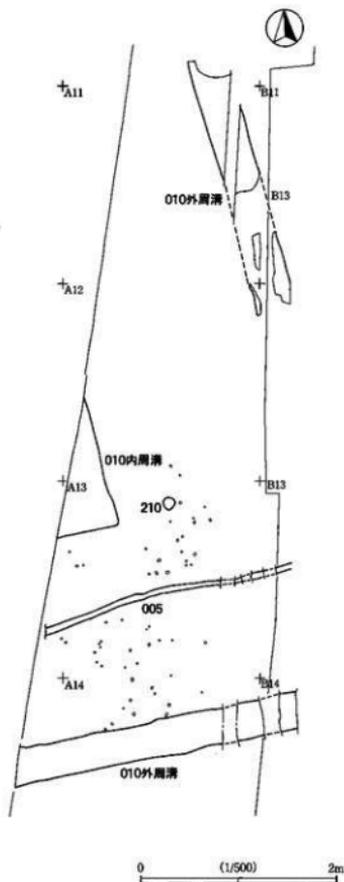
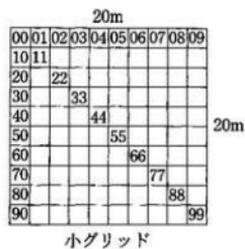
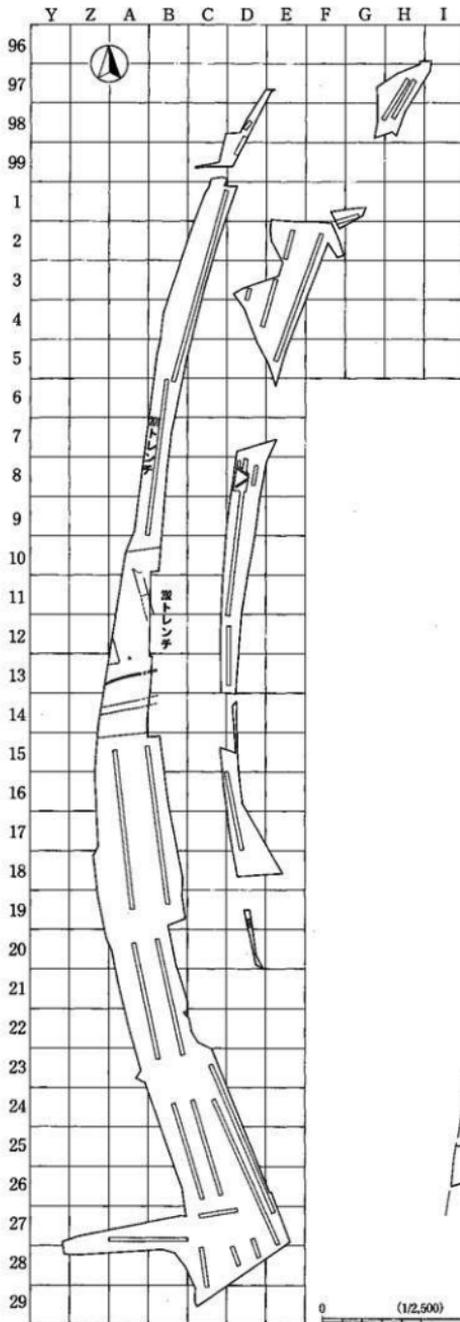
平成14年度の調査では、対象面積18,613㎡について上層確認調査を行い、2,550㎡について本調査を実施した。町田古墳の二重周溝の一部を外周溝・内周溝ともに検出した。このほか古墳時代の溝状遺構とピット群を検出している。平成15年度の調査では、対象面積2,792㎡について上層確認調査を行ったが、遺構・遺物ともに検出されず、確認調査で終了した。

調査年度	調査主体	調査原因	成果	参考文献
昭和56年度	財団法人千葉県文化財センター	周辺道路	遺構・遺物なし	財団法人千葉県文化財センター 1983『岩敷人古遺跡』
平成2年度	財団法人君津郡市文化財センター	地盤整備	町田古墳二重周溝確認、古墳時代以前の溝状遺構3条 町田古墳：規模88mの方墳、7世紀終末期古墳と推定	富津市・財団法人君津郡市文化財センター 1991『町田遺跡群』
平成10年度	財団法人千葉県文化財センター	国道465	弥生時代竪穴住居跡1・溝状遺構4、古墳時代竪穴住居跡2・溝状遺構6・ピット群 ・町田古墳外周、奈良・平安時代溝状遺構 ・水田跡、中～近世道路状遺構1・ピット群、奈良・平安時代灰輪陶器・鉄滓出土	財団法人千葉県文化財センター 1999『千葉県文化財センター年報No.19』～平成10年度～
平成14年度	財団法人千葉県文化財センター	館山道	町田古墳二重周溝、古墳時代溝状遺構3、土塚・ピット群	
平成15年度	財団法人千葉県文化財センター	館山道	遺構・遺物なし	

第3表 町田遺跡調査履歴



第24図 周辺地形と調査区



第25図 調査区全体図と道構配置図

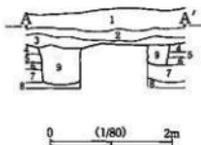
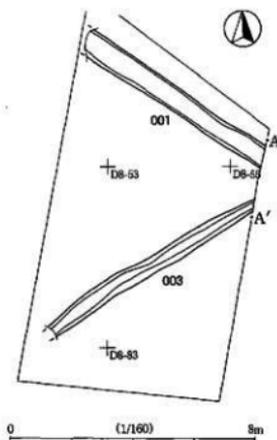
第2節 検出した遺構と遺物

1 遺構とその出土遺物

001号跡 (第26図, 図版12)

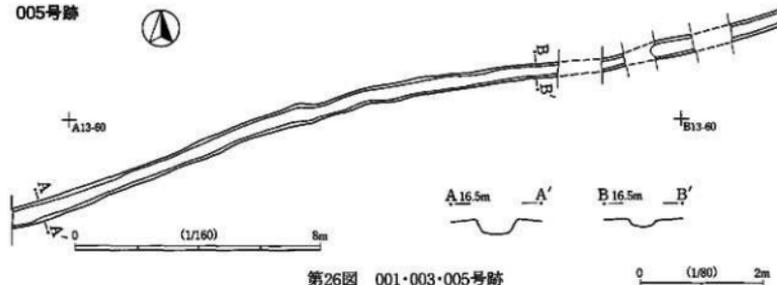
古墳時代の溝状遺構である。D 8-33, 44周辺に位置する。平成10年度調査区でも同一の遺構が検出されており、遺構番号はこれに合わせた。幅は約0.7mで、確認面からの深さは約0.6mを測る。底面は緩やかに湾曲し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。北西から南東にかけてほぼまっすぐに伸びており、溝幅も一定し、北西方向に傾斜している。覆土はほぼ単一構造で、黒色土・灰色土・灰白色土の混在した土層である。周囲の自然堆積土の状況と比較すると、人為的に埋められた可能性が高い。出土遺物はないが検出状況から古墳時代の溝状遺構とした。いわゆる「小糸川タイプの溝」³⁾と考えられる。

001・003号跡

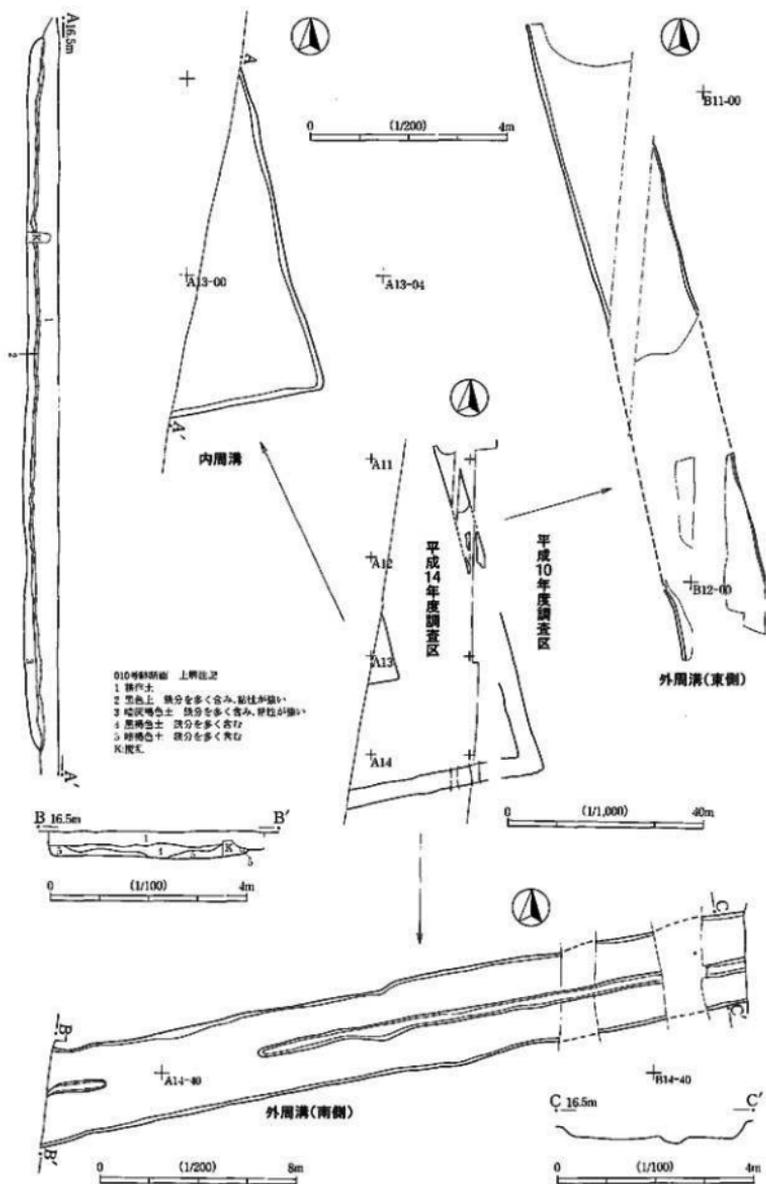


- 001・003号跡断面 土層表記
- 1 腐土
 - 2 灰白色土 断面が付着している
 - 3 黒色土
 - 4 灰色土
 - 5 灰色粘質土
 - 6 黒灰色土 7層への遷移層
 - 7 黒色土
 - 8 灰白色土
 - 9 黒色土・灰色土・灰白色土がマゼイク状に混じる (001・003覆土)

005号跡



第26図 001・003・005号跡



第27図 010号跡

003号跡 (第26図, 図版12)

古墳時代の溝状遺構である。001号跡に近接して、D 8-63, 64周辺に位置する。001号跡と同様に平成10年度調査区でも検出されている。出土遺物もないが検出状況で判断した。幅は約0.4m～0.6mで、確認面からの深さは0.35mと浅い。001号跡と比べるとやや不整形なつくりで溝幅は一定していないが、底面は平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。南西から北西に走り、底面のレベル差があまり明瞭ではないが、南西方向に傾斜していると言える。覆土は001号跡と同質の土層であるので、同時か近接した時期に人為的に埋められた可能性が高い。「小糸川タイプの溝」と考えられる。

005号跡 (第26図, 図版13)

古墳時代の溝状遺構である。A13グリッドのおよそ中央部を東西に走る。幅は約0.4m～0.7mで、確認面からの深さは西側で0.25m、東側では約0.1mと浅い。底面はほぼ平坦で、壁面の立上りは001号跡・003号跡と比べるとやや傾斜するようだが、調査時の印象では垂直に近い。南西から北西にかけて伸びており、南西方向に傾斜している。A13-53にねじれるような形状の箇所があり、ここからZ13-79まではほぼまっすぐであるが、これより北西側は緩やかに蛇行している。本遺構も平成10年度調査区で検出され、001号跡との重複が確認されている。断面の観察によれば本遺構のほうが010号跡よりも若干古いのが、同時に存在していた可能性もある。灰白色粒子を含む灰黒色土を覆土とする。出土遺物はない。「小糸川タイプの溝」と考えられる。

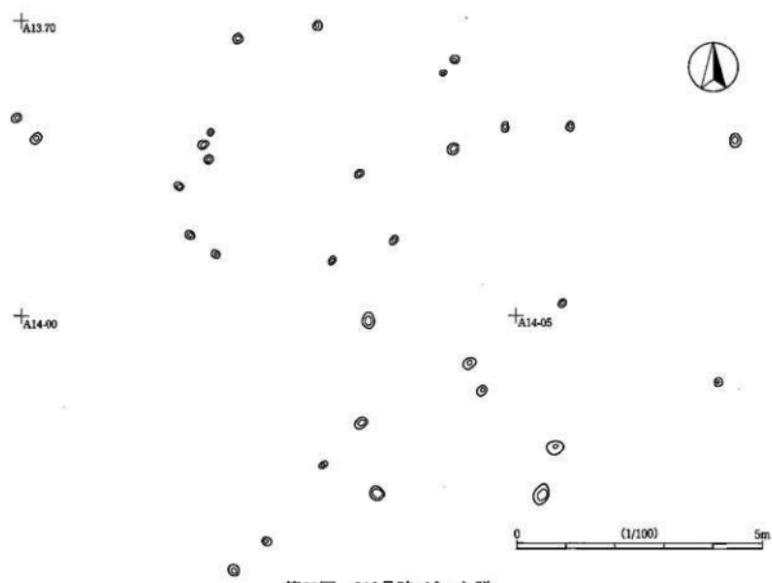
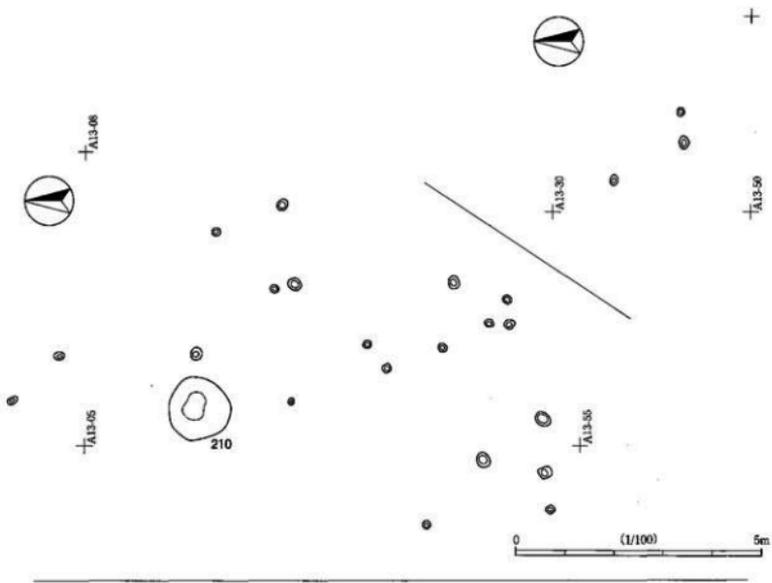
010号跡 (第27図, 図版12・13)

町田古墳の二重周溝である。外周溝の二辺の一部と内周溝のコーナーを検出した。外周溝の南側には轍状の凹みがみられる。まず外周溝は、東側の一部と南側の一部を検出した。平成10年度調査で検出した南西コーナーとつながる。東側では溝幅3.6m～4.0mを測り、確認面からの深さは0.15m～0.2mである。検出した部分のうち南半部は攪乱が著しいので詳細は不明だが、南端部西側の上端が少しゆがんだ形状をしている。南側の外周溝は幅3.5m～3.8mと東側よりやや狭く、確認面からの深さは0.2m～0.25m弱で東側よりも若干深い。中央部で上端に平行する轍状の凹みを検出した。

凹みは東側の深い部分で0.15mほどあり、西側では浅く、途切れている部分もある。平成10年度の調査では、同様の轍状凹みが東側の外周溝内で2条検出されている。第27図のセクションを見ると後から凹みが埋まったような印象を受けるが、平成10年度調査の成果によれば、周辺の底面との埋没時期差はほとんどない。壁面の立上りは東側・南側ともに垂直に近いと言えよう。また底面にはあまり起伏がなくほぼ平坦である。

次に内周溝は、南西のコーナーを検出した。外側の上端のみで、内側の上端は検出されていない。財団法人君津郡市文化財センターの確認調査では内周溝の溝幅は南西隅周辺で5.0m～6.0mであるので、その成果とも符号する。確認面からの深さは約0.2m～0.3mを測り、外周溝よりもやや深い。壁面の立上りは南側では比較的急な傾斜であるが、北側では緩やかである。底面には緩やかな起伏があり、0.1m程度のレベル差を示す。

出土遺物は少なく、図示した遺物は本遺構に直接伴うものではない。第29図1は土師器片で、甕の肩の部分か。内面には煤が付着している。9世紀代の所産と考えられる。2は砂岩製の石製品で、平板な三角形状を呈する。弥生時代の砥石と考えられる。遺構の底面で出土した。3は近世の煙管である。雁首側とみられるが、上部を欠損している。このほか、鉄滓が4点出土した。



第28図 210号跡・ピット群

210号跡とビット群（第28図，図版12）

210号跡は古墳時代の土坑である。A13-15に位置する。遺物は出土していないが、平成10年度に古墳周溝周囲で検出されたビット群の覆土と同様であるため同一の時代と判断した。立上りの緩やかな皿形の形状である。覆土は2層構造で上部に黒褐色粘質土、下部に暗褐色粘質土がレンズ状に堆積していた。

ビット群は、210号跡と同様に、検出状況から古墳時代の所産と考えられるものである。A12グリッドの南端部からA14グリッド北部にかけて、005号跡を挟むように分布する。プランは円形ないし楕円形のほか、方形基調のものもある。規模は0.1m程度から0.3m弱である。深さは0.1m台のものが最も多く全体の半数を越える。次いで0.1m以下のものが3割存在し、残りはほとんど0.2m台であるが、0.3m程度のものがある。

2 その他の出土遺物（第29図，図版14・15）

遺構外の出土遺物を一括する。4，5は中世陶器で、常滑の捏鉢である。器形は復元できないが、片口を持つものであろう。14世紀の所産と考えられる。4はにぶい褐色を呈し、内面は灰色である。胴部にケズリ痕がみられる。5は暗青灰色を呈する。6は近世陶器で、瀬戸の搦鉢であろう。鉄軸を施し極暗赤褐色を呈す。17世紀の所産と考えられる。7は近世磁器で、伊万里の小型徳利である。およそ17世紀～18世紀の所産であろう。胴部に花弁の呉須を施す。内面に軸だれが観察される。一輪押しの類であろうか。8は砂岩製の石製品である。砥石かどうか判然としないが、概ね弥生時代から古墳時代の所産と考えられる。扁平な角柱状を呈し、下部を欠損する。上面の使用面がかなり滑らかである。9は中・近世の砥石で、凝灰岩製である。下部を欠損し、上端部以外はすべて磨耗痕が見られる。10，11は近世の煙管である。10は吸口，11は雁首である。このほか、鉄滓が34点出土している。出土地点は調査区中央の010号跡周辺に限られる。このうち24点は本調査範囲の東側に設定した202トレンチからであるが、グリッド出土資料を比較すると北側に偏る傾向がある。

挿図番号	種類	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺物番号
第29図2	砥石	砂岩	117.3	72.4	15.9	148.3	010 212
第29図8	砥石	砂岩	84.3	64.8	55.0	314.1	A10-57-1
第29図9	砥石	凝灰岩	53.4	33.0	20.5	35.5	A10-58-2

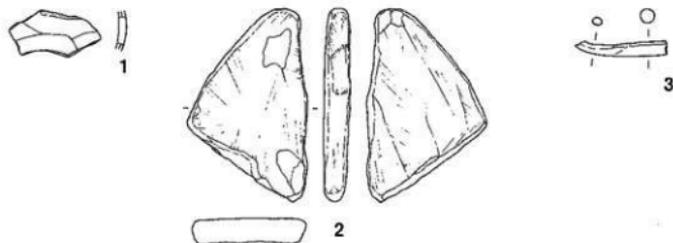
第4表 町田遺跡石器属性表（単位：mm，g）

第3節 まとめ

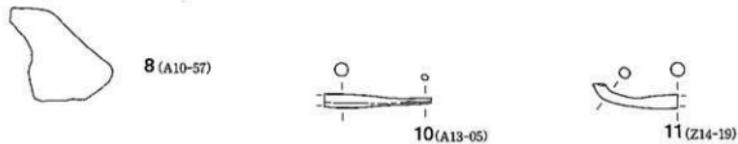
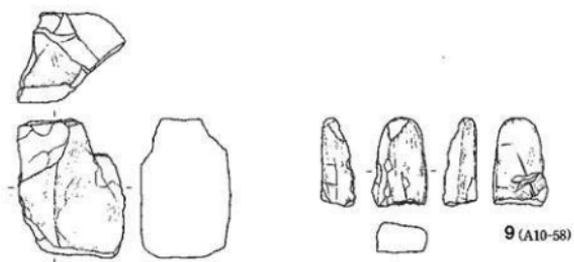
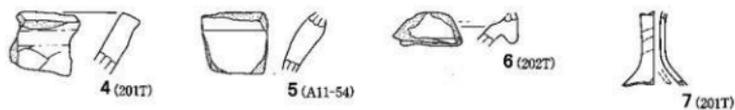
1 町田古墳について（第30図）

当財団と君津郡市文化財センターの調査を通じて、これまで町田古墳について明らかになってきた成果を以下にまとめてみたい。まず、平成10年度の成果も含め当財団の調査によって新たに確認された事項は、外周溝の東側辺長の実数値が約90mであったことで、これにより、88mとされてきた最大規模が90mに訂正されよう。また、外周溝の底面に轆状の凹みが確認されたことも加えておきたい。以下、君津郡市文化財センターによる確認結果をもとに、当財団の調査成果と比較しながら古墳の概要について記述する。なお、第30図にこれまでの調査成果を合成した。

010号跡出土遺物

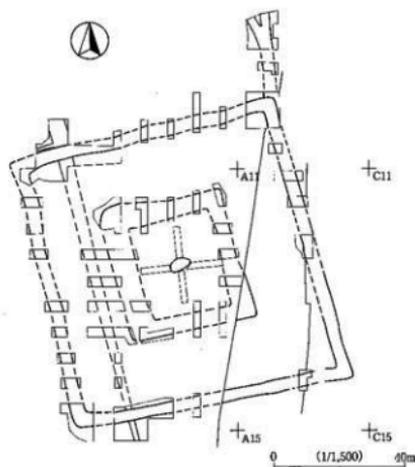


その他の出土遺物



0 (1/3) 10cm

第29図 出土遺物



第30図 町田古墳全体図

古墳の現状は、水田地にわずかながら墳丘が遺存しており、その規模は6.5m×4m、墳頂部と水田面との比高差は1.4mである。古墳全体の形態は二重周溝を有する方墳で、およそ南北方向に長いやや不整形な長方形を呈す。主軸の方向はN-14°-Wで、最大規模は外周溝の最大外辺長から90mを計る。各周溝の外辺長は、外周溝が北から82m、東が90m、南が86.5m、西が84mであるが、北辺と西辺は実数値が出ていない。内周溝は北から38m、東が41m、南が38.5m、西が43mである。外周溝は、西辺と東辺がほぼ平行な位置関係にあるが、東辺が長い分南側に歪んだ形態になっている。内周溝のほうは、北西隅が歪んでいるほかは概ね整った形態をしていると言える。ただし後述のとおり溝幅が一定していない。

周溝の形状は、外周溝が幅3.2m～4.5mで、確認面からの深さは0.16m～0.25m、壁面は比較的急な立上がりを示す。一方、内周溝は幅4.2m～7.9mで計測値にかなりの開きがあり、深さは0.35m～0.4mである。壁面の立上がりは緩やかである。今回調査した部分では外周溝の深さが浅いところで0.15mであるが、ほとんど上記の値の中に収まると言えてよい。また、周溝の底面がほぼ平坦である点も確認結果と一致する。

追葬施設などの付属施設は確認されていないが、外周溝の底面に轍状の凹みが検出された。幅は0.4m～0.7mあり、沈み込みは深いところで0.15mほどの浅いものである。南側で1条、東側で2条が認められる。主体部については、墳丘内に横穴式石室を有し、これに用いたとみられる凝灰岩質砂岩が一部露出している。内裏塚古墳群中の二重周溝方墳との比較から、本古墳は7世紀前半代の終末期古墳と考えられている。

2 その他の遺構等について

今回の調査では古墳時代の溝状遺構と土坑・ピット群を検出している。001号跡・003号跡は近接して存在し、遺構の特徴も似通っている。005号跡は町田古墳の主軸におよそ直行する方向に伸びている。同様の溝状遺構は、君津郡市文化財センターと当財団平成10年度の調査でも検出された。前者では、古墳の主軸に平行する幅3m～5mのものが2条と、直行する幅1mの細いものが確認されている。構築時期は古墳よりも古い。平成10年度の調査でも今回の3条の遺構と同一の溝が検出されており、005号跡については古墳よりも古いと判断された。また、古墳の外周溝東側で君津郡市文化財センターが確認した遺構につながると思われるものも検出している。これらの溝の性格については、本文でも指摘したとおり、いわゆる「小糸川タイプの溝」と考えられ、古墳築造以前と考えるとよいだろう。ただ、古墳の主軸方向に平行な

いし直行するものは、古墳の築造に際して何らかの関連を有していたかもしれない。

次に土坑・ピット群は、必ずしも明確に古墳時代と限定できるわけではないが、検出状況からの推定で当該時期に含めた。分布範囲に偏りがある点に注意される。なお、平成10年度調査においては古墳の周溝内外に同様のピット群が検出されている。

その他の時代については、平成10年度調査で弥生時代と奈良・平安時代の遺構が検出されているが、本報告が未刊行であるので、ここでは詳しく取り上げない。

出土遺物に特記すべきものはなく、町田古墳からの出土もわずかであった。遺構外出土も含めて土師器は小片ばかりで、図示できたのは第29図のみである。量的には近世の陶磁器が多く、中世の陶器も少量出土した。なお鉄滓が古墳周辺で出土しているが、特に鍛冶の痕跡を示すような遺構は検出されていない。

注1 小沢洋 2000 『町田古墳群』『千葉県歴史資料編 考古2（弥生・古墳時代）』千葉県

2 平成10年度調査の成果については、本報告が未刊行であり、第1表にある文献の内容に基づく。ただし町田古墳に関するもののみ、調査時の資料も用いて成果の一部を今回明らかにした。

3 君津市常代遺跡で指摘された溝を指す。

甲斐博幸ほか 1996 『常代遺跡群』財団法人君津都市文化財センター

甲斐博幸 1998 「千葉県常代遺跡の弥生時代の堰-弥生時代南関東の灌漑技術-」『治水・利水遺跡を考える』第7回東日本埋蔵文化財研究会

4 当財団調査範囲において周溝のプランが検出できなかった部分は、財団法人君津都市文化財センターの確認結果を適宜補った。

第5章 花輪上原遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の方法 (第31図)

事業範囲は遺跡の西側を縦貫するかたちで設定されていることから、その広がりや考慮したうえで、北西部を基点 ($X = -87300.000\text{m}$, $Y = 4800.000\text{m}$) に南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットで公共座標 (日本測地系) に拠って一辺40m四方の大グリッドを設定し、更にそのなかを4mごとの小グリッドとし (例えば1A-01), 調査を進めるうえでの基本とした。

なお、調査範囲は帯状の事業地という事情や傾斜面が多いことから、確認調査に当たっては必ずしもグリッドに合わせず、多く地形に応じたかたちなど任意にトレンチを設定した。一部、トレンチの密度の薄い地域もあるがそこは道路敷等により調査が困難なためである。

2 調査の経過

花輪上原遺跡は花輪遺跡 (奈良時代包蔵地) と上ノ原遺跡 (古墳時代包蔵地) を総称したものである。両者は花輪川によって北側が花輪遺跡、南側が上ノ原遺跡として千葉県埋蔵文化財分布地図 (4) に所載されている。

上ノ原遺跡は平成13年5月から確認調査を実施した。その結果、古代～中世にわたる水田跡、溝状遺構が層を違えて調査範囲南寄り (丘陵側) で確認されたことから、引き続き本調査を実施した。検出された遺構は、古墳時代と推定される水田区画一面と中世溝状遺構11である。

花輪遺跡は平成14年4月から確認調査を実施した。その結果、中世に属すると思われる掘立柱建物跡の一部や溝状遺構が調査範囲南側において確認されたことから、継続して本調査を行った。検出された遺構は、中世掘立柱建物跡1、中・近世溝状遺構4等である。

第2節 遺構と遺物

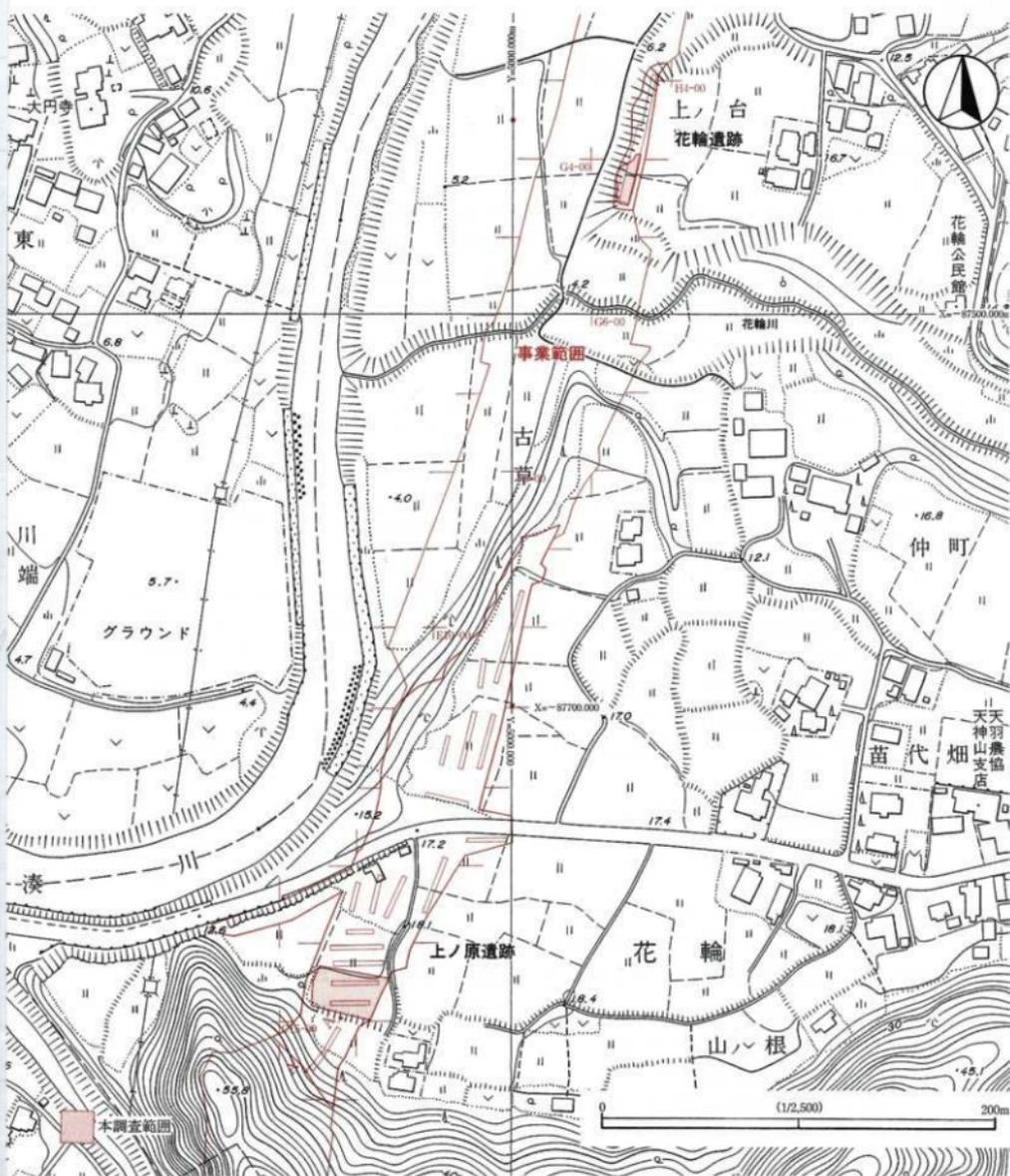
1 上ノ原遺跡

(1) 縄文時代

SX-001 (炉跡状遺構) (第32・33図, 図版20)

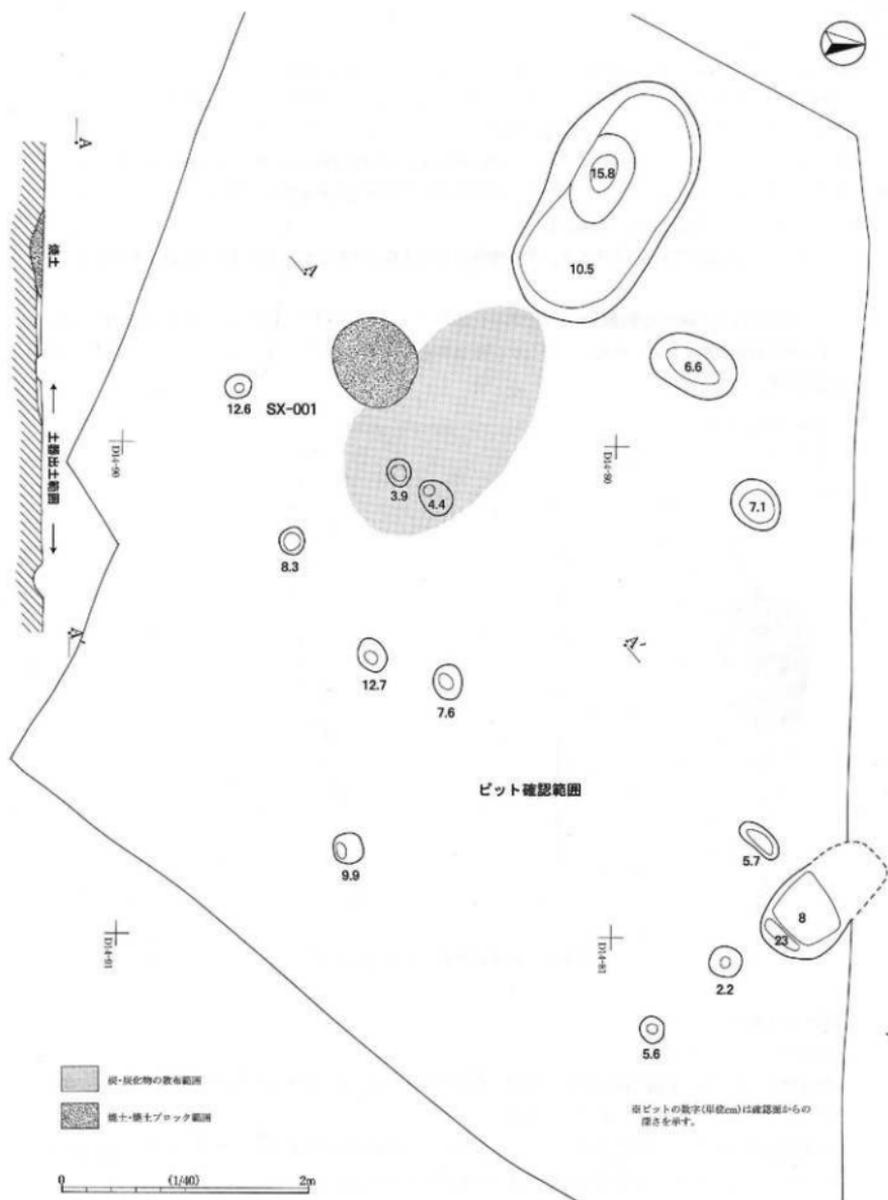
C14-80～D14-80にかけて焼土と炭化物が平面的に検出された遺構を炉跡状遺構と呼称した。焼土は径2mm程の焼土ブロックが主体で、その範囲は大体径0.6m×0.8mの楕円形にわたっていた。厚みは0.1m程ながら中央部は0.15mと深く、凹レンズ状をなす。炉址の北西には、炭化物層が1.2m×2.2m程の卵形に分布しており、その厚みは0.03m程度である。

この焼土・炭化物層の周囲からピット群が確認された。焼土と炭化物層の中央を軸線にしてみると、南西～北東方向を中軸とする長方形の住居プランが想定されるが、その配置は必ずしも規則的ではなく、その深さもせいぜい0.1m前後にすぎない。また、その上の水田と炉址とのレベル差も0.1m内外であり、耕作等に伴うピット状の痕跡も予想される。以上を勘案すると、それを住居に伴うピットと断定するには躊



第31図 花輪上原遺跡全体図

(富津市地形図No.53 1:2,500)



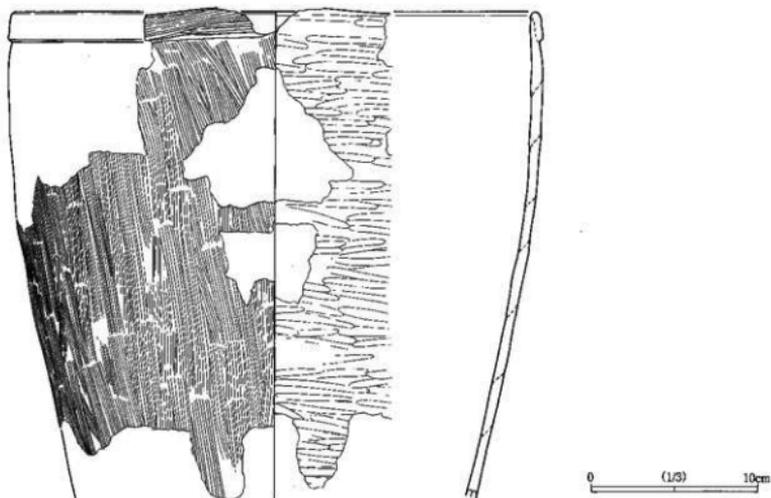
第32図 上ノ原遺跡炉跡状遺構(SX-001)と周辺のピット群

踏せざるを得ず（踏締め面の存在については確認できなかった）、それ故、参考程度に図示している。

問題はこの遺構の年代である。炉跡状遺構周辺からは縄文晩期に属する同一個体の深鉢形土器片が大量に出土した。遺物の採り上げは4m四方の小グリッドで行っているが、全体（139点）の70%が炉跡のすぐ東側のグリッド（D14-80）から、また、全体の90%近くがその西側のグリッド（C14-89）を含めた焼土の周囲2m圏内で出土している。加えて、その出土レベルは焼土面と近接していることからこの土器が炉跡状遺構に伴う可能性は高いと思われる。

これを縄文時代晩期の炉跡とすると、その性格をどう見るかであるが、それについては遺物共々考察で述べたい。

出土遺物は複合口縁の大型深鉢形土器であり、底部と口縁及び胴部の一部を欠く（約2/3個体）。外面全体に刷毛目状条痕を施し、内面は丁寧なナデ調整を施す。全体に明褐色～褐色を呈し、砂粒を多く含む硬質である。



第33図 炉跡状遺構周辺出土縄文土器

（2）古墳時代

水田遺構（第34図、図版18・19）

確認調査において、C14～D14グリッド内に設けた東西方向のトレンチで古代水田の畦畔らしき遺構を認めたことから、本調査に至ったものである。

本調査範囲は隣接する南北方向のトレンチで畦畔らしき遺構は確認されなかったことから、南北方向を中間ラインとし、東西方向は調査対象範囲までとした。面積は550㎡である。

検出面は現地表から約0.8m下の灰色粘土層である。この層が畦畔に相当し、この畦畔に囲まれた範囲

に暗褐色粘土層が堆積していたことから水田確認に至っている。図示したのはこの灰色粘土層上面での確認状況であり、区画内の埋没状況を考えれば実際は若干畦畔の幅が広くなろう。

水田の小区画は調査範囲に掛かっているものや一部を含めて計66面ある。各区画の形状は方形ないし長方形であり、その面積は第34図下表のとおりである。その全形が窺えるもの(約40区画)の平均は7.2㎡(正方形とみれば3m四方)、その分布は大体4㎡～10㎡代の範囲に納まっているといえよう。畦畔面は南西から北東へ緩く傾いており(高低差にしてその両端で0.2m)、その向きもこの勾配に沿ったものと考えられる。水路は調査範囲内では特に見当たらず、また、一部に水口らしき施設も見られるが、とりたてて各区画に共通する付属施設は見出せない。

その広がりについては東西方向はともかく、南側はその西端で岩盤が露出しており、何れにせよ延びても数m程にすぎないだろう。北側は本調査区北端と確認トレンチNo.3との境界付近(D14-30ライン)で消滅している可能性が高い。灰色粘土層自体は僅かの傾斜を保ちながら北へ続いていることからすれば、当然更に北へ延びてもおかしくない。あるいは、山際に近い範囲のみが埋没が早く残り得たのであろうか。

この水田遺構の年代については土層の検討から、縄文晩期～平安時代の間であることは間違いないが、明確な年代決定には至っていない。しかし、本調査区内で出土している土器片がほぼ縄文土器と古墳時代前期・後期の土器(一部は弥生土器か)で占められることからして、古墳時代前期～後期の間としておきたい。

遺物は水田そのものに伴うものではなく、その種類も木製品等はなく僅かの土器片それも小片にすぎなかった。

土坑(第35図, 図版20)

水田の確認面で土坑が4基確認された。水田と同様、古墳時代に含めてよいかどうか問題もあるが、既述した年代幅に収まるものではある。

SK-001

本調査区内北東端で検出された。細長い楕円形であり、長径2.8m×短径1.5m×深さ0.38mである。底面片側に一段を有する。出土遺物は礫石の破損品1点であるが、縄文時代の遺物と思われるところから、(4)遺構に伴わない遺物の項で扱った。

SK-002

本調査区内南東端で検出された。隅丸の長方形であり、長径1.2m×短径0.8m×深さ0.1mである。底面の一部に溝状の落込みを伴う。出土遺物なく、性格は不明である。

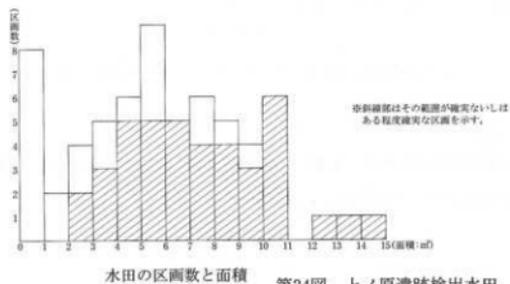
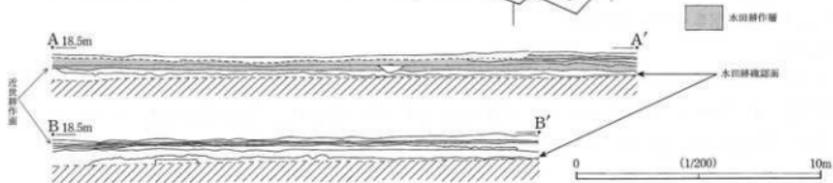
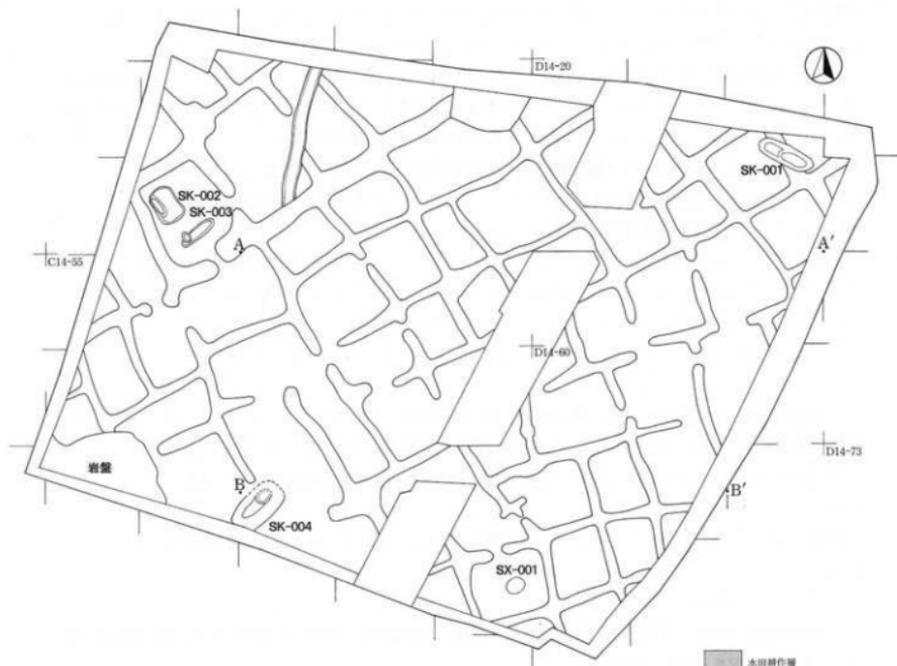
SK-003

本調査区内南西部で検出された。細長い楕円形であり、長径2.1m×短径1.0m×深さ0.1mである。底面の一部に小ピットを伴う。出土遺物なく、性格は不明である。

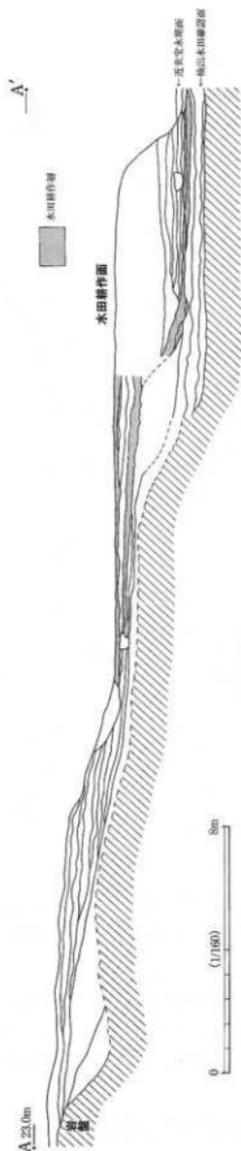
SK-004

本調査区内南東端で検出された。隅丸の長方形であり、北側は一段低い(深さ坑底より約0.1m)。規模は長径(2.8m)×短径1.6m×深さ0.12mである。出土遺物なく、性格は不明である。

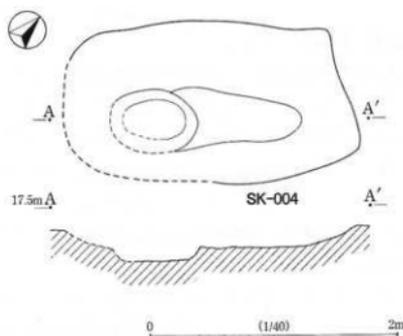
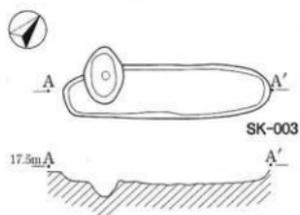
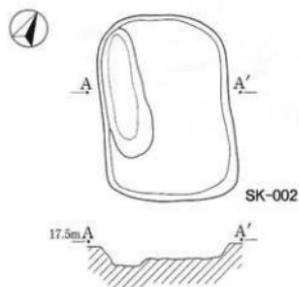
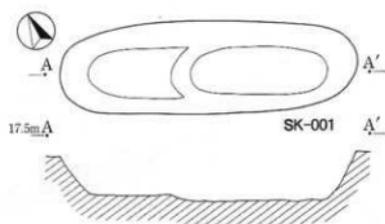
(3) 中世



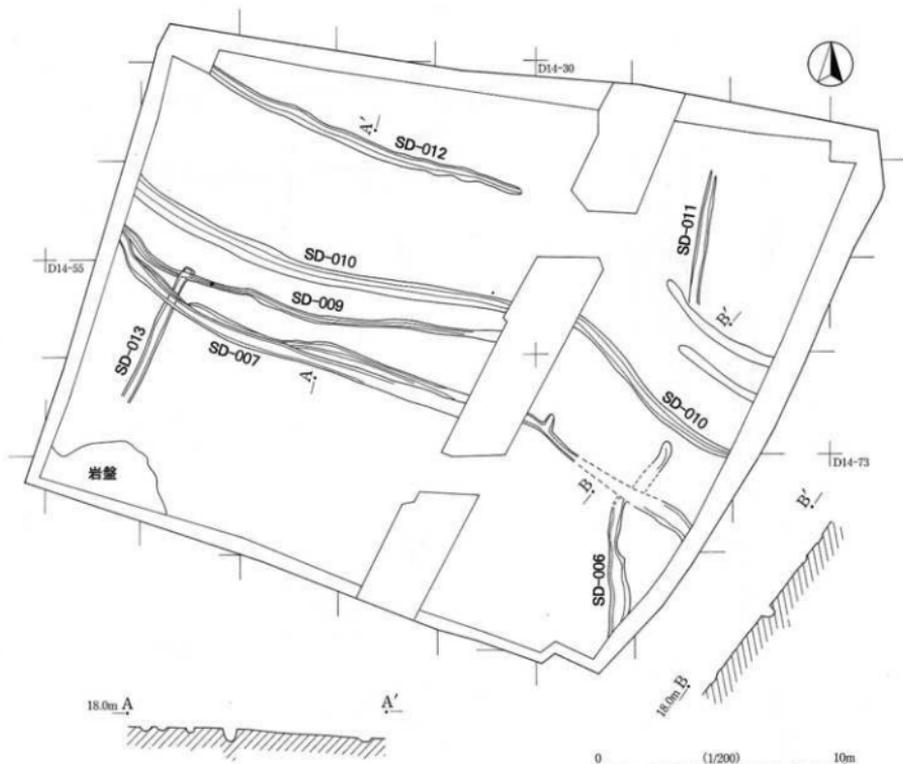
第34図 上ノ原遺跡検出水田



上ノ原遺跡丘陵寄り南北断面図



第35図 上ノ原遺跡土層断面図及び土坑



第36図 上ノ原遺跡中世溝跡群

溝跡群 (第36図, 図版21)

水田遺構の約30cm上に溝跡群の確認面があり、そのレベルより中世陶器が出土していることから本調査の対象となった。数は全部で8本ながら、湾曲を繰り返して東西方向に延びているものが5本、断続しながら南北方向に延びているものが2本ないし3本である。

溝の幅はSD-010が広く(約0.6m~0.9m)、SD-009が狭い(約0.3m)。SD-007、SD-008、SD-011~SD-013はその間である。深さはSD-010が0.15m前後である他は、総て0.1mに満たず、とりわけ南北方向にその傾向がある。途切れがちなのはその結果であろう。底面は何れも概して平滑で、大きな段差も認められない。

なお、SD-009の西側から0.2m(溝幅)×0.3mの範囲で底面から約0.1mの厚みで骨片混じり土のブロックがあり、その上に常滑甕の底部大型片が被せてあった。もちろん意図的なものであるが、骨自体は細片であり果たして人骨かどうかの判断もつかなかった。

さて、これらの遺構の性格であるが、東西方向のものについては、なだらかに北側に下る地形に並行するかたちで浅く掘られていることから、段々畑の境界ないし水切り用の溝ではなかったかと推測する。一方、南北方向のものについては、中世以降の水田に伴う可能性が高いと思われる。骨片混じりのブロックについては、人間というより小動物を葬った可能性を指摘したい。

出土遺物は既述した常滑甕の底部片(第40図37)の他には直接に伴う遺物はない。常滑甕底部は推定径14cm、灰褐色で、胎土に長石粒を含む。年代は特定しえないが、13世紀～14世紀の幅に収まるものであろう。

(4) 遺構に伴わない遺物(第37～40図、図版24～26)

縄文土器と石器のほとんどはC14-40～70番台のグリッド、要するに本調査範囲のとりわけ西半分が多く出土している。これに対して、古墳時代・平安時代の土器はD15～C15内、つまり本調査区東側～その南側の丘陵寄り確認トレンチ内で多く出土している。付近に該期の遺構でも存在するのだろうか。

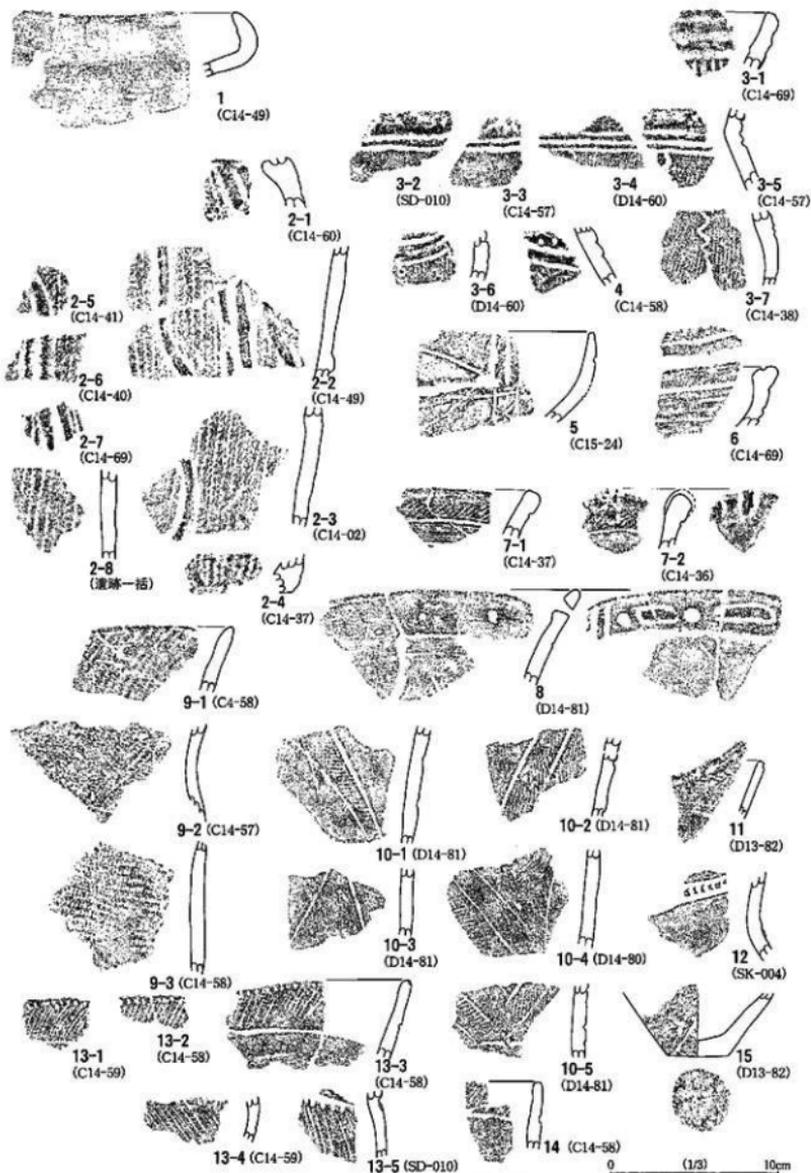
第37図1～4は縄文時代中期加曾利E式後半の土器である。1は口縁部が大きく内湾する浅鉢形土器の口縁部片で、無文の土器である。2は口縁が内傾する深鉢形土器で、計11点が同一個体と思われる。縦方向の隆帯は1条と2条一組があり、交互に貼付けられるが、前者は蛇行するかたちとなる。3は上位に括れを有する深鉢形土器で、計6点が同一個体になるとと思われる。口縁は何単位かの波状をなすものであろう。砂礫を多く含むためか内外面の摩耗が著しい。4は恐らく3と類似する土器で、括れ部横方向上段の隆帯に交互の刺突文を施す。

5～11は縄文時代後期堀之内式～加曾利B式にかけての土器である。5は浅鉢形土器で、外面に沈線で幾何学的文様を施し、内面は丁寧に撫でている。6、7も同様浅鉢形土器であるが、7は多少上位で括れる形態のもので、口唇部に2箇1単位の粘土紐を貼り付けている。なお、6は砂礫の混入が著しい。8は口縁部内面に沈線による文様を施し、2箇一組の透穴も内側から穿っている。9はいわゆる粗製の深鉢形土器である。10は口縁が多少ラッパ形に開き、横位の菱形縄文帯が胴部を廻る堀之内期の特徴的な土器である。11は口縁部が山形となる薄手の土器である。12は胴部に斜めの刻目文帯を有し、多少堅めの胎土である。13は上胴部が括れる鉢形土器で、口縁部と胴部に櫛目文を施す。14は口縁部片であり、13と同一個体の可能性が高いが一応別扱いとした。15は鉢形土器の底部であり、底面には網代痕らしき痕跡がかるうじて確認される。

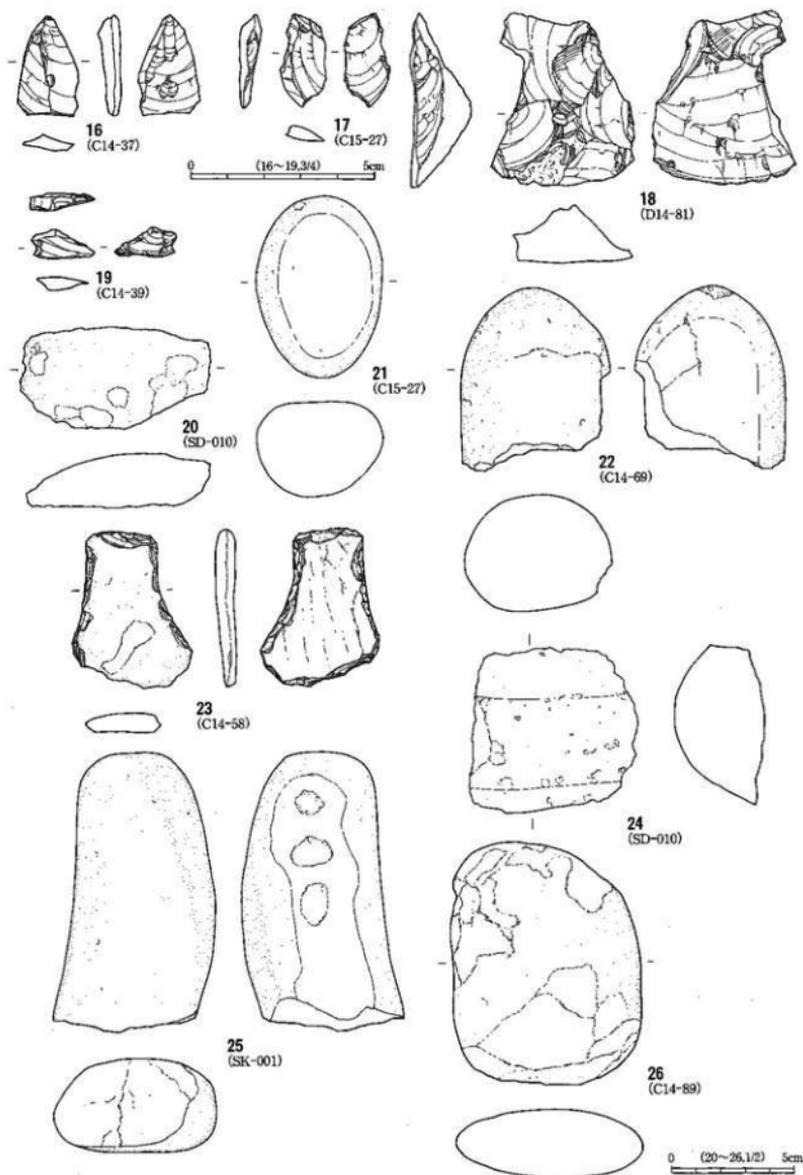
第38図16、17は剥片、18は石核と思われる。19は側縁に調整が認められる剥片であり、スクレイパーないしは石鏝の未製品であろうか。何れも石材は気泡が混じる黒曜石である。20、22(被熱)は磨石ないし敲石の破損品、21は磨石である。23は小形の打製石斧であるが、この種のものは、石匙としての機能も考えられる。24は石皿の側縁部と思われる。25は敲石(SK001覆土内出土)であるが、一端を欠く。26は用途不明ながら、とりわけ下端部側縁が剥離しており、一種の土掘具であろうか。

第39図27は古墳時代後期の土師器高坏部と思われる。28は奈良時代の土師器坏であろう。29は長頸瓶の口縁部であろう。30、31は9世紀代以降の土師器坏底部である。32は9世紀代以降の須恵器瓶(高台部径10.5cm)の底部、33は恐らく須恵器の臍部であろう。

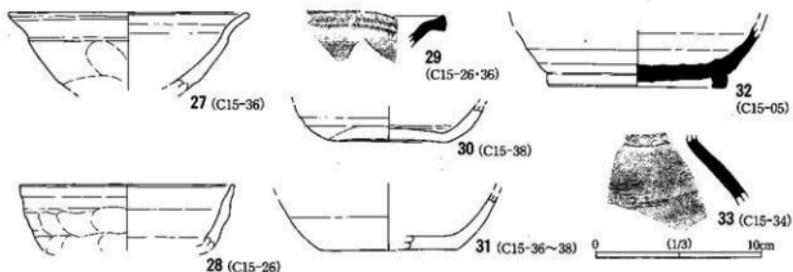
第40図34～37は中世の陶器である。34、35は常滑の片口口縁部片で、口唇部が34は多少丸みを帯びる反面、35は端が幾分開いている。36は小形の常滑壺底部片である。暗灰色で、胎土に長石粒を多く含む。38はかわかけ約半個体である。全体に摩耗が激しく底面の整形等は不明である。



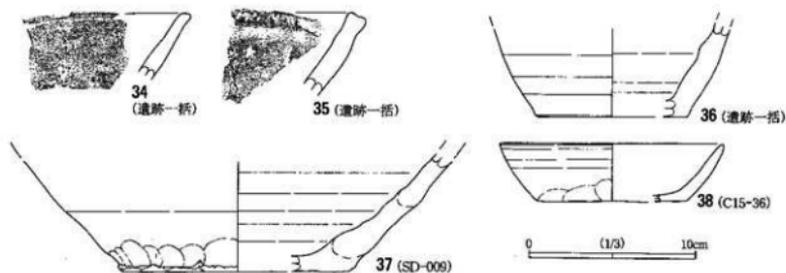
第37図 上ノ原遺跡出土縄文土器



第38図 上ノ原遺跡出土石器等



第39図 上ノ原遺跡出土土師器・須恵器



第40図 上ノ原遺跡出土中世陶磁器・かわらけ

押図番号	種類	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺物番号
第38図16	剥片	黒曜石	2.75	1.70	0.6	2.0	C14-37-1
第38図17	剥片	黒曜石	2.55	1.25	0.60	1.34	C15-27-4
第38図18	石核	黒曜石	4.75	3.90	1.65	19.86	D14-81-4
第38図19	スクレイパー?	黒曜石	(1.70)	(0.80)	0.45	0.56	C14-39-3
第38図20	磨石片?	安山岩	(7.75)	(4.20)	(2.38)	91.21	SD-010-2
第38図21	磨石	砂岩	7.40	5.10	4.00	218.88	C15-27-3
第38図22	磨石片?	安山岩	(7.45)	6.15	5.75	206.10	C14-69-1
第38図23	打製石斧	粘板岩	6.40	4.80	0.80	29.28	C14-58-2
第38図24	石皿片?	安山岩	(6.90)	(6.75)	(3.65)	298.69	SD-010-2
第38図25	敲石	安山岩	(11.20)	5.80	3.80	454.36	SK-001-1
第38図26	土相具?	砂岩	9.90	7.75	2.80	299.58	C-14-89-2

第5表 上ノ原遺跡石器属性表 (単位cm.g)

2 花輪遺跡

(1) 中世

掘立柱建物跡 (SB-001: 第41・42図, 図版22・23)

湊川に妻側を向けて建てられた、2間×3間(以上)の掘立柱建物である。規模は梁行3.1mながら、桁行は範囲外に延びており、現状で約4mである。柱穴の形状は円形と方形があり、その大きさは径0.2m~0.3m、深さは大体0.4m~0.5mである。柱痕は比較的良く識別され、径約0.05m~0.1mの幅で確認し得た。内部にも柱穴が確認されることから、総柱の可能性もあるが、あるいは間の違いかもしれない。

北側には掘立柱建物と隣接して一部重複する二条の溝が走り、更に3mの距離を置いて溝(内側に柵列を伴うか)が併走する。また、南側も同様に約3mの距離を置いて溝が併走し、そこから先は緩い傾斜面となる。一方、西側川縁には掘立柱建物と近接して柵列らしき柱穴が並ぶ。なお、掘立柱建物内の土坑(SE-001: 当初井戸として調査)については、別途報告するが、あるいは伴う可能性もあろう。

出土遺物はみられなかった。

溝跡 (SD-001~SD-003: 第41・42図, 図版23)

SD-001は掘立柱建物の南約3mの距離を置いて併走し、緩斜面となる肩口に掘られた比較的大きな溝(最大で幅1.7m、深さ0.6m)である。屋敷の区画溝であろうか。

SD-002は掘立柱建物の北へ隣接して併走する2条の細い溝(共に幅0.3m、深さ0.15m)であり、一部で重複する(新旧関係はSD-002A>SD-002B)。掘立柱建物とその北の空間を分ける溝であろうか。

SD-003は掘立柱建物の北約3mの距離を置いて併走する狭い溝(幅0.4m、深さ約0.1m)であり、底面には径0.06m~0.08m程の小ピットが不規則に確認された。柵列と共に掘立柱建物の北側空間を限るものであろう。

土坑(第41図, 図版23)

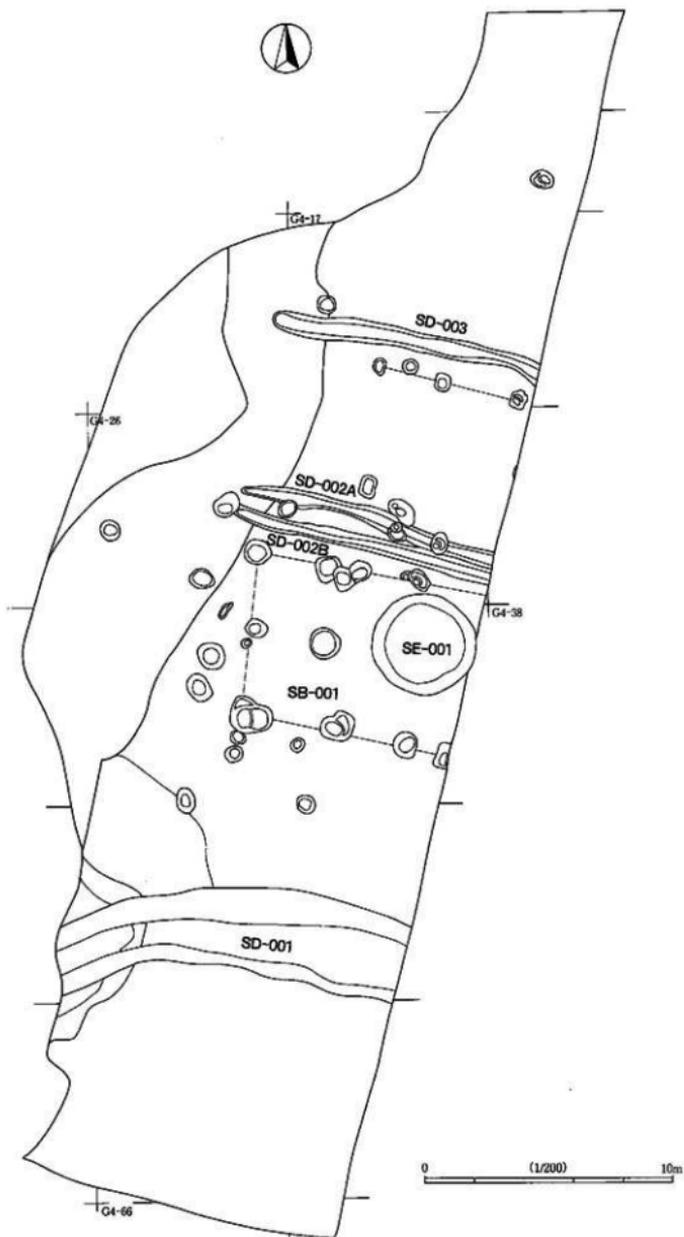
SE-001は掘立柱建物内で確認された。柱穴と重複しないことからあるいは掘立に伴うものかもしれない。ほぼ円形(径2m)であり、深さは1m一寸である。覆土は下部で縄状の堆積をみるという特徴がある。

柱穴列(第41・42図, 図版23)

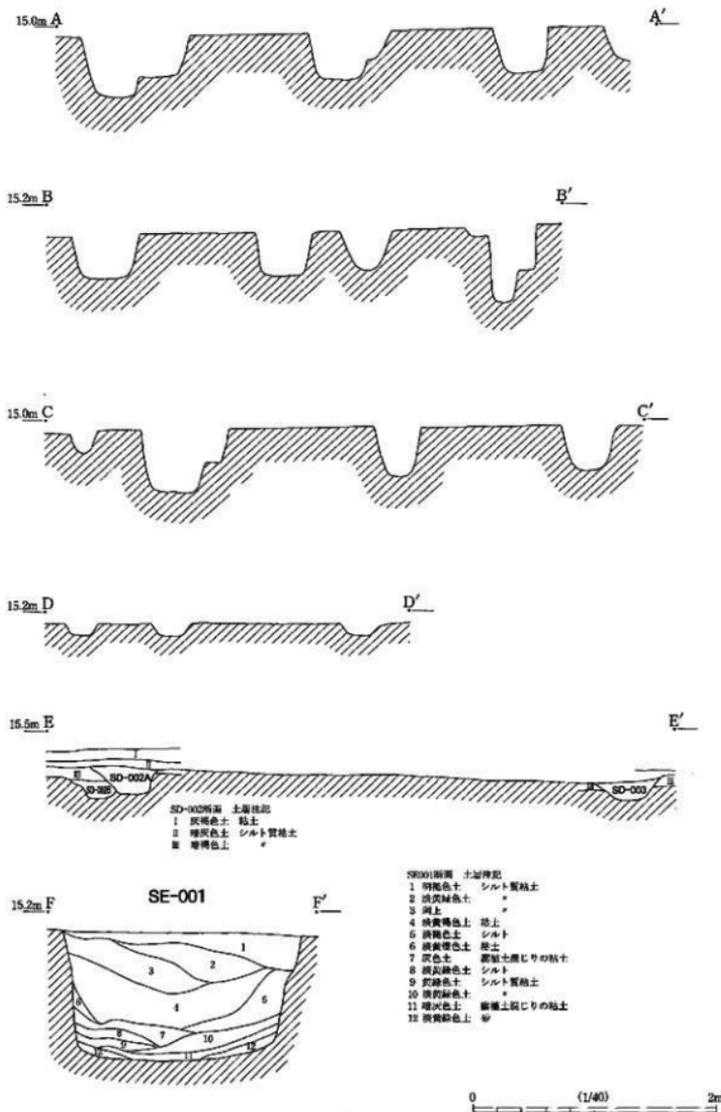
調査時にはSB-001に一括されていたが、ここでは別に報告する。2列存在し、一つは掘立柱建物の西側約1mに満たない幅にあるもので、川に臨む肩口に相当する場所であることから、建物の西側を保護する柵の柱穴であろうか。また一列はSD-003の南側に並ぶように走り、その位置から建物北側の空間を限るものであろう。

(2) 遺構に伴わない遺物

花輪遺跡では表土から約0.4m足らずで中世の遺構確認面となる。その結果であろうか、上ノ原遺跡と異なり、遺物は土師器細片と中世の陶器片が若干出土する程度であった。これは、段丘の縁という条件に加えて耕地整理や耕作の影響もあったものと思われる。



第41図 花輪遺跡遺構検出状況



第43図 花輪遺跡SB-001, SK-001, SE-001断面図

第3節 まとめ

1 縄文中期後半と後期の土器について

出土した縄文中・後期土器は全部で50点に満たず、あえて一項を設ける必要も無い程ながら、段丘面生成との関わりからあえて振り上げたものである。というのは、この段丘面はロームの堆積が見られず、その形成時期の確定に重要な手掛かりを与えてくれるからである。

その縄文土器の内訳であるが、中期後半～末と後期がそれぞれ半々程度（具体的には加曾利E式期後半と堀之内式及び加曾利B式土器）で、次に述べる1点の晩期例を除けば他時期のものは見られない。

そのほとんどが上ノ原遺跡での調査によるもので、花輪遺跡の調査面積等を差し引いてもこれは一定の傾向を示すものであろう。なお、層的にはこれといった状況は看取し得なかった。

さて、この土器については、それが当時のものというより後世の再堆積ないし洪水等の産物と考える向きもあるかもしれないが、土器自体に摩耗は見られず、また、破片が接合し、大きな破片となるものが多少見られることなど、その考えには否定的である。むしろ、新しく生まれた段丘面にその当時の人々の活動があった証とみたい。中期以前の土器片がまったく見られないのも示唆するところがある。

とすると、当遺跡における明瞭な段丘化への時期が縄文時代中期にあったことを予想させるが、河床に形成される礫層面まで掘っているわけではないので、河原～段丘化への過程までは不明というべきである。

2 縄文晩期の炉跡状遺構と土器

検出された炉跡は本調査区南東部の丘陵裾に近い平地である。古墳時代の水田畦畔面の下にあることから、当然それより遡る所産であるが、加えて炉跡状遺構の周囲（とりわけ北東2m以内）から形状の窺える縄文晩期の土器が出土したことから、多少の問題はあるもののほぼ同時期の所産として報告したものである。この調査所見をあえて繰り返したのは、他にもなくそれが縄文晩期も終わりの頃の類例の乏しい所産であることによる（この点、渡辺修一氏より御教示を得た）。

縄文晩期とりわけその終末～弥生時代移行期の遺跡は従前とは立地を異にしている例が多い。類例の少なさもその結果故であろうが、もう一つ大きな理由は明瞭な遺構に乏しいことが挙げられる。この乏しさであるが、そもそも竪穴住居ではなく、平地住居としても炉跡と柱穴痕跡また遺物は当然想定されよう。それが何故不明瞭となるかは言うまでもなく表土層の置かれた環境故と思われる。

今回良好に残り得た要因については、恐らく傾斜面に程近く、土砂の被覆が早かった結果ではなかったろうか。古墳時代の開田と耕作によって炉の焼土や周辺の炭化物、また、土器が破片となって結構浮き上がってはいいたが、それはそれで粘土層の中に固定させる役割を果たしたともいえる。そういう意味で、今回の事例は幾つかの幸運の賜と言えるかもしれない。そうであれば、そのような生活の変化をもたらした理由が何であるのかが課題として浮かび上がってくるが、その解決には既述した該期の遺跡の特殊性をふまえた調査の必要があると考える。

3 水田遺構

水田の検出された場所は丘陵北西山麓である。ここは湊川に直接面しており、川面との比高差は約15mである。地形は丘陵の裾で緩斜面となる他は僅かに北東方向に傾斜しており、恐らくこの条件と合致するかたちで畦畔の方向が決定されたのであろう。

その広がりについては、川の縁に沿って設けられた調査区でも丘陵裾から平坦面に移った辺りでのみ検

出されている点の一つのポイントとなると思われる。

水田の検出された場所は丘陵寄りの平坦地であり、検出状況からしてその東側へ延びていることは確実である。丘陵の北側には幾つかの急な沢があり、それを下った水は段丘面を刻み、小さな川筋を形成したはずで、それを間接的に水路として取り込むことは可能であろう。調査範囲との関わりで言えばその東側が小さな沢の延長に相当する。その意味からすれば、丘陵裾から幾分離れたところで同様な水田が東西に広く展開している可能性は十分にありう。

その内容については、一区画4㎡～10㎡程の方形ないし長方形の水田が基盤目状に連続するもので、いわゆる小区画水田と呼ばれるものに該当する。北東-南西方向の畦畔に規則性が見られること、調査区南西コーナーの露出した地山を基軸に僅かだが扇形に開いていることなど、背後の地形に影響されたあり方とも読み取れる。

肝心な年代については既述したところながら、古墳時代前期～中期の幅を想定してはいるが、その内容を加味すると前期の可能性が高いのではなかろうか。

ともあれ、遺構の包含層そのものが薄く、条件によっては確認しえないと思われることや、川縁の地が多く調査範囲に当たったことなど、一概に律し得ない、何れにせよ段丘面全体については後日の課題とする他ないだろう。

4 中世の花輪・上ノ原

花輪遺跡では湊川縁の段丘の端で、掘立柱建物及びその前後の空間と、それを区切る溝やピット列が検出されている。これらはそれぞれ家屋と中庭、また、背後の畠（他の用途かもしれないが）を含めた中世屋敷地の一角と予想される。南側は湊川に注ぐ一支流の花輪川によって上ノ原遺跡と分けられ、その結果、当該地一帯（上ノ台）はあたかも独立した川中島台地のような景観を呈している。当然、水利には恵まれずこの点は土地利用にも影響を与えたはずである。

一方、上ノ原遺跡では丘陵北西山麓において、東西に多少うねりながら走る小さな溝が5条検出されている。その性格については畠の境界ないし根切溝かと推測され、中世には地形に並行するかたちで畠が行われていたと推測される。但し、古代水田跡もそうであるが調査範囲から広い段丘面全体の土地利用を類推するのは危険であり、ここでは川縁の縁辺部（丘陵裾に近いという条件も加えてよいが）が畠として活用されていた事実を指摘するにすぎない。

そこで両者の関係であるが、遺構に伴うものも含め調査範囲から出土した中世陶器は何れも14世紀後半～せいぜい15世紀の前半に位する時期のものであることから、その時期にこの段丘面が活用されていたことは確かであろう。調査結果からすれば花輪遺跡が集落、上ノ原遺跡がその耕地と言えるかもしれないが、屋敷と耕地が混在する可能性も当然あると思われる。

中世湊川下流域は文献資料及び調査例共に乏しい。史料と検出された遺構とを有機的に結びつけるにはその懸隔は余りに大きいのが、その糸口の一つとなることを期待する。

注1 この点、小糸川流域における事例など、既に笹生衛氏による先駆的研究があり、当然比較検討すべきであろうが、現時点では問題点も多く割愛した。

笹生 衛 1999「東国中世村落の景観変化と面期—西上総、周東、周西郡内の事例を中心に—」『千葉県史研究』第7号

第6章 上一ノ原遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の方法 (第44図)

上一ノ原遺跡は湊川の支流相川沿いに広がる河岸段丘上にあり、事業範囲はこの内の南東部河川側と北東の突出部が含まれる。北東部は現況からみて遺構が遺されている可能性はほとんどないことから、南東部のみ確認調査を実施した。

調査は地形条件から、公共座標にはとらわれず、幅2mのトレンチを地形に直行するかたちで一定間隔で設定した。なお、南東部調査区は、公共座標(日本測地系)に拠れば大体南東隅で $Y=4500.000\text{m}$ 、 $X=-88400.000\text{m}$ 、北東隅で $Y=4650.000\text{m}$ 、 $X=-88250.000\text{m}$ のほぼ方形の範囲内にある。

2 調査経過

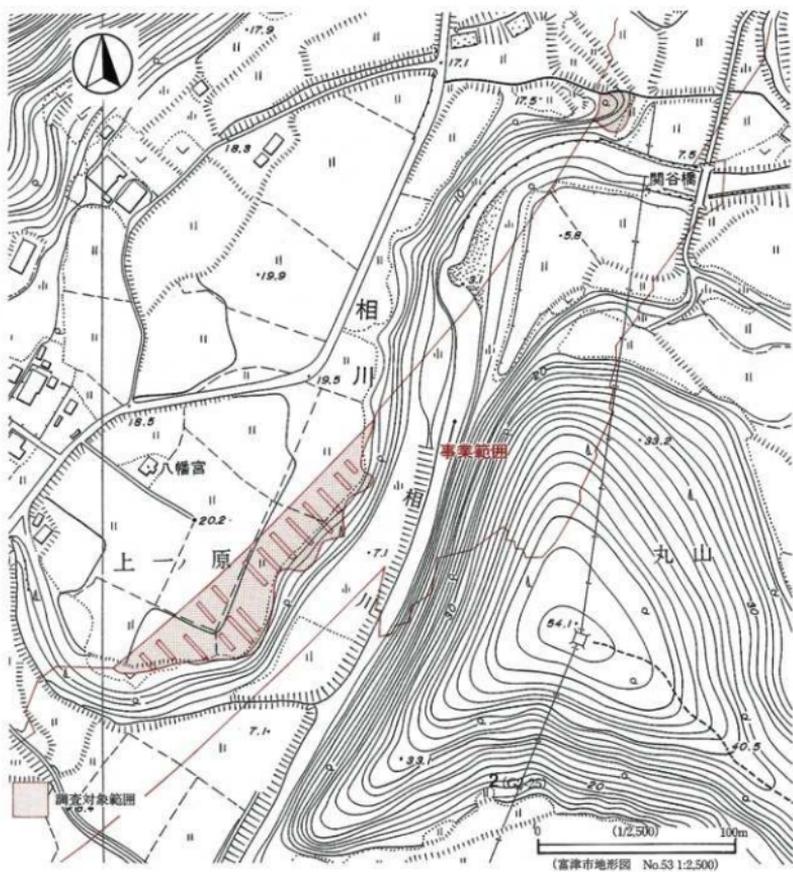
調査は確認調査を平成13年1月の厳寒期中に実施した。表土を剥ぎ、確認面を僅かずつ掘り下げた結果、旧状は相川に向かって緩やかに傾斜する地形であり、そこを地形なりに階段状の水田としたことが判明した。また近代の耕地整理によっても大幅な地形の変化(平滑化)があったようで、そのためか上段については大幅に削平されたことが明瞭であった。検出された遺構は時期不明の溝等で、遺物もほとんど出土せず、この確認調査をもって調査を終了した。

第2節 確認された遺構と遺物 (図版27)

既述したように、トレンチ内で検出された遺構は時期不明の溝等である。調査区の南側において東西に走る落込みを確認したので、拡張した結果、溝であることが判明した。遺物は出土せず、覆土の状況や底面の形状等から近世以降の所産であると考えられることから、報告は写真のみとした。出土遺物は僅かの近世・近代の陶磁器片及び時期不明の土師器細片のみであった。

第3節 まとめ

上一ノ原遺跡は従来、古墳時代の土師器散布地として把握されていた(『千葉県埋蔵文化財分布地図』(4))。今回の調査結果は必ずしもそれに沿ったものとは言いが、これは削平の度合と遺構分布状況との兼ね合いの結果でもあろう。ここでは段丘南東部が少なくとも生活痕跡の極めて希薄な地域であったことを確認したと言えそうである。



第44図 上一ノ原遺跡全体図

第7章 関山やぐら群

第1節 調査の概要

1 調査の方法

関山やぐら群は白狐川に面する丘陵中腹に位置しており、主要な2基は信仰の場として関山集落で維持・管理されてきた。また、一帯は上総特有の軟質泥岩の傾斜地ながら、遺跡周辺は比較的堅い岩質と地形条件も手伝って、遺構の埋没は僅かであった。

そのため、現地での発掘調査は僅かな土砂を取り除く程度であり、むしろ遺構の測量が中心となった。また、遺跡の性格上、併せて周辺の民俗調査も行った。なお、測量は業者委託とした。

2 調査の経過

調査地点は丘陵の先端部中腹に位置し、やぐら群はほぼ標高30m~40mの間にわたって存在した。既述した条件から、発掘調査そのものは4号~6号で多少の覆土を除去した他は清掃程度の作業で終了した。

現地は見通しのきかない険しい急斜面ということもあり、遺構の測量については基準点測量と併せるかたちで業者に委託することとした。遺構分布図は地形測量図を兼ねて1/200で、各遺構は1/20とし、報告書ではその成果を適宜縮小して掲載した。

第2節 遺跡の立地環境と周辺のやぐら (第45図・46図, 図版28)

関山やぐら群は富津市大字竹岡の東端に位置し、小字は延命寺である。遺跡の名称である関山は南側の関山集落に由来するもので、現在も石祠の管理は関山地区で行っている。

地形的には、白狐川流域に形成された狭い谷底平野を見下ろす丘陵先端部に立地するが、川に面していることからその裾は広く崖面を形成する。また、前面は川越しにまとまった平地が広がっており、その先端にやぐらが集中する。その分布高度は大体標高20m~40数mであり、最も低いやぐらでも川向こうの平地と比較すると約10m程高い位置にある。

丘陵の基盤は凝灰質砂岩よりなる締まった土層であり、やや斜めの層理をなす。竹岡周辺ではこの凝灰質砂岩と軟質泥岩が複雑に分布しており、共にやぐらに限らず横穴の構築には適した条件を備えているといえる。例えば、規模の大きな1号やぐらでは壁や天井共に崩落はほとんど無い状態であった。

確認されている周辺のやぐらは第45図のとおりである。このうち、関山やぐら群に比較的近い遺跡は、同じ白狐川流域河口の城山やぐら群、湊川流域の十宮やぐら群、岩井やぐら群、山崎やぐら群、山を越えた相川流域の岩見堂やぐら、妙藏寺やぐら、関谷やぐら群等であるが、遺跡の性格からして未発見の類例もあると思われる。

第3節 やぐら群の調査 (第47図~第49図, 図版29~33)

まとめでもふれているが、当遺跡はやぐら群として把握されていたが、調査の結果からしてそれは当地における多様な蒸制・信仰等の場であることが判明している。そのため、調査で付した1号~8号までの遺構番号を報告でも生かすこととし、その各々の性格については個別で述べることにした。



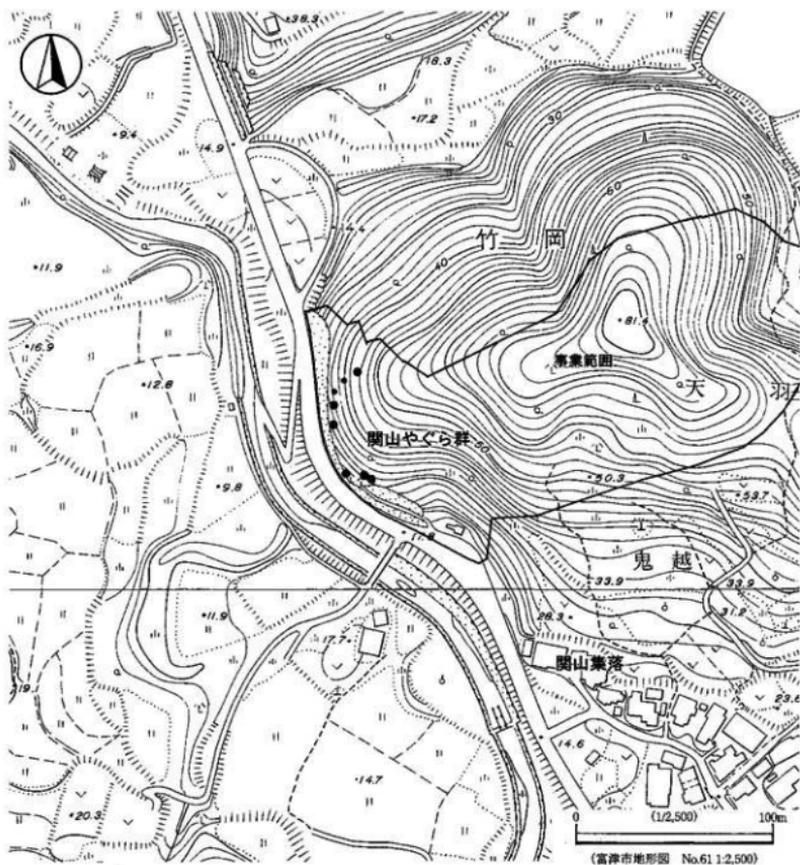
(国土地理院 1:50,000 富津, 平成12年発行)

第45図 遺跡の位置と周辺のやぐらの分布

名称	所在地	規模	時期	備	考
関山やぐら群	富津市竹岡	1基	中・近世		
岩井やぐら群	富津市数馬	14基	中世	五輪塔・仏像浮彫, 一部横穴墓再利用	
岩見堂やぐら	富津市相川	1基	中・近世	五輪塔浮彫6以上	市指定史跡
大滴横穴墓群	富津市岩坂	1基		横穴墓再利用のやぐら有り	
坂ノ下やぐら群	富津市惣毛	2基	中世	五輪塔有り	
山崎やぐら群	富津市湊	7基	中世	礎, 五輪塔線刻有り, 横穴墓再利用か	
円正寺やぐら群	富津市不入斗	6基	中世	磨崖仏2	
関谷やぐら群	富津市相川	3基	中世		
妙蔵寺やぐら群	富津市梨沢	2基	中世		
入山横穴墓群	富津市加藤	1基	中世		
粟王寺やぐら群	富津市竹岡	7基	中世		
十宮やぐら群	富津市竹岡	6基	中世	一部礎, 龜, 五輪塔有り	
不動院裏やぐら群	富津市竹岡	2基	中世	五輪塔有り	
城山やぐら群	富津市竹岡	2基	中世		

*引用は次の2文献に拠る。

- 1 財団法人千葉県文化財センター 2000 『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)』
- 2 松本 勝 1996 「上総西部地区」『千葉県やぐら分布調査報告書』 千葉県



第46図 関山やぐら群と周辺の地形

1号遺構 (第48図, 図版29)

遺構群のなかでは最も南端に位置し、唯一完全な遺存例である。標高は底面で丁度27mであり、主軸は斜面に対してやや右傾するかたちである。なお、前面の道路は拡幅前（市道松原・下堀切線）まで旧参道からまっすぐにやぐらへ続く道があったという。

形状は正面が多少上窄まりの長方形なのに対して、平面・断面は共に幾分隅丸の長方形をなす。規模は幅4.4m、奥行2.5m、高さ1.9mを有し、その中央に幅2.7m、奥行0.6mの入口部が付くが、右側は戦時中に弾薬庫として使ったときに若干拡張したという。奥壁の中央上位には竈を造り付けているが、ここには

近世以降の祠（天王様）が祀られていた。

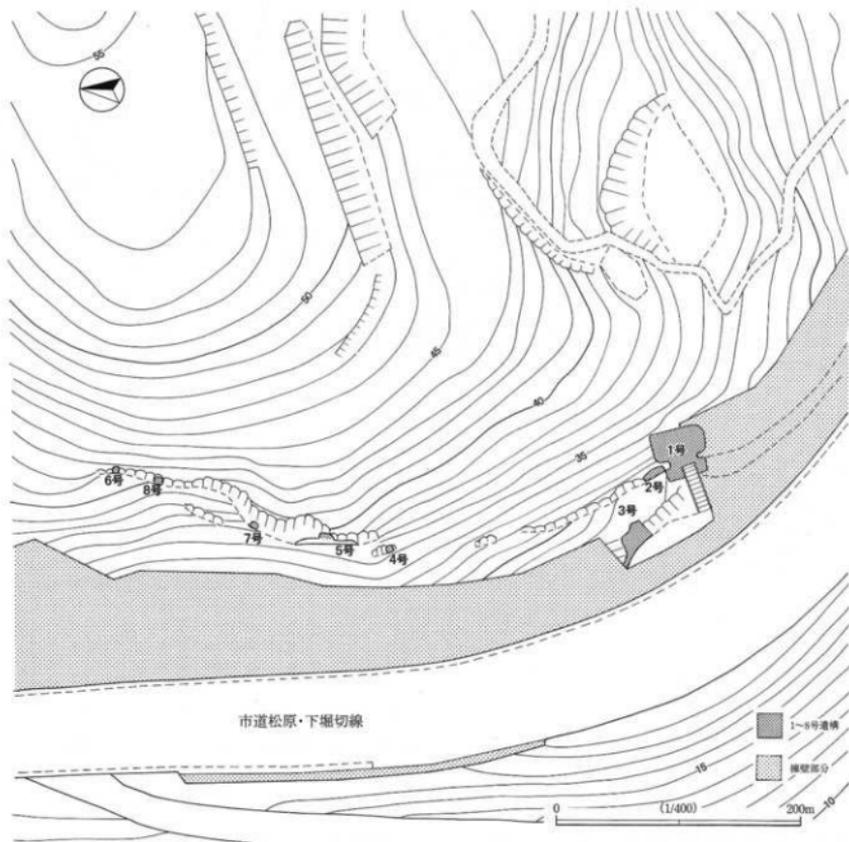
底面には墳無く、また、納骨塚と思われる坑も確認できなかった。出土遺物も同様である。

この1号のみならず3号遺構の石仏も含め、地元では天王様と呼んでいる。その祭礼は6月27・28日の両日であり、この日は洞内で飲食が行われたという。

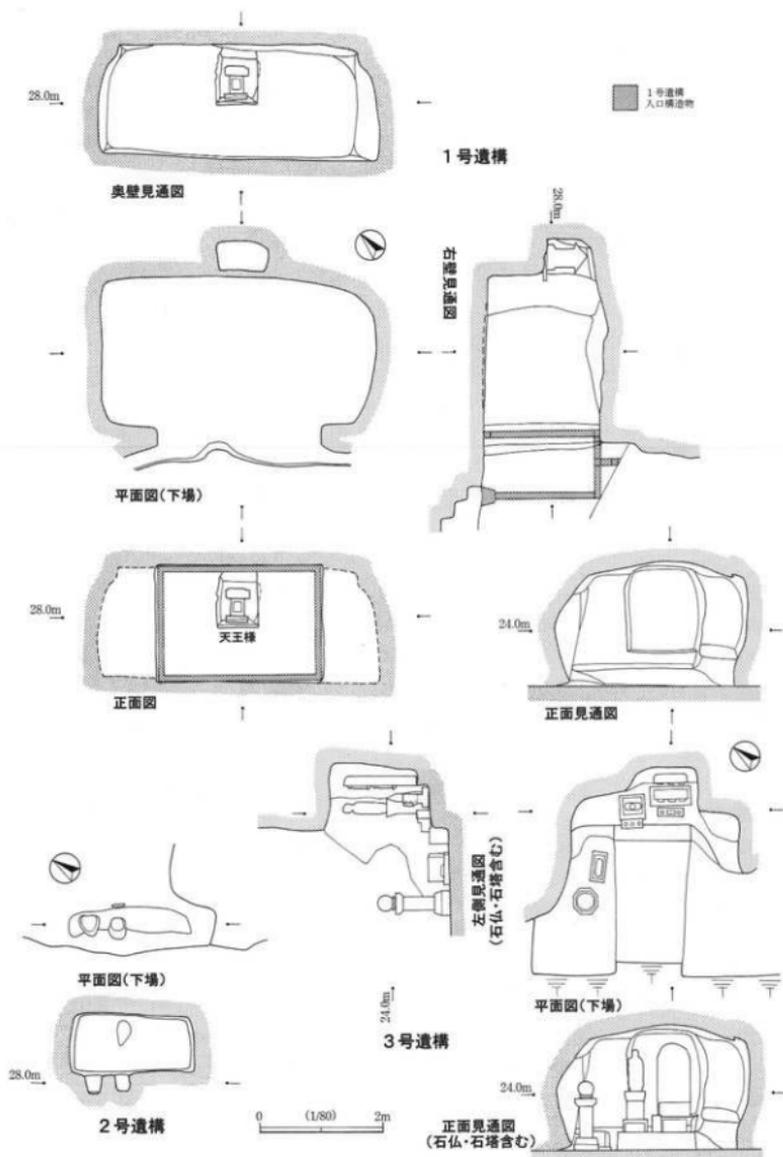
以上の点から、いわゆる窟堂（石仏など信仰の対象が置かれた窟）としての性格が考えられる。

2号遺構（第48図、図版30）

1号遺構の入口左側にあり、僅かに奥壁が残るのみの遺存状況である。標高は底面で丁度28mであり、



第47図 遺跡の位置と分布



第48図 1号遺構～3号遺構実測図

主軸は斜面の向きにほぼ直行する。

形状は、正面形は長方形であるが、平面・断面形共に遺存部が少ないため不明といわざるを得ない。規模は幅2m、高さ1mを有し、奥行は現存部分で0.4mである。底面には納骨壇らしき坑が2か所みられたが、確証はない。なお、奥壁上位に不規則な浅い掘込みがみられる。

底面端は一段おいて南北に3.5m近くの平場があり、その先は急斜面となることから、この平場を造成する過程で2号遺構の大部分は破壊された可能性が高い。なお、出土遺物は皆無であった。

以上の点からみて、やぐらの可能性が高いと考えられる。

3号遺構（第48図、図版30・31）

3号遺構は1号遺構の北西約3m先に位置し、高度差にして約3m下にある。主軸は斜面の向きにほぼ直行する。

形状は、正面形は外膨らみの長方形、平面・断面は共に長方形であるが、更に掘込みがあったり、段差を有したりという状況であり、定型として捉えられない。規模は、幅3m、高さ1.6m、奥行1.1mであるが、当遺構の場合計測箇所によっても多少の違いがある。

内部には奥壁を多少掘り込んだ位置に石造六地藏と三地蔵を、その左側前面に石造地藏菩薩像を安置し、前にはそれぞれ石造の線香立を置く。また、その左側一段低い位置には常夜燈と手水石が各1点縦に並べられていた。これも1号遺構と同様、かつては前面の道路から直接登るようになっていたのであろう。

なお、調査時ではやぐらとして扱っている。

4号遺構（第49図、図版32）

4号遺構より8号遺構までは、北側のより高い位置にあるグループである。この内4号は最も南側でかつ低い場所（標高約35m）にあり、主軸は斜面の向きに対しやや左側に傾いている。

形状は、斜面を0.7mの幅で奥行0.6m程に横から掘り込んだものであり、平面形は歪な方形である。底面には径0.5m、深さ0.3m程の坑がみられる。規模は奥壁で幅0.5m、高さ0.7m程であり、前面及び周囲は多少の平場がある。

いわゆる窟祠（祠のみが置かれた窟）かと推測される。

5号遺構（第49図、図版32）

5号遺構は4号やぐらの約4m北側に位置し、4号より約1m程高い場所にある。斜面を凡そ幅1m、高さ1.5mの範囲で約0.6m程掘り込んでいるものの、奥壁は平らではなく傾斜面に並行する形状である。採石をした結果であろうか。

なお、中央に大きな岩が横たわっていることから、その底面の精査は行っていない。

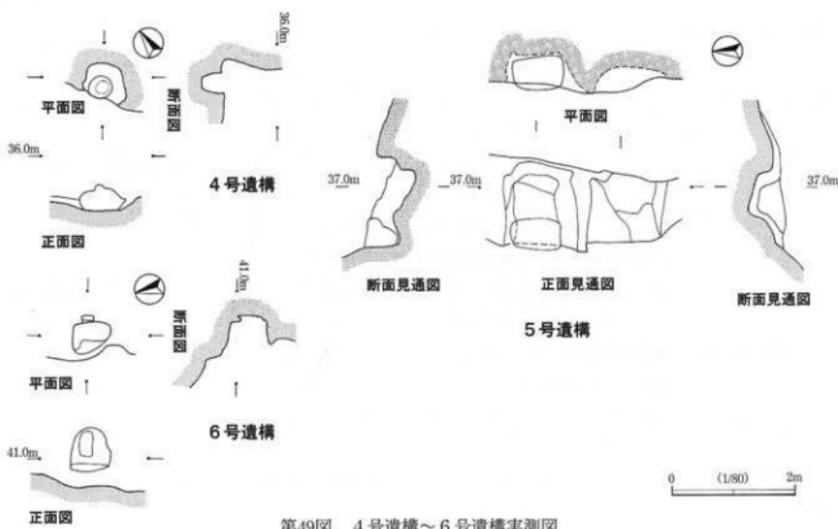
6号遺構（第49図、図版32・33）

6号遺構は北端に位置し、最も高い場所にあり（標高41m）、主軸は斜面の向きに対し直交する。形状は、斜面を幅0.7m、高さ0.7m、奥行0.5m程に横から掘り込んだものであり、平面形は歪な方形になる。また、奥壁には小規模な龕を設ける。なお、前面は多少緩斜面となっている。

いわゆる窟祠と判断される。

7号遺構（図版33）

5号遺構の北側約5mの位置にある。露出した壁面にタガネの痕跡がみられる。



第49図 4号遺構～6号遺構実測図

8号遺構 (図版33)

7号遺構の北側約10mの位置にある。同じく露出した壁面にタガネの痕跡がみられる。

第4節 やぐら内の石仏・石塔 (図版31)

1号には石祠1点, 3号には石仏2点と一連の石造物が置かれていた。遺構の性格を考えるうえで手掛かりとなることから一応の解説を行うが, これらの石仏等は消滅したわけではなく, 隣接する北側事業地外に移転されているので, ここでは要点のみに絞ることとする。

まず1号の石祠であるがこれは一見して近年造立したことが明らかであり, 「天王様」の石祠として祀られたものであろう。これに対して, 3号遺構の3点は①石造大地蔵, ②石造地藏菩薩立像, ③石造三地藏という違いがあり, このうち銘文があるのは②と③である。②は基礎部に「地藏大士」, 基壇に文化2年(1805)6月24日「関山村中」とある。一方, ③は明治14年7月(願主不明)再建とあるのみであった。銘文がない①についてはその様式からほぼ元禄～享保年間頃の造立と思われる。

竹岡地区は地藏信仰の盛んなところであり, その年亡くなった人のいる家では彼岸時に兄弟・親戚等が地区内各集落の「地藏様」にお参りする習わしがのこっている。関山の地藏もその一つであろうが, ここでは疣取り地藏としても信仰されていたようで, 小さな玉石が今もその前に沢山置かれている。疣取りを祈願し, 成就の際には倍にして返した結果である。

第5節 まとめ

関山やぐら群はその名称の通り、当初はやぐら群として調査を開始したが、その進展に伴い単純にやぐら群として捉えることは難しくなった。ここでは、調査時の性格付けの当否を含め現時点での一応の総括を以下行う。

まず、グループとして考えた場合、関山集落に近く比較的低位位置にある1号～3号（低位グループ）と、それより北側のより上位にある4号～8号（高位グループ）に分け得るであろう。

次に、その形態や規模からこれらを細分すると次のようになるだろうか。

- 【低位グループ】 1号—規模大きく、横穴墓と似た構造を有する。
2号・3号—何れも類似する内容かと思われるが、2号については後世の破壊があり、3号では改変が著しい。
- 【高位グループ】 4号—崖面を小規模に掘り込み、底面中央に坑を設ける。
5号—崖面を掘り込むも、整形無し。
6号—崖面を小規模に掘り込み、奥に龕を設ける。
7号・8号—崖面の掘削痕跡。

その性格については個別一応の判断を行ったところであるが、その理由も含めて再度ここでふれておきたい。

1号については底面に納骨壇なく、内部には石塔も遺存せず、また壁面に何らかの浮彫りや陰刻があるわけでもない。ただ、奥に天王様が祀っており、それが集落の祭りや連動していることからすれば、いわゆる窟堂と呼んでおくのが妥当であろう。なおその場合、古代の横穴墓を再利用した可能性もないとはいえない。

2号、3号は既述したように問題も多いが、やぐらの可能性があるものである。2号については、1号と近接しており、その位置関係から1号が後に造られたかともみるべきかもしれない。また、3号については、石仏を非常に窮屈なかたちで配置していることから、これらは本来別の場所にあったものをある時点でここに移したものと考えられる。

4号については中央の坑を納骨壇とみればやぐらの一類型になるだろうが、焼骨は出土しなかったし、石塔、石祠も存在しない。あえていえば窟祠であろう。5号も4号と同様である。

6号は掘込みがあることから、いわゆる窟祠ないしは単に祠でもよいだろう。7号、8号はそれのみでは遺構とも言い難いが、4号～6号に至る崖面整形と関連付けて捉えれば一連のもの（切崖整形に伴う工具痕）とすることが出来る。但し、なぜそこにだけ痕跡が残ったかについては明快な説明はしがたい。

この崖面整形であるが、よく観察すると2号脇から北側に向かって、あたかも山道造成に伴うように崖側を整形しており、4号～6号の間で顕著となる（高さ1.5m～2m）。6号から先は地形図でも読み取れないことから、遺構群と崖面整形とは一連のものと捉えるのが自然であろう。とすれば、それはまた道としての機能も果たしていたはずである。

これらの遺構の時期については、やぐらかと思われる2号、3号の遺存状況やそれ以外を含め遺物に事欠く現状では明確に指示しえない。ただ言えることは近世以降に1号、3号が使用された反面、4号より上の上位グループはそれらしき痕跡もない。その上限については中世までを視野に入れて考えておくべき

だろう。

一口にやぐらといってもその内容は実に多様である。とりわけ房総南部の場合、古代の横穴墓地帯と重複することからその再利用をめぐる問題もある。また、上総地域の場合、概して出土遺物そのものはもちろん、石塔や壁面の石塔・仏像の浮彫りにも乏しい。加えて、当例のように民間信仰と渾然一体となっている場合は、その当初の姿も含め環境復元には困難を感じる。結局それは当地におけるやぐらの系統や被葬者の階層、地域性と変遷過程などをトータルに捉えない限り困難でもあろう。既に指摘されているが、やぐらの周囲には切岸状の崖や壇、平場が往々にして認められる。当遺跡の4号以下がそれに該当するとすれば、1号～3号を含めた空間として今後の中世墓制研究の展開のなかで更に検討されることになろう。

写 真 图 版



館山道今大報告遺跡の位置 (四山やぐらを除く)



旧石器時代遺物集中地点 (東から)



SI-001 完掘状況 (南から)



SK-001 完掘状況 (南から)



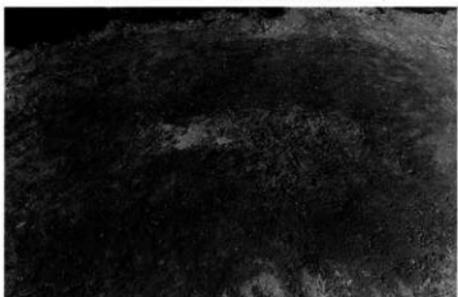
SX-002 検出状況 (東から)



大台1号古墳 完掘状況 (空撮)



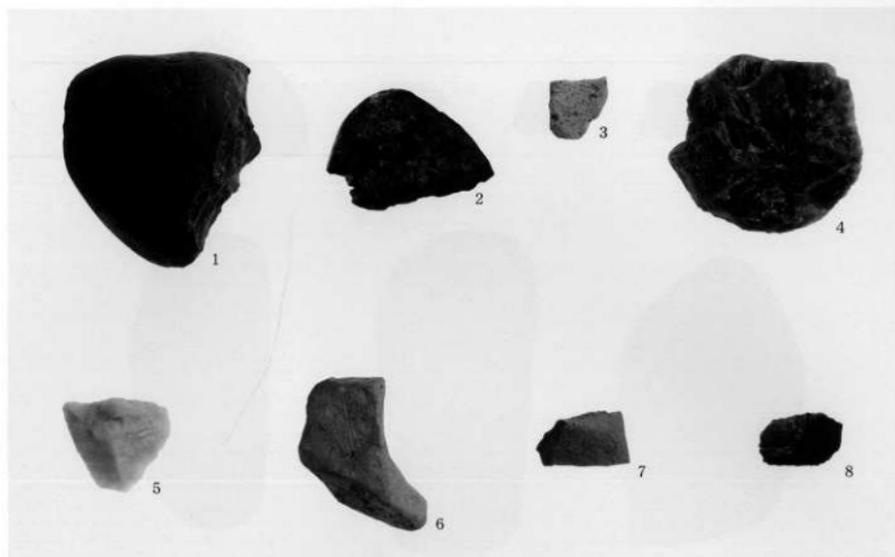
大台1号墳 完掘状況 (南から)



SX-001 検出状況 (東から)



SX-001 完掘状況 (東から)



旧石器時代石器 (第1文化層)

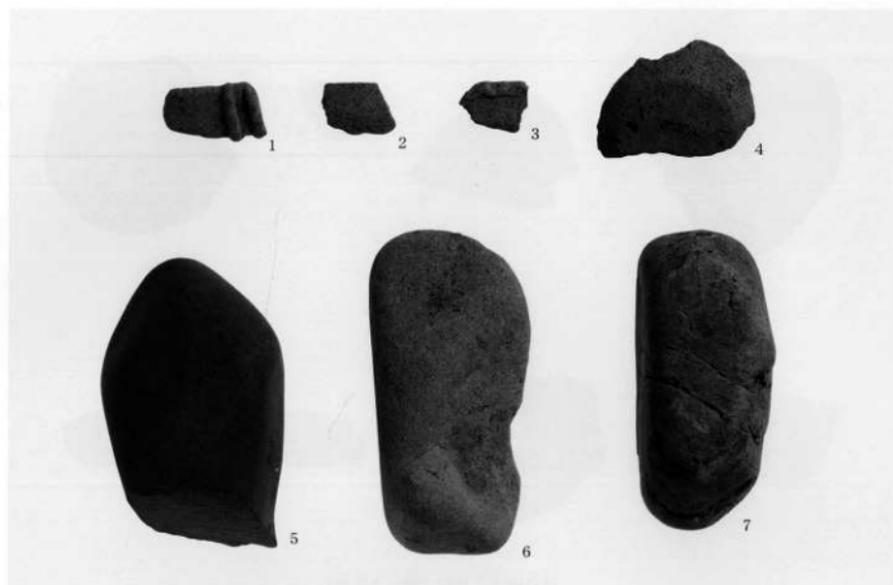


旧石器時代石器 (第2文化層)

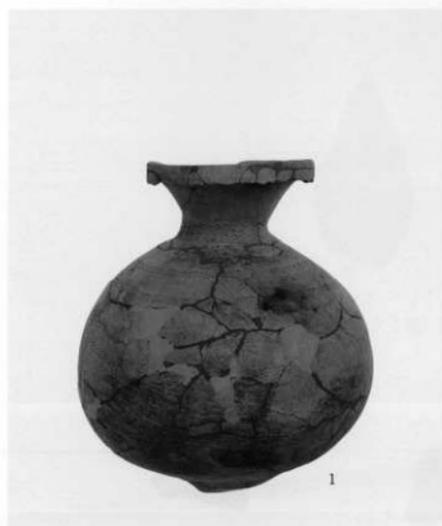


縄文時代の遺物

岩坂大台遺跡 出土遺物 (1)



SI-001 出土遺物



SX-002 出土遺物



遺構外出土遺物



SX-001 出土遺物



横穴遠景 (矢印 横穴の位置)



横穴近景

水神B号横穴群 遠景・近景



南北断面南半部（南から）



A-A'断面西溝（南から）



A-A'断面東溝（南西から）



C-C'断面（南西から）



美道部土層断面（南西から）



正面完掘状況（南から）



天井除去完掘状況（南西から）

水神B号横穴群 遺構（2）



刀子・土師器出土状況（南西から）



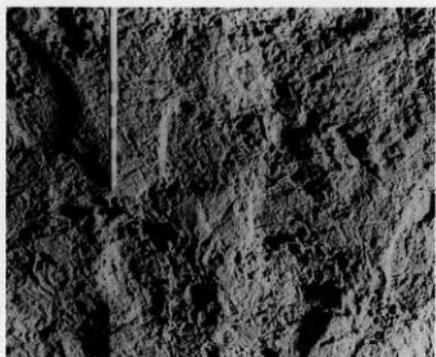
直刀出土状況（南東から）



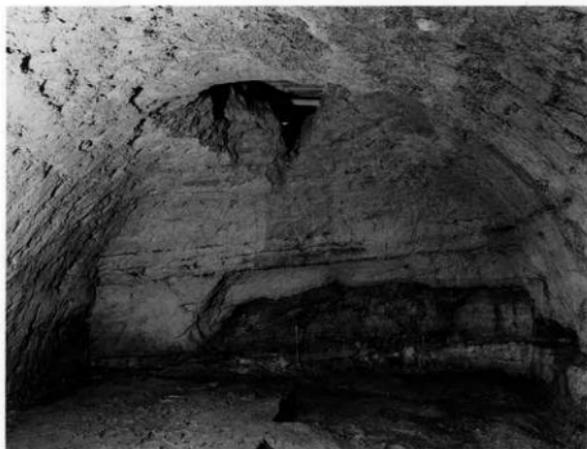
獣骨出土状況（南西から）



美道完掘状況（南西から）



東壁奥側ノミ痕跡（北西から）



奥壁（南から）



西壁・奥壁（南から）



東壁・奥壁（西から）



東壁入口側（北から）



西壁入口側（北東から）



1号横穴現況（南西から）

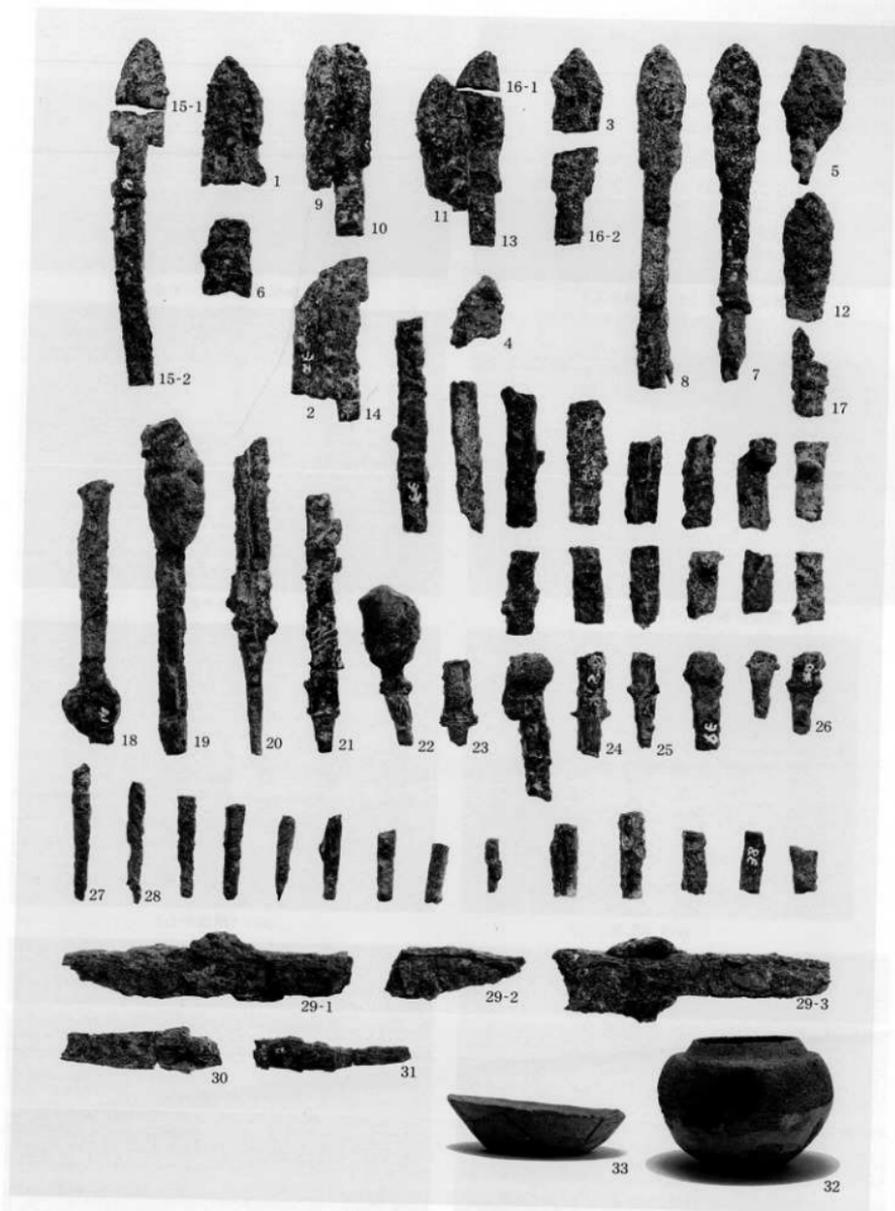


2号横穴現況（南西から）



3号横穴現況（南西から）

水神B号横穴群1～3号



水神B号横穴群 出土遺物



調査前風景（1）（南から）



調査前風景（2）（北から）



調査前風景（3）（北から）



確認調査風景



001（北西から）



003（南西から）



210（南から）



010全景（東から）



005 (東から)



010内周溝 (南から)



010外周溝・東側 (南から)



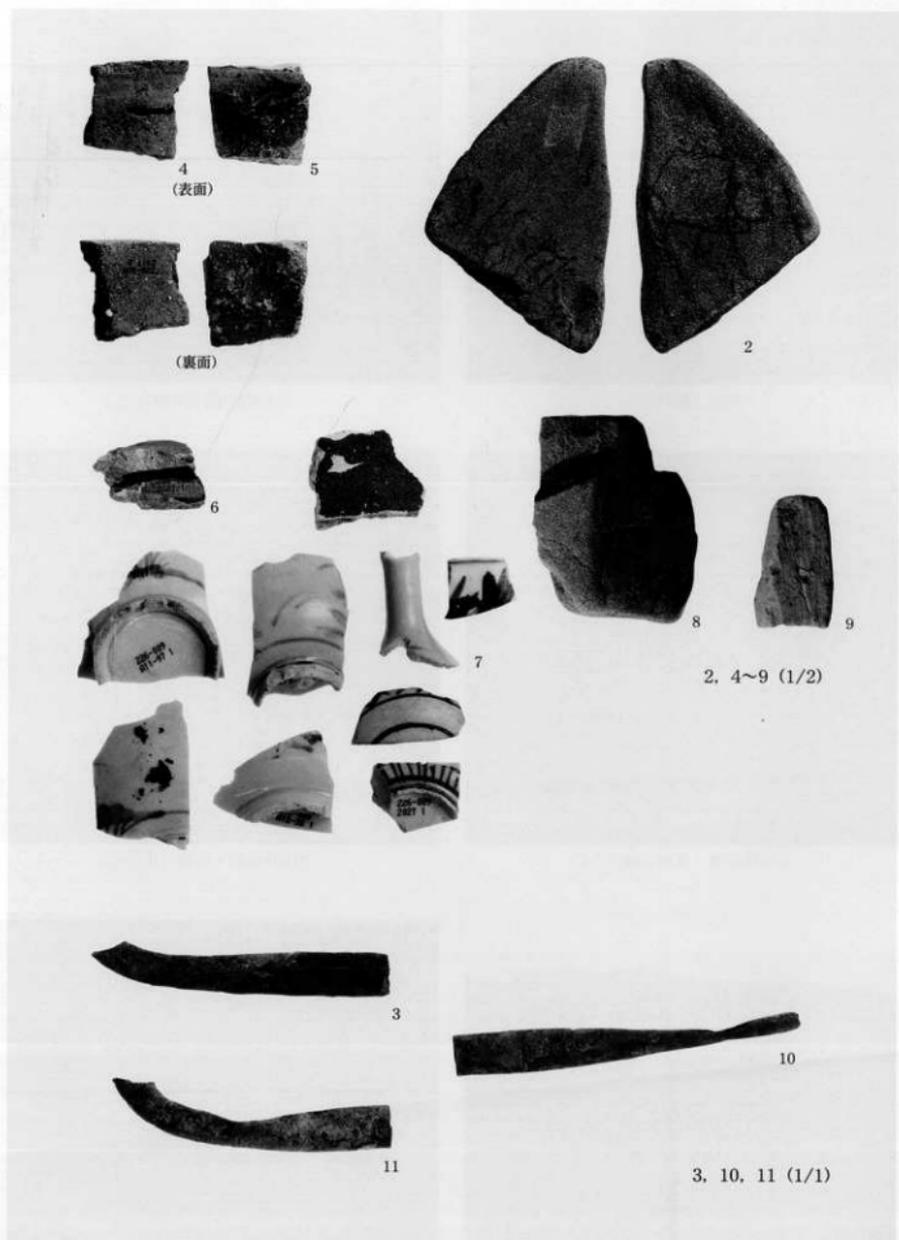
010外周溝・南側 (東から)



010外周溝断面



町田古墳遠景 (南東から)



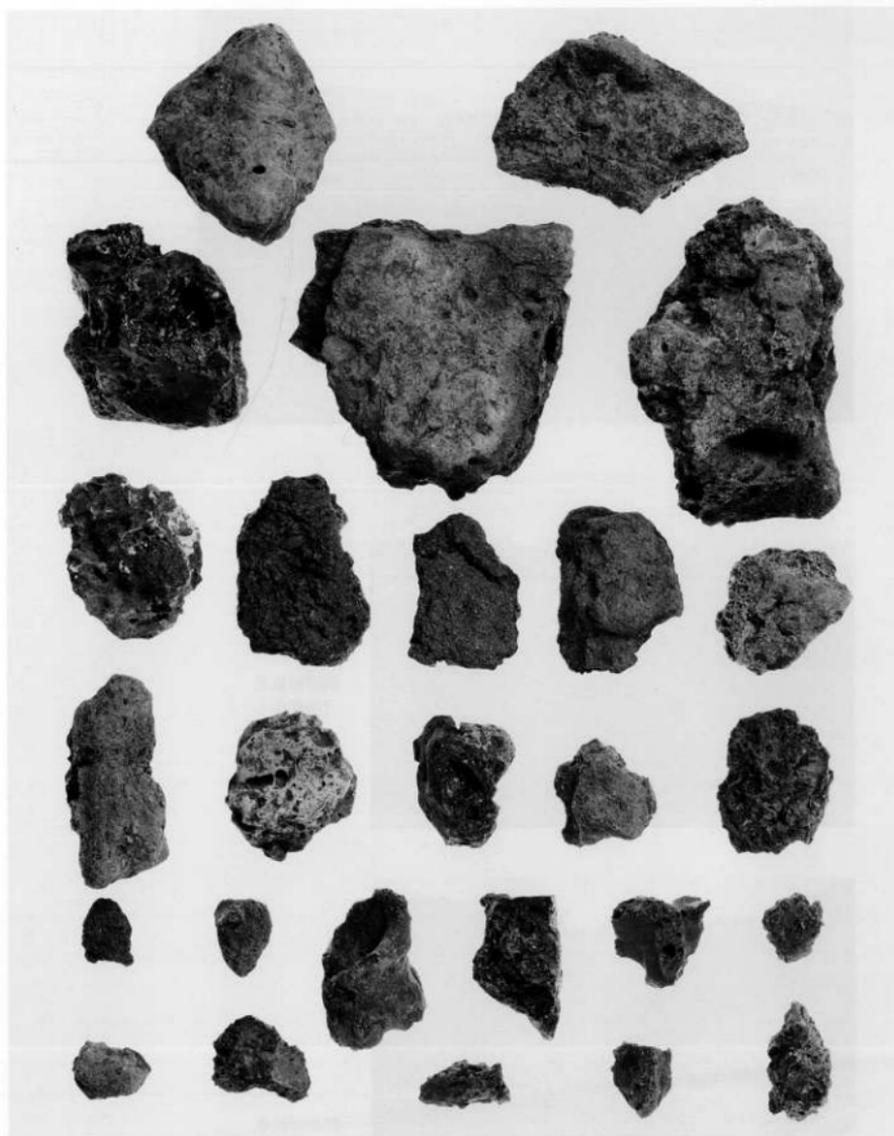
(表面)

(裏面)

2, 4~9 (1/2)

3, 10, 11 (1/1)

町田遺跡 出土遺物 (1)



町田遺跡 出土遺物 (2)



遺跡遠景
(南から)



調査前近景
(南側から)



調査前近景
(西側河川敷水田から)



確認調査風景
(南西側から)



確認トレンチ完掘状況



確認トレンチ断面

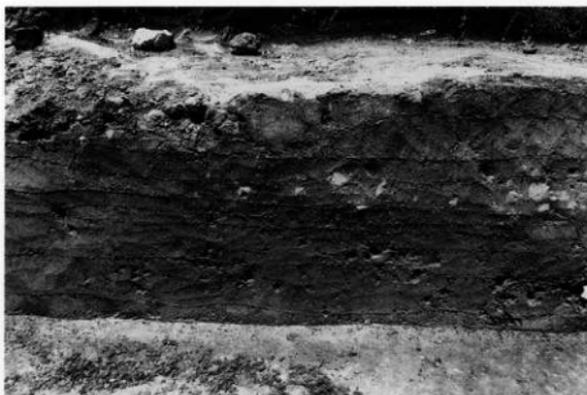


南端確認トレンチ断面
(丘陵裾部)

花輪上原遺跡 上ノ原遺跡確認トレンチ各景



花輪上原遺跡 上ノ原遺跡水田跡検出状況（北側上空から）



水田跡を覆う
土層断面



畦畔検出状況
(本調査区北東部から
北西部をみる)



畦畔内掘り下げ状況
(奥に見える高まりは
南西隅の岩盤面)



水田下より検出された炉跡状遺構（手前楕円形部分）



SK-001



SK-002



SK-003



SK-004

花輪上原遺跡 上ノ原遺跡炉跡状遺構と土坑



溝跡群検出状況



SD-009内常滑片口鉢出土状況

上ノ原遺跡中世溝跡群



花輪遺跡遠景（西側湊川河川沿低地から）



掘立柱建物（SB-001）及び溝等（南側から）

花輪上原遺跡 花輪遺跡遠景及び本調査区全景



掘立柱建物跡 (SB-001) と土坑 (SE-001) 近景 (東側から)



掘立柱建物南側の溝 (SD-001)

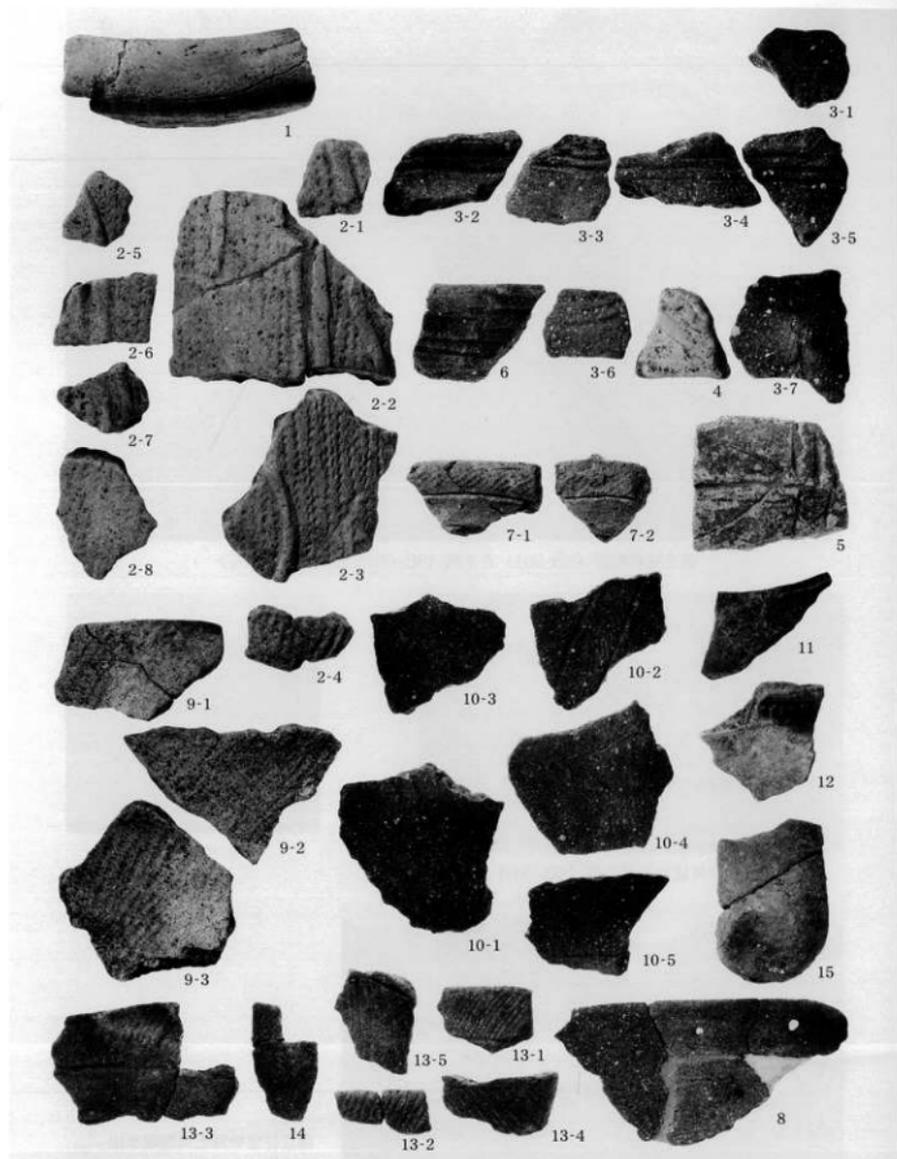


(SD-001) 溝断面

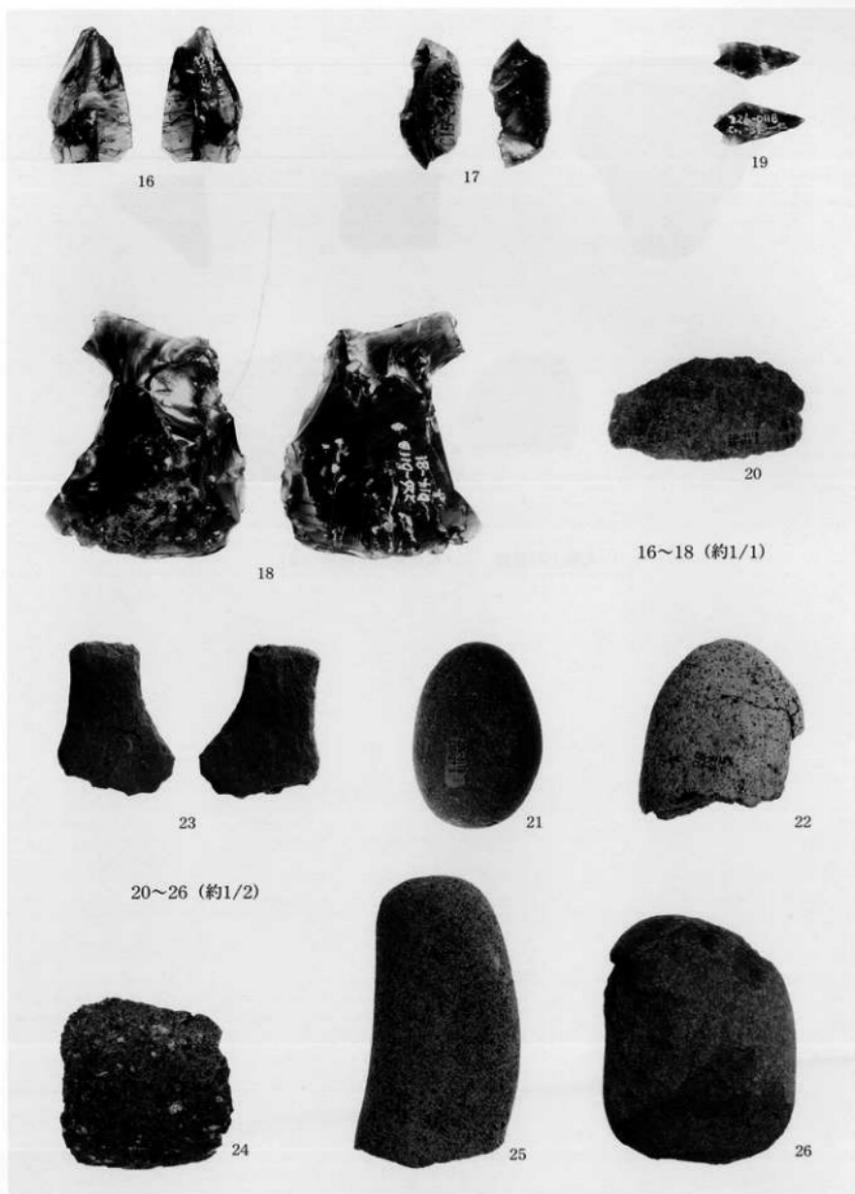


掘立柱建物跡と東側現水田
(遺構は未調査区に拡がる)

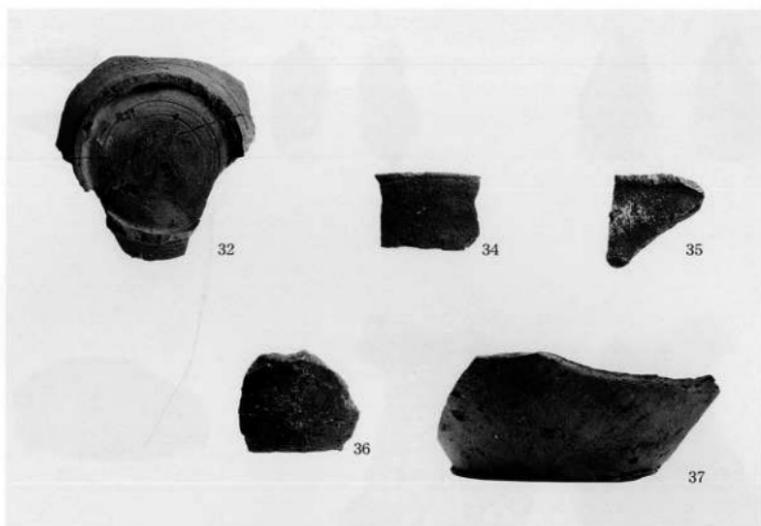
花輪上原遺跡 花輪遺跡掘立柱建物跡と土坑, 溝等各景



花輪上原遺跡 上ノ原遺跡出土遺物 (1) (約1/2)



花輪上原遺跡 上ノ原遺跡出土遺物 (2)



花輪上原遺跡 上ノ原遺跡出土遺物（3）



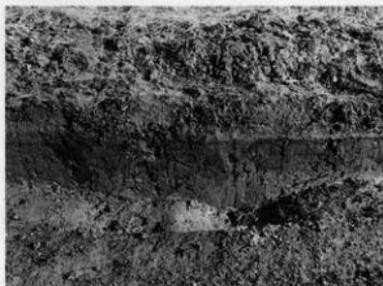
上一ノ原遺跡遠景（南東から）



上一ノ原遺跡近景



確認調査状況（溝跡検出）

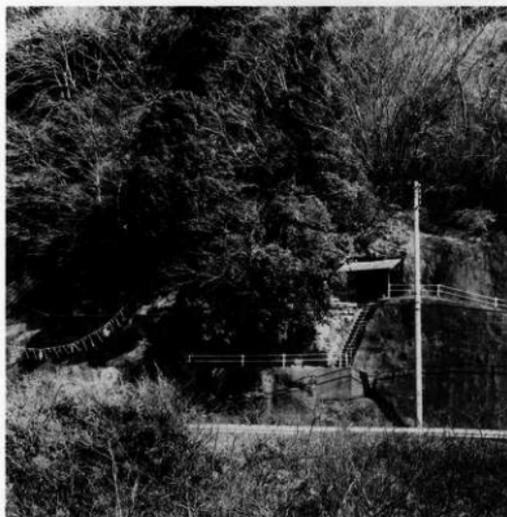


溝跡断面

上一ノ原遺跡遠景ほか



やぐら群遠景（白孤川対岸から）



現在の関山集落北側境界の
ツナツリ

やぐら群近景
（ひさしの奥の辺りが1号遺構
左側に関山集落のツナツリが見える）



1号遺構（西側から）
関山集落では祠のみならず横穴も
含めて天王様と呼んでいた。



左側壁



天王様石祠



右側壁（戦時中に多少拡張）



天王様現状（館山道脇の建物へ移転）

関山やぐら群 1号遺構



2号遺構（正面から）



3号遺構
（向かって右斜め前から）

3号遺構前面
（かつてはその前方に参道があった）





3号遺構内の石塔
左：地藏大士
（いぼとり地藏）
右：六地藏



石塔現況
館山道脇の
建物内に収納



地藏願の小石
（願かけ成就の際には倍に
して返すという）



六地藏
（その形式から17世紀～18世紀代と
推測される）

〈地藏大士銘文〉

基礎部	基礎部
地蔵大士	村中
鈴木市左衛門	関山
□?	施主
川	六月廿四日
	文化二年



4号遺構



5号遺構（正面から）



5号遺構



6号遺構（正面から）



6号遺構（右側面から）



6号遺構と8号遺構（手前8号，奥6号）



8号遺構



7号遺構



※ 2号遺構との類似性から掲載した。

参考写真 妙蔵寺やぐら（富津市梨沢）

関山やぐら群 6号～7号遺構ほか

報告書抄録

ふりがな	ひがしかんとうじどうしゃどう(きさらづ・ふつつせん)まいぞうぶんかさいちようさほうくしよ
書名	東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書
副書名	富津市岩坂大台遺跡・水神B号横穴群・町田遺跡・花輪上原遺跡・上一ノ原遺跡・関山やぐら群
巻次	8
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第541集
編著者名	小高春雄 半澤幹雄 沖松信隆 高梨友子
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL 043(422)8811
発行年月日	西暦 2006年3月24日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩坂大台遺跡	千葉県富津市 岩坂 大字452-1ほか	226	001	35度 13分 35秒	139度 53分 11秒	20030224～ 20030327	1,435㎡	道路建設
水神B号横穴群	千葉県富津市 岩坂 大字442-1	226	018	35度 13分 33秒	139度 53分 9秒	20041005～ 20041025	横穴1基	同上
町田遺跡	千葉県富津市 岩坂 字町田312-1ほか	226	009	35度 13分 24秒	139度 53分 9秒	20020902～ 20021216 20030224～ 20030327 20030901～ 20030909	18,613㎡ 2,790㎡	同上
花輪上原遺跡 (上ノ原遺跡)	千葉県富津市 花輪 字古草171-1ほか	226	011B	35度 12分 41秒	139度 53分 4秒	20010501～ 20010713 20020107～ 20020115	5,530㎡	同上
花輪上原遺跡 (花輪遺跡)	千葉県富津市 花輪 字上ノ台452-1ほか	226	011A	35度 12分 55秒	139度 53分 8秒	20020416～ 20020527	4,500㎡	同上
上一ノ原遺跡	千葉県富津市 相川 字上一ノ原203-1ほ か	226	010	35度 12分 27秒	139度 52分 53秒	20010109～ 20010131	4,437㎡	同上
関山やぐら群	千葉県富津市 竹岡 字延命寺 1466-2ほ か	226	015	35度 11分 52秒	139度 51分 50秒	20020301～ 20020329	やぐら等 8基	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩坂大台遺跡	包蔵地	旧石器時代	文化層2(Ⅲ層, Ⅳ層 下～V層)	ナイフ型石器, 円形 掻搔, 石器, 剥片	Ⅳ層下部の文化層から男 女合型有礎尖頭器出土。 北側で火葬墓が検出され たことにより昭和56年時 調査区から更に東側に火 葬墓群の範囲が広がるこ とが確認できた。 7世紀初め頃の横穴墓か ら豊富な遺物が出土。 二重周溝を有する終末期 方墳のコーナーを検出。
	包蔵地 集落	縄文時代 弥生～古墳 時代	竪穴住居跡1, 土坑2	縄文土器, 石器 弥生土器, 土師器, 石器	
	墓域	古墳～奈良 時代	古墳周溝1, 火葬墓1	骨甕器	
水神B号横穴 群	横穴墓	古墳時代～ 奈良時代	横穴1基	土師器杯・椀, 鉄製 品(直刀, 鉄鏝)	縄文晩期荒海期に属すと 思われる炉跡遺構と古 墳時代の水田跡を検出。
町田遺跡	古墳 包蔵地	古墳時代	古墳周溝1, 溝3, ピット群1	中世陶器(常滑), 近 世陶磁器, 砥石, 金 属製品(キセル)	
花輪上原遺跡 (上ノ原遺跡)	包蔵地 生産跡	縄文時代 古墳時代～ 平安時代	炉跡1 水田跡1面, 土坑4	縄文土器, 石器 土師器, 須臾器	
花輪上原遺跡 (花輪遺跡)	集落	中世	溝8条 掘立柱建物跡1, 溝 4, 土坑1	中世陶器(常滑)	中世屋敷跡の一部を検 出。 特記事項無し。 中世～近世にわたる多様 な岩窟遺構を検出。
上一ノ原遺跡	包蔵地	近世	やぐら・窟祠・窟堂	石仏・石塔	
関山やぐら群	やぐら	中・近世			

千葉県教育振興財団調査報告第541集

東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書 8

一富津市 岩板大台遺跡・水神B号横穴群・町田遺跡・
花輪上原遺跡・上一ノ原遺跡・関山やぐら群一

平成18年3月24日発行

編 集	財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809-2
発 行	東日本高速道路株式会社 東京都港区虎ノ門1-18-1
	財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809-2
印 刷	三 陽 工 業 株 式 会 社 市原市五井5510-1
